

関山

かんざん

第22号

「平泉」世界文化遺産登録5周年記念



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア

皇太子殿下中尊寺行啓

貫首 山田 俊和 10

あれから五年

清水 広元 14

「平泉世界遺産の日」シンポジウム

〔基調講演〕

「科学は平和への公共財」

池内 了 16

〔パネルディスカッション〕

「平泉に想い 平泉を語る」

パネリスト 池内 了・志賀かう子
佐越 良子・井上 雅孝

コーディネーター 佐々木邦世 38

第五十五回 平泉芭蕉祭全国俳句大会

特別講演

「奥のほそ道 回り道」

西村 和子 55

秘佛御開帳「一字金輪佛頂尊」

菅原 光聰 76

「平泉」世界遺産登録五周年記念法要

〔如意輪講式〕について

菅野 宏紹 78

唱導門の故地 安居院を訪ねて

佐々木邦世 81

天台寺桂泉観音出開帳

菅野 澄円 84

中尊寺秘仏と金色堂町民参拝

千葉 快俊 87

「平泉」世界遺産登録五周年記念
念仏会々浄土の祈り 報告

三浦 章興 89

中尊寺奉納神楽を終えて

千葉 快俊 92

三陸郷土芸能奉演

破石 晋照 96

風信／語録『知音』所収「風信帖」

西村 和子 98

天台座主傳燈相承式

千葉 亮賢 100

〈報告〉奥州藤原氏四代公の

レントゲン写真資料を寄贈されて

菅野 澄円 103

〈報告〉白山神社能舞台

屋根葺替及び耐震補強工事

佐々木五大 105

世界文化遺産平泉点描ガイドあ・ら・かると

外国人記者のみた中尊寺

岩淵 洋子 109

中尊寺境内樹名板の設置にあたって

阿部 慶元 112

福島県国見町

国史跡「阿津賀志山防塁」と中尊寺ハス

大栗 行貴 117

〔如意輪講式〕を書く―千葉方彩書作展―を終えて

千葉 高代 121

中尊寺光勝院建設事業

菅野 澄円 127

岩泉町でのポランティア活動報告

佐々木秀厚 128

中尊寺本堂にて

北嶺 澄照 130

陸奥仏青ポランティア活動に参加して

佐々木亮王 134

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕
この一年を振り返って

佐々木浩子 136

新刊紹介

関山句囊・歌籠

御神事能番組

陸奥教区宗務所報

執務日誌抄

御奉納者御芳名

浄財御奉納者御芳名

不動尊篤信御奉納者御芳名

〈表紙〉 国宝 金色堂金銅華鬘（部分）



「平泉」世界遺産登録5周年記念『如意輪講式』法要を厳修（6月26日）
藤原秀衡公の御母が延暦寺の澄憲僧都に託して制作した『如意輪講式』を850年ぶりに復元。
僧俗一体となって法要を執り行った。（記事78ページ、81ページ）



秘佛一字金輪佛頂尊御開帳
（6月25日～11月6日、記事76ページ）



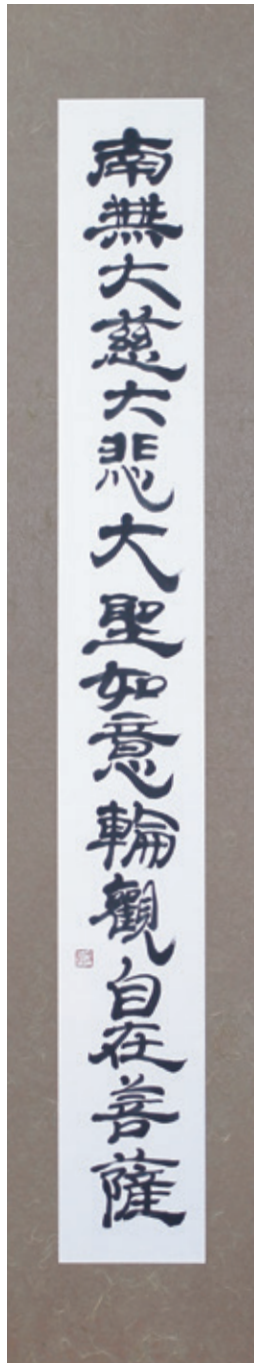
天台寺桂泉観音出開帳
（7月30日～9月11日、記事84ページ）



岳神楽（花巻市）



鶯鳥神楽（普代村）



「平泉世界遺産の日」シンポジウム（6月26日）
名古屋大学名誉教授池内 了氏が基調講演を行った。（講演録16ページ）



「如意輪講式」を書く—千葉方彩書作展—（8月27日～9月4日）
地元の女流書家千葉方彩(高代)さんが「如意輪講式」の式文を作品に。27点が展示された。
写真上は「観自在」。左の「南無大慈大悲大聖如意輪観自在菩薩」は、6月26日の法要当日、
本堂内陣に掲げられた。（記事121ページ）



「平泉」世界遺産登録5周年記念 念仏会～浄土の祈り～
(10月22日、記事89ページ)



中尊寺能「猩々」(11月3日)
能舞台屋根葺替後、初の演能 (記事105ページ)



本堂法話 (9・10月の日曜日)
貫首はじめ、一山の僧侶が「平泉」の歴史や仏教文化について法話を行った。



御神事能「鞍馬天狗」(5月5日)
山内子弟、菅原光哉くん・彩名ちゃん、菅野澄晃くん・結希ちゃんが舞台を勤めた。



地元園児による「謡」(11月3日)
町内二葉きり園の園児35名、元気よく。



岩手国体炬火採火法要 (9月4日)



京都市少年合唱団奉納合唱 (7月18日)



中尊寺 町民参拝「一字金輪佛頂尊と金色堂」～慰霊と復興の祈り～ (9月24日)
会場周辺には「夢灯り」が灯され(写真上)、夕闇迫る中、多くの方々が参拝された(写真下)。



文部科学大臣松野博一氏来山 (10月23日)

皇太子殿下 中尊寺行啓

中尊寺貫首 山田俊和

皇太子殿下には、平成二十八年十月二十一日、「第十六回全国障害者スポーツ大会・希望郷いわて大会」開会式ご出席のため、岩手県をご訪問されました。十月二十三日、一関市の市総合体育館でバスケット競技をご観戦後、中尊寺・毛越寺を行啓下されました。

皇太子殿下行啓 中尊寺御奉迎日程は

十月二十三日（日）

御着 十三時五十六分 金色堂前広場御着 金色堂・昭和天皇御製の碑御視察

十四時十九分 秘仏室御視察

御発 十四時三十二分 讚衡藏馬道御発

皇太子殿下は、金色堂前広場に専用車にて御到着になられ、お出迎えの中尊寺一山住職、一般参拝

者の歓迎ご挨拶を受けられました。その後、貫首の案内にて金色堂正面入口より入堂され、更に保護スクリーン内に入られました。貫首より、藤原清衡公の中尊寺創建の思い「中尊寺建立供養願文」や、眼前の金色堂についてご説明申し上げました。また、建武四年（一三三七）の火災により全山焼失という危機の中、奇跡的にこの金色堂と経藏および「中尊寺経」等の遺宝が焼失を免れたことをご説明申し上げたところ、皇太子殿下より

「本当によく残ったものですネ」

とのお言葉がありました。また、東日本大震災発生時は、本堂が被災して入堂できず、無事であった金色堂に一山の僧侶全員が参集し、震災犠牲者の回向法要を、奥州藤原氏四代公法要以外では初めて執行了した旨申し上げました。皇太子殿下には、東日本大震災の惨状を思われてか、

「大変な災害でした」

と復興を願われておりました。

その後、金色堂脇にある、昭和天皇御製の碑

みちのくの 昔の力 しのびつつ まばゆきまでの 金色堂に佇つ

（昭和四十五年、第二十五回岩手国体時。平泉中尊寺にて）

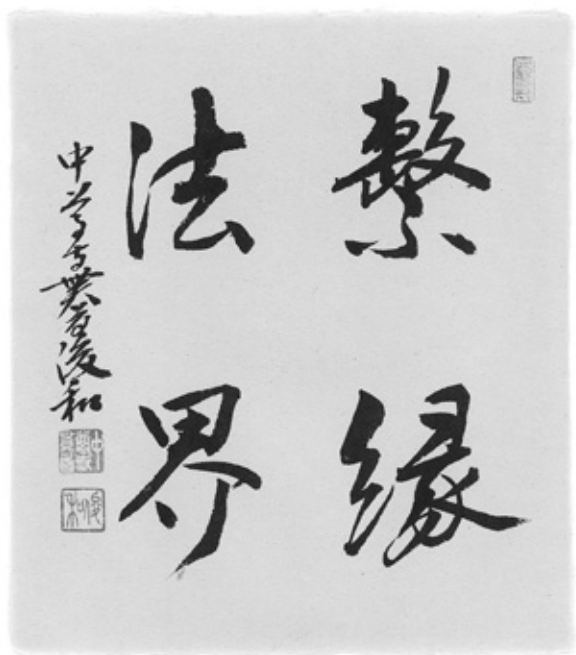
の詠をご熱心にご覧になっておられました。

再び金色堂広場にて、歓迎の人々にご挨拶下され、貫首の案内にて讚衡蔵の秘仏室に向かわれました。途中、讚衡蔵馬道に置かれていた、樹齢四〇〇年の比叡山の杉、根部分衝立に足を止められましたので、そのいわれをご説明申し上げました。

中尊寺秘仏・一字金輪仏頂尊は、以前不定期のご開帳でしたが、平成二十四年に、世界文化遺産登録記念としてのご開帳が図らずも東日本大震災犠牲者慰霊、復興祈願にもなった旨をご説明し上げました。今回のご開帳は、それ以来ということで同様の主旨によるものであり、加えて自然災害、紛争等、犠牲者慰霊、平和と幸福な世界となるための願いを込めている旨もご説明申し上げました。

この、「人肌の大日」ともいわれる尊像は、背面が無くあたかも高肉彫りのような形状であることなどご説明申し上げたところ、仏像近くに寄られて、大変興味深くご覧になっておられました。

皇太子殿下は、昭和四十九年、学習院中等科の修学旅行にご参加、お成りになられており、二度目のご来駕でありました。中尊寺史によりますと、明治九年に明治天皇の行幸が有り、昭和二十五年以降、今日までに天皇陛下並びにご皇族の行幸啓、お成りは十五度になります。



あれから五年

清水 広元

世界遺産登録五周年、東日本大震災から五年となる本年、震災で亡くなられた方々を慰霊し復興を祈願し、「平泉世界遺産登録五周年記念」として、県や近隣市町の御協力を頂き行事を行ってまいりました。これに先駆けて、一昨年は六月二十九日を「平泉世界遺産の日」として制定されました。今後一層、平泉に対する理解が深まることと期待すると共に、大変ありがたいことと思っております。

記念事業の期間中である十月二十三日には、第十六回国障害者スポーツ大会「希望郷いわて大会」に合わせ、本県ご訪問中の皇太子殿下は、中尊寺にお立ち寄りいただき、金色堂並びに一字金輪佛頂尊をご高覧頂きましたことは、まことに光栄の至りでありました。

中尊寺では秘佛・一字金輪佛頂尊のご開帳を中心とし、「平泉世界遺産の日」シンポジウム、「如意輪講式」復元厳修、また天台寺桂泉観音像の開帳や、本堂での貫首の

法話、神楽・郷土芸能の奉演、念仏会など、多くの行事が行われました。

六月二十六日に行われました如意輪講式法要は、今から二十年ほど前に、中尊寺円乗院の佐々木邦世氏が中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊号に論文を発表されたことがきっかけでした。それが縁で北総教区泉養寺前任職海老原廣伸先生、千葉大学文学部教授柴佳世乃先生、東京芸術大学音楽学部非常勤講師近藤静乃先生、東榮寺室生述成先生のご指導を頂き復元厳修の運びとなりました。本「講式」の制作を請託された秀衡公の母は大変信仰心が厚く特に如意輪観音を敬い供養されたと伝えられます。世界遺産五周年の年、本堂に御随喜頂いた一般の方々には説明が行われ、僧俗一体となつてこの如意輪講式が復元厳修されましたことは、誠に意義深いことでした。八六〇年前の宗風、法儀を味あわせて頂きました。

秘佛のご開帳は、説明の映像を見て頂き、さらに秘佛を前にして、お名前の由来やお姿について僧侶が丁寧な説明し、それぞれの思いが伝わるよう、最後に僧侶と参拝の方々と一緒に一字金輪佛頂尊の御真言「ポロン」をお唱えして

頂いたことは、私の心に深く残るものとなりました。

思い起こしてみますと、東日本大震災以降、自然災害が多くなっているように感じます。東日本大震災では、一九四一八人（二〇一六年三月一日現在、関連死を含む、消防庁）が亡くなられ、二、五六二人（二〇一六年二月十日現在、警察庁）が行方不明となっております。東日本大震災の後、平成二十一年長野県北部地震、福島県浜通り地震、いわき市地震、平成二十三年台風十二号奈良県南部・和歌山県で被害、平成二十六年台風二十六号伊豆大島にて記録的な大雨被害、広島市土砂災害、御嶽山噴火、平成二十八年熊本地震、台風十号の岩泉町・久慈市・宮古市の被害、島根地震、数え上げられないほどの災害が起きています。

東日本大震災では、被災地に足を運びボランティアをしました。広い水田のような所で、瓦礫を拾い集め種類別に分ける作業でした。中尊寺に帰ってきて、こればかりの作業で何になったのかとしばらく疑問を感じていました。しかし、ふと気づいてみると、被災地を忘れないことが大切であるということに気づかされました。

秀衡公の念持仏と伝えられる一字金輪佛頂尊は、天変地

異や国家の一大事に拝まれる仏さまと言われます。そのような意味で、今回のご開帳は、大変意義深いものであったと思います。

「平泉世界遺産登録五周年」ということで、多くの方々にご参拝頂きました。東日本大震災の復興にはまだまだ時間が掛かるものと思われれます。また、本年四月の熊本地震で被災した熊本城は、その修復に二十年が掛かると報道されています。私たちは、それぞれの立場で活動しながら、震災や災害のあったことを忘れずに過ごしていくことがなにより肝要と考えます。

（執事長）



「科学は平和への公共財」

講師 池内 了先生

司会 それでは、講師の先生をご紹介させていただきます。

池内了^{よしたる}先生は姫路市のご出身で、現在は名古屋大学名誉教授、宇宙物理学者でいらっしやいます（後掲プロフィール参照）。二〇〇七年からは世界平和アピール七人委員会の委員を務めていらっしやいます。

本日は、「科学は平和への公共財」と題してお話をさせていただきます。

それでは、池内先生、よろしく願ひいたします。

池内 こんにちは。今、ご紹介いただきました池内です。



基調講演（中尊寺本堂）

私は日頃、講演会をすることが多いのですが、今日は本堂で、この雰囲気は、いつもとはかなり違って、少々緊張しております。

中尊寺は本来、創建の趣旨が平和のため、仏土つまり福祉のため、そういうことを祈念して建立されたといえますから、それはまさしく、現在の私たちが持っている日本国憲法の精神に非常によく似ているということですね。その憲法の精神が、一部壊されつつある、という状況もあります。そういう中で、科学は本当に平和のための公共財になっているかとして、今日はこの「公共財」という語をキーワードとしてお話したいと思います。皆が共通してもって、かつ、それを十分に味わい尽くしている、その公共の財をもって、私たちが生きていく糧とすること。そのことに科学が重要な役割を果たすべきであるということをお話するわけですが、これから少し硬い話になりますが、過去の歴史を紐解きながら、科学がどのように変遷してきたか、をお話したいと思います。

実は、ここ岩手県の宮澤賢治と私は、宇宙物理学、あるいは天文学と言われる、そういう理系という点で似ている人間です。僕は高校時代から文学が好きでして、はじめ好きだったのは石川啄木で、啄木の短歌に惹かれてたくさん読みました。そして私は北大にも赴任したことがあります。啄木は函館に来て、札幌、小樽、その後、釧路まで北海道を漂流しましたが、私は彼が辿った後を歩きまして、彼の歌の碑をあちこちにたくさんめぐってきました。その後、宮澤賢治に惹かれていくわけです。

賢治は、私みたいな科学者から言うと、科学者の作家、科学者と文学者の二つの面を持った賢治であり、最終的には科学者の目から、文学者の目に移ったというか、文学者の目で一生を終えたというふうに思うんです。

その二面性ですね。二つの側面が、彼の作の中にあるのではないか、といろいろ考えまして、一つはブラックユーモアの要素があるのですが、当たり前前のことを言っている中に、

ブラック、怖いことを平気でしゃべって、それがユーモアのように、しかし恐ろしい、あるいは不安を煽るような言葉、そういう小説があります。少しブラックユーモアに似ているのではないかなあ、というふうに思ったりしたこともありました。

これは、いずれ本に著きたいと思うのですが、例えば、「フランドン農学校の豚」という話で、彼は農学校に勤めていましたから、そこでは豚を太らせて、早く太らせて、市場に出す。それが学校の科目として、あるいは仕事として宛がわれたのではないかと思うのですが、あの小説は豚の気持ちになって書いていますから、まさにブラックユーモア的に違った視点からの見方を書いている。商売、お金と絡んだ科学になると、豚をいかに早く太らせるかということに焦点がいくわけです。それは豚にとってはいかに残酷なことであるか。辛いことであるか、ということなんですね。無理やり食べさせられて、寝させられて、太らされて、ということなわけ

でしょう。彼はそれを、ある意味では非常に、まさにブラックな気持ちで、憂鬱な気持ちで書きながら、憐れ過ぎる、「もうこのあとはやめにしよう」と言うわけです。彼ははたと、自分が科学的であるということと追求している、それによって、いかに不自然な、豚を含めた、私たちの自然に向かう気持ちが、過酷で、酷いものであるか、そういうことに気がつくんですね。まさに、そこに気がつくということが、賢治らしい、賢治であればその気持ちとして出てくるのではないかと思うのですが、そういうことと科学者であるという面と、科学より以前に人間である。あるいはもつと自然をいくくしむとか、生き物をもつと仲間として捉えるとか、そういう発想ですね。

しかし、実はそういう発想を持ってしまつと科学者は仕事をやれないわけです。そういう面を彼が、ある意味では悩みながら生涯送った。だから彼は宗教に凝つたというのは、そういう仏さんの道をいろいろ考えたことの根源の

一つにあるのではないか。こういう視点で賢治論を書いたらどうかなあ、と思つているのですが、そういうことに関連するような、いくつかの小説とか詩もありまして、いくつか雑誌には書いたことがあるのですが、いずれ、私がそういうことを書くかもしれないということを記憶にとどめておいていただければありがたいと思います。

科学は平和への公共財、逆に言いますと、平和に寄与する公共財としての科学というものがいかなるものであったのか。そして現在、および未来にかけて、いかなるものであるべきかということをお話したいと思います。そして、パネルディスカッションのときに、平泉として、こういう公共財としての科学に寄与する道としてどういうものがあるのかな、ということも、もし可能だったら提案していけたら、と思います。

非常に大雑把に科学の歴史を辿りますと、科

学はその出発点においては人類の生命と非常に密接に繋がっています。そこから科学が発芽しました。そして、いわゆる近代科学、ニュートンが完成したと言われる近代科学が成立するまでは、実は「科学」という言葉はなかったんですね。「自然哲学」と呼ばれたわけです。自然を哲学する、自然を考える。ですから科学に対応する元々の言葉は「スキエンティア」*scientia*というのですが、ラテン語で「総合的な学知」ということを意味します。総合的な、いろいろな知識。だから自然科学だけの知識だけではないわけです。文化的な知識もあるし、それから技術における経験知というような、ことうやるとうまくいくよ、というような知識もあります。ですから、近代科学が成立するまでは、科学は文化だったんですね。

しかし、近代科学が成立して、十九世紀半ば以降、科学は大きく変身しました。後で具体的な中身を見ますが、制度化、技術化、商業化、軍事化が進歩した。要するに、科学が人間の生

活と非常に密接に関連するようになり、人間の生き方、生涯と深く関わるようになって、様々な側面で人間の生活、生産に大きな影響を与えるんですね。その結果として、自然を支配する、あるいは自然に対して人間が優位である、ということが強調されるようになります。それまでは対等だった関係から、人間の方が上なのだ、人間は自然を支配しているのだ、という、そういう考え方。それが科学技術という言葉で象徴されると思いますが、科学としての、つまり文化としての科学の側面と、人間が生きる上での技術としての技、技能。その両面を含んだものを科学と言うようになったんですね。

日本では江戸時代までは、いわゆる科学というものはなくて、博物学です。明治時代になって科学という言葉ができたんですね。そのときに、なぜ科学という言葉になったかというところ、輸入した時点で分化した科学、様々な分野に分化した科学であったわけです。だから、科学でも多面的な、スキエンティアとして多面的な側

面を持っていたのですけれども、そこから余分なものを切り落として、自然科学一辺倒になった。非常に焦点を明確にすることによって、科学の目標がはっきりする。目標とは、自然支配であり、人間優位であるという目標がはっきりできた、ということですね。

それで、そのようになった現在、私たちは、科学が本当の平和への公共財となっているのだろうか。真に平和への公共財となるために、科学はどのような方向に変わっていくべきなのだろうか。その方向を考えてみようというのが、今回の私の講演の主な流れで、そのような流れでいきます。その中で、先ほど言いましたように、宮澤賢治のような考え方、流れがどのように挟み込まれてきたかということも含めて話したい。

科学を見てもみますと、元々は自然哲学ですね。その一番初めの出発点は、これはいろいろな議論があるのですが、私の考えでは、火を使用し

たこと。大体三十万年前から五十万年前ぐらいで、ホモエレクトス。ホモエレクトスというのは、皆さんは北京原人というのをご存知だと思います。あるいはジャワ原人。「原人」と呼ばれている人たちですね。ホモエレクトス時代に火を使い始めたということが、私は科学の一番の出発点であると思います。

火を使うということは、エネルギー革命です。自分たちの手でエネルギーを自在に操ることができるわけですね。だから、それまで火を一切使っていなかったのが、火を使うことによって、実に様々な良いことが発見できるわけですね。例えば、料理に火を使う。それによって、それまで生で食べていた野菜、米類、雑穀、肉類、それを料理して食べる。あるいは、料理をする味がよくなる。あるいはきつちり温めると保存も効く。火を使うと猛獣が近寄って来ない。そういう危険性からも守られる。今の私達もエネルギーを使うでしょ。火を燃やしてエネルギーを取り出しているのですが、そのエネル

ギーを最初に使い始めた。それによって生産活動を始める。いろいろな面で私達の生活を助ける。まさに公共財ですね。これは全ての人間が共通して得ることができる利点としてのエネルギー支配。これはすごいことであつたと思います。人間が他の動物と区別できるいくつかの点。二本足で歩くとか、それから言語、言葉を使うようになったとか。言葉を使うことによって、いろいろなコミュニケーション、意志の伝達ができて、それによって役割の分割ができたというように、社会がどんどん変化していく。その根源のエネルギー源が火であるということですね。土器をつくって、火で焼く。そうすると、もつと頑丈で長持ちをする。そういうように、一つのものを見出すことによって、次々と関連する世界が広がってくる。これは科学や技術の特徴ですね。一つの側面が見つかると、そこから新しい、幅広い世界がどんどん広がっていくこととなります。

その結果として、一万年前に農業が開始され

た。農業が開始されたということは、主食を開発した。主食と言うと、普通は米と麦とトウモロコシ、馬鈴薯。これを四大穀物といっていると思うのですが、主なエネルギー源として取り入れる食糧、それが開発されたんです。

これには、栄養が非常に豊かで、収穫量が多い、貯蔵が出来る。この三点が決定的に重要な要素であつたわけです。そのうちに、家畜を自分たちで育てるようになる。労力の助けとなり、蛋白源である。肉とか卵とか、牛だと牛乳、そういう生産物を利用する。蛋白源ですね。皮や毛皮を利用する、現在の家畜と一緒になつた。

主食の開発と家畜という、この二つの側面は、それまで野生であつた植物や動物を、ある種の遺伝子を変えることによつて、より成長の早い品種で、よりいろいろな気象条件にも強い、そしてより栄養豊富で、実をたくさんつける。牛とか豚とかは肉をたくさん取れる、うまい肉をたくさんつくれる、そのように品種改良を行つてきた。

この品種改良というのは人類は昔からやってきました。決定的に大事なのは自然の下に品種を改良してきたことです。要するに少しずつ、少しずつ、受精させたりして一年かけて次の世代、次の世代へと変えてきたわけです。ゆつくり時間をかけて、自然とあまり対立しないようなものをつくり出した。ここに科学的的精神がありますね。

現在は、人為的な品種改良というのが行われているのです。いわゆる遺伝子を操作するという技術ですね。これは一度に品種を変えてしまつて、より肉をたくさんつくり出さうとか、あるいはトウモロコシとか大豆とか、除草剤に強い遺伝子に変えてしまつた植物が、今現在、市場にも出回るようになった。そういう意味では、あまりにも時間を加速した科学の利用なんですね。果たしてこれでいいのであろうか。過去の一万年の間に人類が経験してきた品種改良の方法と、現在の品種の改良。科学者は、遺伝子を変えるのは同じではないか、と言うわけです。

しかし、それによつてどのような作物が、どのような効果が次の世代、あるいはもつと先の世代に出てくるか、今のところわからない。そういう未知の部分を残しながらどんどん進めていっていいのだろうか、ということになります。

これが本当の公共財になるのだろうか。全ての人々が等しくそれを利用し、それによつて利益を得るためには、そんなに簡単に科学を運用していいのだろうか、という問題がありますね。

ここでもう一つ科学で重要なことは、紀元前二五〇年ごろ、アルキメデスという人を、皆さんも存知だと思いますが、一番有名なのは浮力ですね。王様から、この王冠に金がどれくらい混ぜられているか、鉛がどれくらい混ぜられているか、王冠を壊さないで調べてくれ、と言われて、彼も非常に苦しんだ結果、金と鉛の違いはどこにあるか。金一グラムの大きさと、鉛一グラムの大きさは違うというんですね。鉛のほうが多い。つまり密度という概念を使うと、

金のほうが密度が高くて、鉛のほうが密度が低い。それを水に入れて調べると、鉛のほうが体積が大きいから水がたくさん溢れる。それで鉛の量がわかるというので調べられる。そういうことで有名なのですが、実は、アルキメデスが、最初に戦争に協力した科学者なんです。

科学者というのは、ある意味では非常に異能というか、人々が持っているよりもいろいろな知識を持っているわけです。その知識を戦争を遂行するために使う。つまり人を殺すために使うということもあり得るんですね。これは科学者の非常に重要な役割といえば役割ではあつたわけです。まあ、現在もそうだと思います。この面は、アルキメデス以来、現在も変わっていない。このことはまた後でお話したいと思いが、公共財といいながら、実は軍のため、という役割も科学は担って来ています。そういう危険な面も私は強調したいと思います。

近代科学が始まるまでの科学は、自然に対する魔術と言われたんですね。魔術の典型は占星

術です。ホロスコープ (horoscope)、あるいは錬金術、鉛を鍛えて金にする。あるいは自然魔術、未知の力を仮定して、天と地が同じような関係にあり、天の間違いが地の間違いに通じるといふようなことを持ち出すのです。そういう未知なもの、原因が不明なものを魔術と呼んだんですね。

それで、魔術という言い方は、いかにもマジック、なんか怪しげなものだと今は捉えられていますが、その当時は怪しげなものではなかった。未知なもの、原因が不明なものを何らかの格好で説明したい。最後にわからないときに、神のお告げ、あるいは天のお告げ、あるいは神秘的な原因で説明しようとしたわけですね。これは、ある意味では宗教でも同じですね。私たちには未知のものがたくさんあるわけです。人はなぜ死ぬのか。その死の問題が、宗教では一番大きいかもしれません。それ以外にもなぜ戦争が起るのか、様々な不合理に対して宗教が答えてくれる。わからない未知の部分、原因がよくわか

らないものに答えてくれる。とにかく何らかの形で答えてくれる。これが宗教でもあり、魔術でもあった。

そういう意味で、魔術という言葉は、実は現代の科学にも当てはまります。現在は未知の事柄、あるいは原因が不明なものを神のお告げに頼るのではなく、何らかのモノ自身に変化したら、反応したりすることによってそういう現象が生じるのだ、ということの説明するのが現代の科学です。そういう意味では、僕は科学と宗教は本質的には同じ役割を果たしていると思います。未知のものに対して、何に原因があるか、ということを考えるからです。

確かに、普通の自然界に起る現象に関しては、自然の物質の運動で説明できることはほとんど見つかってきている。どんどんわかってきています。それで科学が優位になってきたというのはあるわけですが、本質的に、人間の運命などというのはわからないですね。それに関しては、

心の問題として宗教が厳然として存在しているというのも、これは事実です。だから、科学の世界だから宗教を越えたということには絶対にならない。人間は生きている限りは未知のもの、原因が不明なものが周りにたくさんあるわけです。それが全て解決できるなどということは、傲慢すぎるということでもあるわけですね。

自然現象が絡む事柄に関してはモノ自身で説明する。それは、実際にモノは物質ですから、実験で試すことができる。数学によって論証することができる。それが科学なんです。

現在においても、未知の部分、原因不明のものがたくさんありますから、それを科学者は物質で説明しようという苦勞している。十七世紀に科学革命が起こって、物質で説明するという流れができたのですが、やはりあくまで自然哲学、文化としての科学であつたわけですね。

十九世紀の始めに起つたのが産業革命ですね。地下資源文明と私たちは呼んでいます。地

下資源、一つは化石燃料を掘り出す。これはエネルギー革命の一番重要な側面です。地下資源を掘り出して、それをエネルギーとする。もう一つは地下の資源、いろいろな鉱物資源を掘り出して、それによって機械化する。機械を動かす。そういう文明をつくり上げたんですね。この頃、地下資源文明が始まると共に技術が充実して、科学をスキエンティアという総合的な学問の地位ではなくて、自然科学を意味するようになる。これがサイエンス (science) です。サイエンティストという言葉が、一八四〇年ころできたのですが、つまり科学者が出現するようになった、そして科学は自然科学を意味するようになってきた。さらに、もっぱら自然科学は分析的手法でどんどんその根源は何かということ、専門化が進んで行った。

その結果、科学が非常に重要な成果をもたらすようになりました。それが生産過程と結びつくことによってものを生産する、産業革命の、非常に大きな、根源的な力になったんですね。

生産過程を機械化することによって私たちの生活が豊かになった。科学の非常に大きな功績として、私たちの生活を豊かにし、健康を維持し、寿命を長くする。それから農産物も非常に多量につくれるようになった。いろいろなプラスチック面をつくりました。

それに国家が目をつけなければならない。国家が科学に莫大な投資をする。国家が、科学のスポンサーになったんですね。科学者を国家が雇うわけです。どういう格好で雇うかということ、今の日本と同じで、大学をつくって、そこで組織的に科学研究を行わせる。あるいは工学的な技術開発を行わせる。これを、科学の制度化といいます。国家が科学のスポンサーになった。

これは現在もそうです。現在の私達も主に国立大学、私立大学もかなり国から研究費をもらっています。国が科学の根本を担うということをやっていますね。国が担う。この面が非常に大きくなると、公共財ということの意味が少

し変わってくる。国家のために科学が役立つということが公共財というふうに解釈されがちになってきている。公共財というのは、本来は国家のためだけではなくて、私達一人ひとりの人間の幸福であり、福祉のために使うべきものが、国家がまず先取りをする。なぜならば、国が金を出しているから、ということですね。

それから科学の技術化というのは、今言ったように、科学と技術が結びついて、より多くの生産を上げる。より豊かな生活を満たしていく、実現していく。その商業化というのが資本主義の確立ということですね。

まさに、先ほど、科学の元々は錬金術とか、占星術とか、そういういわゆる魔術が基本になって科学が生れてきたということですが、実際にこの錬金術から生れたのが化学ですね。薬品とか染料とか香料をつくる。あるいは鉱物を溶かして、新たな金属物質をつくっていく。冶金、製鉄とかですね。そういう自然の物質をいろいろに加工して、より私達がいやすいもの、

より便利なものに変えていくということ。これは錬金術が変質してきたものです。さらに錬金術が変質して医学ができた。要するに、薬をつくって医学に貢献する。医科学です。さらに技術が徹底すると製造業が盛んになり、いろいろなものを大量生産し大量に消費し大量廃棄する、という構造をつくった。

それからもう一つ、実は非常に大事な科学の側面があります。科学の軍事化ということ。第一次、第二次世界大戦で、科学者が軍事動員されたということは、皆さん、よくご存知ですよ。第一次世界大戦では、毒ガスが戦争に使われたということはご存知でしょうか。それで何万人の人が亡くなり、後遺症で苦しんだんです。あるいは、戦車とか、潜水艦とか、魚雷とかというのは、全部第一次世界大戦で発明されたんです。それまで、それに似たものはあつたのですが、軍事利用したのは第一次世界大戦です。それから一九〇三年に飛行機が初めて

飛んだんですね。ライト兄弟が飛ばしたのですが、なんと一九一三年、たった十年後に戦闘機が飛んでいるんです。たった十年の間に飛行機が戦争に使われたのです…。はじめライト兄弟が飛ばしたときには、せいぜい一〇〇メートルぐらいしか飛ばなかった飛行機が、なんと十年後には戦闘機が一〇〇キロぐらいの敵方の領域に侵入して、爆弾を落として帰ってくる。そういうことを実現しちゃったわけです。これを、科学者がやってきたわけですよ。実は、私たちは科学の功績、功労ばかり言うけれども、こういう軍事力の側面はどうしても目をつぶってしまふ、というところがありますね。

そして、第二次世界大戦では、原爆がつくられた。そして広島、長崎に落とされました。その後水爆が使われて、第五福竜丸、ビキニ事件ですね。それが起ったわけです。奇しくも広島、長崎、ビキニ、日本が全部被害を受けている。それにも拘わらず、日本が福島で再び原発事故を引き起こしました…。スリーマイル島の原発

事故（一九七九）ではあのように放射能を撒き散らすことはなかったのですが、チェルノブイリ（八六／現ウクライナ）で大爆発が起きました。それに次ぐ福島事故が起きました。また放射能の洗礼を受けた。そういうことにつながるわけですが、原発の元々はマンハッタン計画にあった。そういう歴史があるわけですね。

科学の軍事利用、特に第二次世界大戦以降については、新たな科学者に対する責任が問われるということになります。

今、西洋の科学について話したので、日本の科学はどうかというと、日本では、いわゆる科学者というのか、科学的なことを研究して生活していた人が出現するようになったのは、江戸時代ですね。それも非常に数少ないんですよ。一番科学者らしいのは医師。実際、薬をいろいろ調べて、薬を使って患者さんを治すという、科学者としての医師はいたのですが、お医者さんにかかる人は非常に少ない。あと、天

をやった。その時代から博物学としての科学が始まりました。博物学は様々なものの性質を調べて、それが薬に効く、それから漂白剤に使える、いろいろな薬品に使える、肥料に使える。そういうふうにごんごん用途を広げて行っただけですね。だから物産学というのは博物学という名前もあります。あるいは民俗学というふうにより幅広い分野へと変わって行きました。

この博物学の時代というのが、私は科学の最も素朴な出発点の時代であり、現在においても人々はいろいろな面で、趣味で貝殻を集めるとか、植物採集をするとか、それと似たような発想で、非常に重要なことではないかと思うのですね。そして私が注目している人がいます。町人学者で木村兼葭堂という人がいるんです。この人は大坂北堀江で造り酒屋をやっていた、酒屋の主人です。本草学を学び、大コレクターで莫大にものを収集して、それを人に見せて、人と交換して、かつ自分が絵を描き、文章を書き、

文学者が暦をつくりました。そういう事例はありますが、それ以外にはほとんどいなかった。科学者が出現するのは、江戸時代の半ばから後半ですね。そこで本草学者というのが出現します。これは現在の植物学、動物学につながる分野で、元々は中国から来たのですが、薬となる草。今でもありますよね。柳の皮が効くとか、いろいろあるでしょう。そういう薬となる草や木、あるいは鉱物、あるいは動物、そういうのを集めて、それを精製して薬にします。これが本草学として自立したんですね。

それで、それをいろいろ集めて、効能、効き目がわかってくると、いろいろな人に見せたい。それで物産学というのがつくられるようになります。今日の博覧会ですね。これは平賀源内という人を皆さんご存知だと思いますが、平賀源内が言い出して、大々的な物産展をやった。言い出したときは小さかったのですが、非常に大宣伝をやって、全国から物産を集めて展示会

様々な文化的活動も行ったという、博学多才な人です。あるいは、蘭学者の司馬江漢、銅版画を日本で初めて出版した人ですね。洋画を日本で最初に描いた人です。あるいは山片蟠桃という人がいます。これは升屋という大阪の金貸し問屋、両替商ですが、その番頭さんをしていたのが山片蟠桃です。この人は『夢の代』というすごい博物学に関する本を書きました。そういうふうには、町人が、一般の人が日常的な仕事をしながら、科学、とくに博物学の研究をしたということがあったんです。

これは、日本の科学の伝統として非常に重要な側面があるのではないかと思います。科学は専門家がするばかりの今の時代みたいではなくて、別の仕事をしているけれども、ゆつたりと学問を楽しみながら知識を広げていくという、そういう役割を江戸時代の人は意識せずにやっていたわけですね。それこそが公共財としての科学ではないかというふうに、私は思っているんです。

明治維新になると、日本は近代国家として西洋に追いつけ追い越せばっかりで、馬車馬のようにお尻を叩かれて、どんどん科学技術という言葉が拡がって行きます。日本の科学技術は科学的技術であって、技術を専ら意味する。私達も普通に科学技術という言葉を使っていますが、本当に科学ということの意味しているのだろうか。技術のことばかりを言っているのではないだろうか。そんな疑問を持っています。

それともう一つ、軍国主義、戦争に協力してきたということがずっとあったんですね。明治以来、第二次世界大戦が終わるまで、日本はずっと富国強兵政策です。日本は国を束ねると同時に、強兵、兵隊を強くする、軍を強くする、と。そして、科学はまさに政治と軍に奉仕してきた、と思うのであります。

だから、そういう状況を省みて、まさに現在から未来への私たちが考える事柄として、学術が政治や軍に隷属してきた戦前や戦時を反省した。それで、憲法の精神を体现するというよう

なことを誓ったわけですよ。つまり、憲法の持つ平和主義、平和のため、人類の福祉のための研究である。それから民主主義、学界を民主化し、公共財としての大学、あるいは科学研究、そして基本的人権、誰もが高等教育を受けられる権利を保障する、というんですね。こういう精神で、戦後の学術の世界は出発したわけですよ。

まさに公共財としての学術、科学という原点はここにあったのですが、その一つの例を挙げると、たぶんそうだろうと思うのですが、ノーベル賞受賞者が、今、日本は世界一とは言わないうですが、世界一はずっとアメリカですが、それに続く国になっているんですね。ここ二十年で十四〜十五人います。特に二〇〇〇年以降たくさんいるんですね。ノーベル賞が本当にいいのかどうかは別として、科学の水準を表す一つの目安であるのは確かです。二〇〇〇年までは湯川秀樹、朝永振一郎、江崎玲於奈、福井謙一、利根川進、そういう人たちがもったんですね。

湯川さんは戦前の研究です。朝永さんは戦時中の研究です。江崎、福井、利根川という人達は、戦後間もない貧しい時期だったけれども、特に江崎、利根さんは、外国に出掛けて研究した。超エリートたちだけの研究がノーベル賞を授与されたのです。その後、白川英樹さんという方が高分子の成果でノーベル賞をもらって、野依さん、田中耕一さん、小柴さん、下村さん、それから南部、小林、益川。それから根岸さん、鈴木さん、この方々はあまりご存じないかもしれないけれども化学ですね。それから山中さん、ES細胞の方ですね。それから一昨年の赤崎さん、天野さん、中村さん。そして去年の梶田さん、大村さん、と続々ともらった。なぜ、こんなにたくさんもらったのか。私は、これは戦後の学術体制の厚みがこれを可能にしたのだと思います。新憲法が成立して大学が各県に最低一大学という時代がきて、そして誰でも望めば大学に入学することができるようになった。むしろ、あの当時は日本はまだ貧しかったから、大

学に進学する割合は一五パーセントから三〇パーセントぐらいたったのですが、現在は五〇パーセントを越えているんですね。そういう時代で、学術の世界が非常に豊かだったのです。かつ学費が安かったですね。私が入学したときは月千円でした。そういう時代で、いろいろな若者たちが志を持って学問の世界に入ってきた。その結果として、これだけの人たちがノーベル賞をもらうことができた、私は考えているんですね。

まさに文化としての科学という側面です。そして多くの人たちの知的なレベルが上がることによつて、ノーベル賞もたくさんもらえた。要するに、ノーベル賞は優秀な人たちがたまたま貰うのではなくて、多くの人たちが、幅広い構築的な、ピラミッドの底をつくっている、そういう人たちがたくさん集まる、たくさん増えてくることによつて、天辺の仕事を人々も押し上げられてノーベル賞をもらった、そういう構造になっているんですね。ですから、いか

に基本的な部分を大事にしていたか、ということとを物語っていると思います。

ですから、戦後の出発、それから二〇〇〇年ごろまでは、私は非常にそれがうまくそれなりに回転してきた時代だと思います。公共財としての科学という名前どおりであり、それはまさに平和のための研究であったと思います。

ここで文化としての科学という側面を強調しますが、文化ということ、ここ平泉でいうと文化遺産という文化。この文化という言葉は、いろいろな言葉で使われるのですが、やはり文化は人間の精神的活動の成果であるということを経験したい。つまり見返りとか、金儲けになるとか、そういうのを求めないで、人間が自分の精神的な活動を、そのものを楽しみながら、あるいはそのものに熱中して、好奇心のままにそれに時間とお金をかける、自分の人生をかけていく。そういうことがまさに文化としての活動だと思っております。ですから、文化というのは金

はかかるけど金は儲からないものなんですよ。だからこそ、税金とか、ボランティアとか、様々な形で人々が寄与してくれる。それによって文化は支えられているんですね。

まさに文化遺産というのも、過去の遺産をそれぞれ継承しながら、結局、それをきちんと支えるのは、この文化遺産を抱える地元の人たちであり、むしろそれは、日本全体が広く支えていく必要があるわけですが、文化を支えるという構造ですね。文化そのものをきちんと支えていくという構造は、まさに精神的なものです。

実は、こういう文化というのは、あることが大事であって、無ければ実に寂しくて、貧しく辛い。けれども無ければ無いで済ませられるわけです、極論すればね。ピカソの絵が無くなっても、別に私たちの生活は困らないわけでしょう。モーツァルトが無くなっても別に困らない。しかし、それが無いということは非常に私たちの精神的な貧しさになるのではないだろうか。文化というのは、まさに「無用の用」、と私は思

うのです。

そのことを確りと知って、きちんとそれを継承していくということに本当の意味があり、まさに文化は人間の証明なんです。文化を継承し、未来につなげていくということは、まさにその時代、時代を生きた人間が、人間としてこう生きたんですよ、ということを証明していく、一つの重要な作業。私たち人間の役割ではないかと思えます。

平泉に遺る文化遺産は、平泉の人たちが、エリートとして文化を護るということ、本当に誓い、本当に自分たちのものとして捉えて、それを支えていくということを表明されたということです。ずっと継承していくことを、まさに世界に胸を張って見せて、今後も見せていくであろう、ということではないかと思うわけですね。

しかし今、現在の科学の問題でマイナス面が出てきています。現在は非常に大変な状況に

なっています。科学の現場にも経済論理とか、競争原理とかがどんどん入り込むようになってきました。役に立たねばならない、ということですね。

ニュートリノの研究でノーベル賞をもらった小柴さんに新聞記者が、「ニュートリノの研究をしたら何の役に立つんですか？」と聞いたんです。そうしたら小柴さんは、「ニュートリノの研究は何の役にも立たん」と答えた。何の役にも立たないけれども、ニュートリノを調べることによって太陽の内部がわかる。太陽がどういふメカニズムで、どういふことで輝いているかということがわかるんですね。「そんなのがわかって何の役にもたちませんよ」と言われちゃうというわけです。しかし、それがわかることによって、私たちの世界がちょっと広がるわけですよ。太陽の内部はこういうふうになっているのか、ということを知ることがあるというわけです。それだったら、もっとほかの天体を知るとどうなるのか。ブラックホール

は？というふうに、どんどん想像が広がっていくわけですよ。そういうふうに知識が連鎖していくんです。

ところが、経済論理が先に立つてくると、役に立たねばならない、ということになります。そして悲しいことにこの日本は、文化と名のつくものには行政は一般に冷たいわけですよ。予算を節約するとき、一番初めは文化を切る、というわけです。そういう現実があるわけで、私たちはそれにいかに抵抗するかということが非常に重要であります。

科学でも、長い時間がかかるとか、役に立たない研究は廃^{すた}れていつているということ、私は非常に悲しく思っています。

もう一つは、選ばれた分野以外では研究費が不足しているということもあるんですね。それで防衛省から競争的資金制度という、研究者にお金を提供する制度が作られました。研究資金を提供するから、防衛装備品、要するに軍事技術の開発に協力しなさいという、そういう制度

です。去年から募集しています。今年も六億円が提示されています。そうすると、これはもう科学が軍のためのものになってしまします。軍に占有される。私たちの手から離れていく。公共財ではなくなるということですね。

このことに私は強く反発して、運動をやっているのですが、しかし、なかなか広がっていかないですね。いろいろな意見があつて、一筋縄ですぐにパツと答えが出てくるという問題ではないのかもしれないけれども、やはり科学の原点は公共財であるということ、軍や政治家に占有されてはならない。科学は私たち自身が共に求めるもの、共に楽しむものであるということ、これを強調したいと思います。

国家や企業や軍のための科学になったら駄目なんです。科学をそんな狭い世界の人たちだけが、戦争のために使っている、ということになりかねないんです。このことを強く主張しておきたいと思います。

公共財としての科学を取り戻すために私たち

が成すべきことは何か、ということですが、一つは科学技術の歪みを指摘すること、市民として、ここにおられる方々を含め、私たちと一緒に主張してほしいということですね。その一つが、科学技術の歪みを指摘し続けることです。当面の利益ばかりを優先する科学とか、それから未来の世代に負債を残し、自分たちのためだけを考えて、未来の世代に負債を残していく、それでいいのか、ということ。

今、岩手県でILCという、インターナショナル・リニア・コライダーという、何兆円という計画が議論されていますね。これをどう考えるか、という問題があります。まさにこれは、いろいろな人の意見を聞きながら、現実この環境にどういう影響を与えるか、ということも議論しながら考えるべきです。そして、科学の内容からいったら、それは本当の公共財なのか。本当に皆のため、まさに文化のためとなるのか。それは文化のためと言われていますが、本当に

そうなのか。そういうようなことを、やはり幅広く議論しないとイケません。単に、それでこれだけ経済効果が期待できる、企業がやってくるとか、そういうことになるかと非常にマイナスです。当面の利益だけを考えるとまずいと思います。時間を掛けて議論をすることです。その時間を掛けるというのが現代人はみな下手になったんですね。早く答えを出したいということばかりになってしまつて、ゆっくり時間を掛けるということが下手になった。これはやはりまずいですね。

それからもう一つは、国家や大資本と癒着した科学者を批判することです。私は、そういう科学者を御用学者と言ふのです。「先生は科学者のくせに御用学者と平気で言うんですね」と言われて「いやあ、御用学者ですから御用学者と言わざるを得ないでしょう」と言ったのですが、同じ科学者仲間として、国とか企業の方ばかりに目を向けていて、私たち個人個人の、人々の楽しみとか、安全性とか、そういう

ことを考えない科学者が多い。今、原発とか、医療とか、薬品とか様々な問題で、御用学者と言わざるを得ない人がいます。御用学者たちもやはりお金を得るためにやっているのかもしれないませんけれども、その批判を続けるということはやはり大事です。悪貨は良貨を駆逐する、という言葉があるでしょう。悪い貨幣は良い貨幣を追いやってしまう。昔、金をたくさん入れていた小判から金を少なくして、銅を入れた小判をつくって、同じ一両の小判をつくったのですが、そうすると皆、悪い小判ばかり使って、良い小判は筆筒の中に納めてしまっただけです。出回るのは悪いものばかりになる。それで、現在の企業社会も、だんだんそういう状況が広がってきているということに危機感を持っています。フォルクスワーゲンとか、それを真似したわけじゃないだろうけれども、三菱自動車とか、スズキもそうでしょう。燃費をごまかす手段をやっていたわけですよ。あるいは東洋ゴムが弾力性のないゴムをビルにつかっていたと

か、ね。様々な問題の企業のことが暴かれるでしょう。あれは、より安くて、早く儲かる。逆により安い方にどんどん注文していくから、より安くするためにより手抜きをする。より粗悪品で済ませる。そういう社会に今はなりかかっているのではないかと私は思っているんですね。これは経済論理があまりにも先に立ち過ぎたということに原因があります。

私たちは、そういう企業をボイコットするということに対抗することがやはり必要ではないかと思えます。批判をすることです。そして、文化への投資を要求し続けることですね。

それで、先ほども言ったように、日本の政治は文化に対して冷たいところがあるのですが、それはおかしい。文化は人間の証明なんだよ、ということ、常に要求し続けること。特に遺産のようなものは、いったん失ったらもう二度と回復できないわけですよ。例えばイスラムの方で、古い遺産をどんどん壊しているでしょう。あれほど悲しいことはないですね。人類の宝で

しよう。それは何も役に立たないから、と壊しているようなものですよ。これほど恥ずかしいというか、空しいということはないですよ。それは、私たちが客観的に見られるイスラムのことはわかるんだけど、日本の中でどうなのか、ということも常に考え続ける、常に見続ける必要があるのではないかと思えます。だから、公共財としての科学というのは、役に立たない科学、文化としての科学、私にもわかる科学。難しく、全く素人だと思ってもちよつと勉強すれば知ることができる。何となく面白そうだとか、という科学を実践する試みを、平泉でやり始めませんか、というのが次の議題としてディスカッションでちよつとだけ話してみたいと思っています。

今日は少々原理的な話になってしまったのですが、やはり公共財ということの本当にきちんと考えて、私たちの大事な生活、大事な日常の中の一コマ一コマを、科学を本当の公共財、平和のための公共財ということを求め続けるとい

うことがやはり重要だと思います。
ご清聴ありがとうございました。(拍手)

プロフィール
いけうち さとる

京都大学理学部物理学科卒業。同大学院(物理学専攻)。理学博士。国立天文台教授、名古屋大学、総合研究大学院大学を経て、現在岡山大学の名誉教授。世界平和アビール七人委員会委員。主な著書「科学の考え方・学び方」「科学者心得帳」「科学・技術と現代社会」「科学者と戦争」「科学のこれまで、科学のこれから」他多数。(兵庫県姫路市出身)



「平泉に想い 平泉を語る」

司会 第二部のパネルディスカッションを始めさせていただきます。

本日のテーマ「平泉に想い 平泉を語る」でお話をさせていただきます。

パネリストの皆様をご紹介申し上げます。まず基調講演をいただきました池内了様です。

そのお隣は、志賀かう子様です。志賀様は、栃木県の宇都宮市ご出身で、お父様が一関市、お母様は金ヶ崎町のご出身でございます。日本女子大学国文科を卒業後、エッセイストとして、著書『祖母、私の明治』で第三十一回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞されるなど、新聞・雑誌に多数執筆されています。また、盛岡市の深沢紅子・野の花美術館の初代の館長を務められて、その

後は、栃木県の各種審議会委員を歴任されています。ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

そのお隣は、滝沢市埋蔵文化財センター・主任主査・井上雅孝様です。井上さんは盛岡市のご出身で、立正大学卒業後、滝沢市に就職されて、奥州・藤原氏時代の土器と石造物の研究を行っていらっしゃいます。『奥州・平泉から出土する土器の編年的研究』などの著書がございます。

そして、前横手市立図書館長の佐越良子様です。佐越様は、横手市のご出身で、新潟大学農学部を卒業されました。現在は、横手市高齢ふれあい課長を務めています。います。佐越さんは、岩手県と秋田県との、奥州・藤原氏以前からのつながりを強くアピールされており、特に後三年合戦の資料収集の充実に努められてこられました。

そして、コーディネーターを中尊寺仏教文化研究所長の佐々木邦世様にお願しております。『平泉 中尊寺・毛越寺の全容』『平泉中尊寺 金色堂と経の世界』などの著書出版。現在、岩手日報に、連載「よみがえる信の風光―平泉『如意輪講式』を語る」を執筆されています。

それでは、よろしくお願いたします。



佐々木 池内先生の講演を、しっかりと聞いた後でございますので、先生のお話は最後にいたしました。まずは志賀かう子様：（「先生」と呼んだらダメ、と言われておりますので）、志賀かう子様のお話から始めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、こういう話が欲しいとか、こういうのは控えてほしいとか、一切ございませんので、どうぞご随意にお話ください。

志賀 志賀かう子様でございます。

ただ今、池内先生の本当に素晴らしいお話、私は細部にわたっては理解はできておりませんが、仰しやる流れが、本当に私たちにも染み入ってくる、本当のお話だと思います。私たちも自分の持てる力で、世の中のために何かなっていかなければいけないということを思いながら、先生のお話を私のレベルで伺わせていただきました。

今日は、平泉への想い、平泉に何を願ったらいいか、といったことを、自分の鍵で話してよいという、佐々木邦世さんのお求めでございましたので、意を強くして出てまい

りました。

私はず平泉で一番の願いといたしますのは、私の父方は東稲山の東側の大東町でございまして、今は一関市になりました。そして母方は、水沢のお隣の金ヶ崎でございまして。

私の祖母は、貧乏侍がまだちよんまげを結っていたころ、貧乏侍の娘として幼いときに、本当に貧しさの中で大きくなったといつてもいいと思うんです。その祖母の話の中心にときどき出てきますのが、「中尊から来たお前のおひいさんが…」という言葉が出てまいりまして、地元の方はご存知でいらつしやいますが、中尊寺も毛越寺も、十八坊から成り立って、その十八坊のお坊様方が一つになって中尊寺を、毛越寺を護り抜いて来られた。それで、私も戦後すぐの様子を覚えておりますけれども、お坊様方はお勤めをなさりながら、鉄道員であったり、郵便局員であったり、学校の先生をなさりながら、この中尊寺・毛越寺を護って来られた。そういうお姿を、私は知っている一人でございませぬ。

そして、その祖母は「中尊からお出でなされた」と言いましたね。中尊寺のことは全部敬語を使っております。

義経の後を戦って敗れたのはこの辺りのお侍さんたちだったんだ、と思つて、稲棒を見つておりました。

私は、若い時の感性が、決して誤つた見方ではなかった、と。今見ても、私はそれが藤原家のために、義経のために戦つて敗れた兵たちの姿だった、と。

そして、東北の空はなんと大きいのだろう、と思つたのです。私は宇都宮ですが、「東北の空は大きい」という文章を書いたのも覚えておりますけれども、東北の空の大きさが。私に限りなく大きい空として印象付けたあの空というのは、やはり東北を象徴するものであった、とその後思うようになりました。

その後、折に触れて平泉の勉強もいたしました。私は学生時代に…、一字金輪佛頂尊を見せていただいたんです。特別、「おめはん」と言つて見せてくださったのは、北嶺亮詮さんといひまして、祖母のいとこなんですね。その亮詮和尚さんから見せていただいて説明を受けましたが、あまりそれは印象に残っておりません。今日、邦世様にご案内いただいて、その一字金輪佛頂尊。私は、本当に感動してお話を伺いました。こんな美しい仏様が…。

「中尊からお出でなされたお前のおひいさんが…」つて、時折聞かされて、中尊つて何者か、と思ひながら育つたものでございまして。

その中尊寺、平泉と最初に出会つたのが、中学校二年生、十五歳のときの修学旅行でございました。宇都宮からまいりました。そして、私にとつては血縁の父祖の地ですね。憧れがございました。昔の鈍行列車に…、夜行列車ではなくて、明け方、夜が白む頃に私はデッキに立つて、一人で少しづつ明けていく夜景を、朝ぼらけをこうやって見ておりました。川が流れておりました。あれは北上川でありましたのか、あるいはもつと南の阿武隈川でありましたのか、そこはよく覚えておりませんが、川を見ただけでも感動いたしました。一関に近づいたところに、刈り入れが終つた田園風景でございました。稲棒の群れです。聞きましたら、この辺では穂荷負つて言うそうですね。刈り取つた稲を棒に巻きつけるように立っています。私はそれを見ておりましたとき、敗残したお侍たちがぐたびれ果てて、藁づくりのけらを着た敗残兵がこうやつている姿に見えたんです。まだ平泉の歴史も臚に知つていただけのところで、

学生時代は私は千五百円貯まると、親友と二人で一泊旅行で奈良・京都に行つていたのですが、当時、九百円で鈍行列車の夜行で行つて、朝着いて、そして特別の意味のある旅館でありましたが、そこに泊つて、一日中徒歩で奈良の斑鳩の里を歩き、京都に行き——、それが私の学生時代の楽しみだったのですが、そのころはまだ、仏像を見て「ああー」なんて言つておりましたけれども、今日ほしみじみと一字金輪佛の美しさ、あの慈愛、本当の優しさというものに触れて、胸が熱くなつていました。そこに、邦世様が話して下さいなのですが、昭和二十七年に、柳原白蓮さんがお見えになつて、お父様の実高さんがご案内されたのですが、そのときに、白蓮さんが、「われになにかさ、やきたまふ思ひあり 秘仏の前にぬかつきとき 白蓮」と詠まれたという。白蓮さんが秘仏の前にお座りになつたときに、我に何か囁きたもう、その思ひがあつた。おそらく胸を熱くされたに違いない。さつき、私は池内先生の奥様と並んでお話を伺つていましたが、奥様も私も、本当に目に涙が湧き溢れるような思いでした。そして仏像のお顔を見上げていると、玉眼の、何故か左の眼の水晶の輝きだけ

がこちらに見えるのですが、それが涙とも見え、本当に慈悲の涙とも見え、ああ、こんな仏様があるのかしら、と。私はそれを何度も写真では拝見しておりましたけれども、やつぱり今日、ご尊体にお目にかかって、あの仏様の意味がわかりました。そして、平泉というものがどういう意味を持つ地域であるか。東北というものが持つ意味が何であるかということ、また改めて思ったのです。

それは、今日拝見した平泉の文化財のお品は、精魂込められた…、それは、金銀を飾って豪華につくったというのではなくて、本当の信仰心というものが、これは清衡公からはじまり、基衡公、秀衡公、そしてずっと流れているものであります。それだけではない。それに携わった職人たちの真剣な技というものが、これは世界遺産に相応しいものとして、今日までこうして営々と伝えられてきたのだということ、改めて感じました。

本日ここにこうしてお集まりのみなさんは平泉をはじめ、東北の方が多いと思います。私も東北の血を持ったことを嬉しく思っているのですが、それを誇りとしながら、この誇らしきものをどう世の中に伝えていいか。先刻、池

きまして、元々、専攻は十一世紀から十二世紀、時代というと古代末期なのですが、安倍氏から藤原氏の時代をちょうど研究していきまして、その関係で平泉にはちよくちよく出入りさせていただきました。私は今、五十歳ですが、二十代から五十代になってもまだ出入りさせてもらっていて、普段は作業服を着て、実測道具を持ちながら、偶に平泉町内をうろろろしていますが、怪しいものではありませんので、よろしくお願います。

私は文化財関係の仕事をしているわけですが、文化財というのは、元々、役に立たない仕事、みたいな話をされています。今日の池内先生の話は本当に良い話だなあと、すごく心に響きました。

私が平泉に出入りし始めたころは、一九八〇年代でして、まだ柳の御所遺跡を本格的に調査する前の時代だったと思います。バイパスの関係で調査が始まった頃でした。そのころはまだ、私は町内をあちこちと、出入りさせてもらいまして、ちよつとご挨拶をしたら、いきなり「缶コーヒを買って来い」と言われました。平泉町の役場の人はすごいなあ、と思いましたけれど、そういうことをさせられ

内先生は今と今までの科学のことをお話になりました。それを後の世に、今の社会に、未来にどう役に立たなければいけないか、ということまでお話を運んでくださいました。私たちが、そのことを今日は胸に…。こんな好い御尊仏をいただいた、この岩手県の私たち。血の故郷であるこの土地の誇りを私は胸に秘めながら、私にできることをやっていきたい。いかなければいけない。それが人間ではないか、ということが今日思ったこと、ございました。

佐々木 ありがとうございます。

それでは続きまして、井上雅孝様。皆さんご存知のように、発掘調査の辺りを常にくろくろくされて、しかも、その遺構・遺物をこれはどういうふう位置づけ、意義づけできるものか、というときに、適切にものを言う、現場の人でもあります。

井上 滝沢市の埋蔵文化財センターの井上です。よろしくお願います。

私は普段、二十代のころから平泉に出入りさせていただいていました。中尊寺にも、いくつかの石造物の調査関係で見学させていただきまして、やはりいろいろとありました。平泉の魅力というのはいろいろなところにあるんです。私は特に、マニアック（熱中している）なもので、平泉で注目しているのは、一つは石造物。五輪塔と宝塔があるのですが、中でも中尊寺の願成就院宝塔という重要文化財の宝塔があり、釈尊院の五輪塔もありますけれども、そのほかにも町内にいろいろと宝塔、五輪塔が多くあります。宝塔に関しては、「平泉型宝塔」と言われるように、平泉オリジナルの宝塔で、全国的に見て、平安時代末、十二世紀の石造物が集中するところは非常に珍しいです。私が知っている限りでは、たぶん平泉と大分県だけです。平泉は、磨崖仏もあります。大分にも磨崖仏はありますけれど、そういうったすごいところなんだ、と思っております。

しかし、石造物調査をやる人が少ないものですから、私は県のほうでも平泉の研究とかいろいろやっていて、柳之御所とかも今、県で調査していますけれども、県の教育委員会：知事（来賓席で聴講）の前で話すことではないです

けれども、県の教育委員会の中でも、「石造物は調査したほうがいいよ、大事だよ」と言うのですが、「じゃあ、あなたやつたら？」ぐらいの話で、何か軽くあしらわれてしまっています。

特に、私がもう一点注目しているのは、石仏。最近も話題になった、この平泉の長島、月館の大師堂の石仏です。あれは、すごく貴重だと思います。十二世紀の石像は、京都・奈良でもあまりないと思いますね。

それからもう一体、観自在王院のオンドウ仏ですね。そこに阿弥陀堂があつて、入っていたのではないかということをおっしゃっています。

佐々木 それでは横手からお見えの佐越良子さん、よろしく。

佐越 ただいまご紹介いただきました佐越です。

平泉に関しては全くの素人です。横手市の一般の人が平泉をどのように思っているか、を素直に話してもらいたい、という話でした。秋田県の、特に横手というと、話が見え

りまして、それは建物が立派だということもあるのですが、「へえー、東北にこんな立派なのがあつたの？そんな昔からあつたの？」というイメージが、非常に私としては大きかつたような気がします。

もう一つ、中学校時代に担任の先生が国語の先生で、短歌をなさる方で、ロマンチストの先生でした。その方が中尊寺の薪能の話をしてくださったんです。その先生の話ですと、「鬱蒼とした木立の中に古い古い能舞台があつて、暗くなつてくると松明が近づいてきて、そして篝火が焚かれる。そして苔むした屋根の苔が光つたりする。そこで薪能があるんだ。それはすばらしい」と話してくれたんです。すごく乙女の心には夢のような世界で、一回見てみたいなあ、と思つていたんです。それが平泉という地のハードとソフトの文化が、私の中学校時代に伝わってきた、という思い出です。

後日、結婚して間もないころ、主人と両方の母親と四人で初めて薪能にまいりまして、本当に感動しました。当然ながら立ち見で見ましたが、本当に美しく、特に明るいうちと篝火が焚かれてからの舞台上に雰囲気が変わつて、特

ない地名が出てくると思いますので、今日はこのマップを入れておきました。私の住んでいる横手市は、後三年合戦の舞台の地だったということは、皆さんもご存知だと思います。平成の大合併で平鹿郡と名前の付く横手盆地の真ん中の場所が全部一つの市になりまして、東京都区部ぐらいの広さと聞いたことがあるのですが、大変広くなりました。それで、後三年合戦で欠かすことのできない、清衡公に関連のあります沼柵、金沢柵かねざわなど全て、清原清衡として過ごした場所は、横手にほとんど入っていると思います。

しかし、横手の人が清原氏のことを知っていたかということ、たぶん教科書に出てくる後三年合戦の、マップの表紙にあります源義家像、雁行の乱れとか、その程度かもしれません。平泉という名前が、初めて私の中に本当に入つて来たのは、中学校に入つたときです。本日は横手から来たのですが、車で一時間ちよつとですが、当時は奥羽本線のほうが横手のメインルートでしたので、どうしても、山のすぐ影なのですが時間が掛かるので、中学校の一年生の遠足はバス旅行です。着きましたら、平泉の中尊寺、そこで見た金色堂。それから毛越寺へと。非常にインパクトがあ

に、篝火の中で見た、板戸に竹とかが描いてあるのですが、明るいうちは何かよくわからなかつたのですが、篝火の中ではそれが甦るように浮き上がつて来て、すごく美しい、感動しました。ちなみに演目は「一角仙人」だったと思います。最後にかわいい龍の子どもが飛び出してくるのが印象的でした。

それから、横手市で清原氏を意識したきっかけになったのは、やはり市役所に勤めたお陰だと思っています。平成三年に、金沢柵があつた金沢口に平安の風わたる公園というのができました。後三年合戦の雁行の乱れの舞台となつた場所にできた公園です。そこには清衡公や源義家と共に、清原武衡、家衡の像が置かれました。横手の市民にもそこで少しづつ、そういう人がいたのだ、ということが浸透して行つたと思います。

その公園の近くにあります金沢資料館で、明治の画家の戎谷南山という方がおられまして、その方が模写した「後三年合戦絵詞」を観ることができるようになったときには、こんな悲惨な終焉を迎えた人がいたのかな。もつと清原氏のことを知るべきではないかな、と思うようになったのは

そのころです。

けれど、九月の収穫祭のころに八幡さんのお祭りが大々的に、どこの集落でも行なわれるんです。そして、横手の辺りの人は八幡太郎義家というのが頭にありまして、あまり語られることもなかったのかなあ、とは思いますが。しかし、心のどこかに引つかかる火種があつたことは確かだと思います。

そんなある日、大風が山の向こうからやって来ました。何かと言いますと、「平泉遺産を世界遺産に登録しよう」という話を持ち上がったということです。これはすごくシヨックだったというか、それがすごいということもあるし、東北の地にそんなすばらしい価値があつたのか、東北地方は捨てたもんじゃない、という衝撃が横手に走つたわけです。そして、「そこはうちのほうとも繋がっているよ」という思いは大きかったと思います。

そしてその結果、藤原清衡公は横手で育つたのだ、清原氏という一族はこの地方で栄えて滅んでいった、ということとを皆が知るようになりました。こちらの皆さんが、平泉の文化を一生懸命に発信しようとしてくださつたお陰で、

「ないかな」とか、「沼柵から撤退して金沢に移つたために清原氏は滅びた」と言われています。今頃まだ清原氏はいたのじゃないか、という歴史のイフを、「もしかしたら」と語り合うくらいになっております。

余談になりますけれども、今の横手市になる直前に、金沢の有志の方々と、雄物川の西の山に登つたことがあるんです。そして、そつちから眺めると、普段は自分たちがその麓で暮らしている奥羽山脈が、遙か彼方に見えるんですね。するとだれかが「ああ、俺たち全部同じ町だ」と言つたんです。「広れえなあ」と。清原氏や藤原氏がいたころは、そんな横手だったんじゃないかな、と思つております。

横手市の教育委員会でも、お陰で文化財保護課においては、郷土を知るためのいろいろな事業が始まりました。図書館も、後三年合戦だけではなく、奥州藤原氏や前九年合戦、安倍氏などの東北の郷土史研究の成果も含めて、図書館行政に提供してもらわなければいけないんじゃないか。それによつて清原氏への思いや理解が深まるんじゃないか、ということ、司書たちはがんばつております。

私たちも自分たちの文化を知ることができて、大変感謝しております。

そして、一番関係のあつた金沢の人たちが動き出しました。昭和の戦後すぐの合併のときに、金沢という地域は横手市と、今は美郷町になっていますが、仙南村というところに半分に分かれてしまつた地域なんです。でも、その人たちがその境を越えて、金沢として、「後三年合戦 清原一族 九二五年を考える会」というものを立ち上げました。金沢の祇園寺というお寺で法要とシンポジウムが行われました。このときに佐々木様にお目にかかつて、ここに私が座つているというわけです。

その後も一つの金沢として、清原氏を掘り起こす活動を続けております。実行委員会の方々が、「これも佐々木先生のお陰だ。お力づけのお陰で続けてこられた」と先日申しております。さらに、昔の古道の復活を目指して、という話も出てきているということです。

西側の、沼柵があつたといわれる辺りの雄物川の人たちとも、このごろはつながりを強めております。雄物川の人たちも、「沼柵で戦い続けていたら、滅びなかつたんじゃないか、と思つております。

横手とこちら平泉の方は、奥羽山脈という尾根には遮られてはいますが、よく考えると大変近いですし、昔から物資が行き来しています。また、凶作や災害などのときは、山の反対側に避難、移動して生き延びた、ということもあつたと思います。やはり発信力の差はありますけれども、お互いの文化ももつと輝きと深みが増すのではないかな、と思つております。

以前、「後三年合戦・清原一族・九二五年を考える会」のシンポジウムで、佐々木邦世先生がなさつたお話は、「平泉の浄土思想」というお話でした。戦いで命を失つた全ての生きとし生けるものの魂の安寧を祈るという、人間以外の草や木までであるという浄土思想はすばらしいと思ひました。そうして考えると、光過ぎるんじゃないかと思つてた金色堂の輝きも、何か納得することができていました。というのは、戦いに次ぐ戦いで、人も大地も全て荒れ果てた中、当時の人は、あの輝く金色堂や、花がいつぱいの毛越寺を見ると、こういうのが浄土か、とイメージできたのではないかな、と。戦争をくぐり抜けた人たちに生きる喜びを与えようとしたんだな、と思うことができました。

私は、清衡公は若いときに、この世で浄土を垣間見たことがあるのではないかと内心思っています。それは金沢の山の上から見た平鹿の、横手の平野です。秋に稲穂が実りますと、あそこは一面金色の海になるんです。そこに小さな山が、島みたいで、緑にボカッボカッと浮かぶ景色があります、大変美しいです。メジャーな観光地ではないのですが、私は好きなんです。そこに夕方、陽が西に沈んでいきます。出羽三山に沈んで行くのですが、タイムリングが良いと陽が落ちる瞬間、全部が金色に輝くんですね。今の私が見ても、浄土ってこんなのかな、と一瞬思うような気がするんです。きつと若い時代の清衡公も同じような気持ちになったことがあるのではないかな、と勝手な想像をしておりました。

佐々木 今のお話を聞いていて、一つだけ皆で考えなければいけないことがあります。それは、秋田と岩手は江戸時代まで本当に近い行き来をし、人がそこでいろいろなものをつくり、語り、旅をしていました。疎遠になった原因があります。岩手県と秋田県が東京の方だけを見て、目を反

ますから、いつでも見えていますから、「そんなもの」という感じで、つい忘れちゃうんですね。

ところが、それはまさに文化の、文化遺物であって、それを失うと「えっ？いつの間になくなってしまった」と、あの姿を皆が思い出して、「あれと一緒に遊んだな」という思いもあり、それから「あそこにお団子を供えた」とかいう、そういうことも、なくなつたときにその大事さを思うのですが、もはや取り返しがつかないことですね。

その意味では、地元のお宝…、地元で普段接している、特に目立たないようなものであっても、それ自身が非常に私たちの心をつなぐものになる。そのことを意識して、周りの様々なものを見つめる。そうすると、例えば農作業で昔から使ってきたものが放り捨ててあるとか、そういうものは全部整理してなくなっていくわけですね。しかし、そういうものでも、ちゃんと動くようにして保存しておけば、どこかの場で、「昔はこういうことをやっていたんだよ」という歴史教育の現場に活かすことができる。それによつて、人々の労働というのがどういうものであつたか、どれだけ厳しいものであつたか。だからこそ、皆さん村祭りが

らした明治の戦争です。奥羽列藩の戦争の後遺症が、人をそちらに向けさせないようにしたのです。それはもういいのではないのでしょうか。「もう」という気持ちで、前の、前の中尊寺貫首・多田厚隆先生のときに、皆と一緒に秋田の方へ行つて、平泉の文化を語る企画をした。そうしたら、「平泉のことを何かやるってホントかつ」てみんな驚いた。明治から、それほど疎遠に、意識的になつたのです。もうそんなことではいけない、という思いで、これからお付き合いを深めたいと思っております。

それでは池内先生、よろしくお願ひします。

池内 さつき大分しゃべつてしまつたので、あまり話すことはないのですが、今のお話を聞きながら、一つは地元のお宝は地元の人が一番知らないことがあるんだな、ということがよくわかりますね。むろん中尊寺とか毛越寺とか、有名で、まさに遺産として残されて来ているお宝は、当然皆さん知つているのですが、それ以外の、例えば石造物とか、そういうほかの場所に持つて行けば、「こんなすごいものがあるよ」というものを、地元の人は普段見慣れていて、それほど楽しみにしたか、というように連なつて行くわけですね。

そういう意味では、私たちの身近にある、普段使っている、あるいは使っていた古いものであつても大事にする。そして、それを収集する。あるいはちゃんと保存しておく。そして動かせる状態に手を入れる、というようなことをやつたらどうかと思います。

実はこれは、私は今京都に住んでいるのですが、京阪奈という、京都、大阪、奈良のちょうど境界の地域に木津川市、精華町という町があるのですが、そこで様々な地域のお宝さがしというのをやっていますよ。それで、小さな博物館を…。そういうのを集めて、私たちの先祖が生きた証として保存しておく。そういう小さな博物館をつくつていこう、ということをやっているんですね。

平泉の場所でも…。平泉の文化遺産というのは、確かにすばらしいお寺さんがあり、すばらしい建物があり、すばらしい風景が残されている、と同時に、この地域にいた人々がどういふものを使つていたか、あるいは野良にあるどう

いうお地藏さんに手を合わせていたか、というようなこともきちんと人々に見せられる状況にすること。こういう町の通りとか、ちよつと飾り付けるとか、立ち寄れるようにするとか、そういう、文化遺産以外の日常的なものも保存するということが大事です。提案しようかなと思つていたのは、そういうまさに民俗学とのつながり、それから発掘で出てきたものも、当然小さな博物館に集めておく、そういうことを意識的にやられたらいいのではないかな、と思つています。

その中で、私自身が無い物ねだりをしているのかもしれないけれども、好き者たちが集まつていろいろ自慢したり、見せ合つたりした、そういう江戸時代の博物学みたいなものを、現代にも蘇らせることはできないのかな、というふうに思っているわけです。格好よく言えば、地域市民大学みたいなものをやつて、自分が教えたり、あるいは自分が学んだりする場を……。それこそが本当の意味の公共性を持つた科学であると思うわけです。それで、そういう公共性を持つた科学は、僕は百年先に実現するかな、ぐらいにそれぐらい長い目で見てゆつくりゆつくり、今の第一線

くのだと思いますね。そういう話になりますと、女性の記憶力と、声掛けのうまさといえますか、活動力は大事ものでございます。

今日は、遠くから、神奈川県の方からも来られていますね。茨城県からいらした山崎さん、何かご感想でもお願いします。

□私は常総市水海道から参りました山崎理恵子

と申します。

すぐに頭に浮かぶことは、やはり藤原清衡公が敵まで愛して、ここに戦争のない理想郷をつくろうとしたということとを、中尊寺さんがずつと、私たちにまで語り伝えてくださいましたので、私は、その思想を別な形で理念として活動しています。それは絵を描きながら、子どもさんたちに自由に……。八月十五日、今度いらしてください。中尊寺の本堂のところで、全然今まで付き合つたこともない、観光に来た人たちと一緒に、八〇号あるいは一〇〇号のカンバスに絵を描いていただきます。そうすると、この本堂のご本尊、丈六のお釈迦様が見えますので、自然とお子さんた

の訳のわからない科学だけじゃなくて、こういう地道な人々が生きている生活と密接に絡み合つた科学というのがあるんだよ、ということを人々の間で共有していくというのが大事なのではないかと思うんですね。そういう運動があちこちで広がると、大学の学問の姿勢も変つてくるというふうに、僕自身は思っています。

ですから、ぜひとも平泉だけと言わずに、横手市とか、昔のつながりを意識して、その場合はあるテーマに絞つて、昔のつながりをどういうふうに活かしていくかということの中で、やり方を考えられたらいいと思うし、問題ごとにやり方がいろいろあると思うのですが、そういうことを構想されたらどうか、と。

佐々木 ありがとうございます。

今お話にありましたような動きというのは、この辺でもないわけではなくて、地域、村の昔の人たちの生活、語り方、風習、それをきちんと、ご高齢の女性が一冊にまとめていらつしやいますね。そうすると、「こういうのがうちにもあるよ。これをどうしようか」ということになつてい

ちは仏さんの姿を描く。そして、この中尊寺の雰囲気から、「戦争つて何だろう」「戦争つてケンカだよね」「なんでケンカするんだろう」「自分たちが、わがままを言うからだ」「このお寺がストップ・ザ・戦争と言っているみたいだ」という思いを、絵の中に描いています。百人ほどで描いた絵ですけれども、偶然ながらそれを統一されちゃうというのが、とても私自身、側において不思議に思っています。今度機会があつたらどうぞ。

そして、私は広島の方でも八月六日に、原爆ドームの前で、皆さんと一緒に、外国の方も、老若男女、異文化、皆一緒に描いています。その中で、広島からすれば遠い遠い東北の中尊寺さんの言葉が、お子さんの中から出たんです。「平和つてなあに」といつて皆描いている中で、描きながら「もぐらさんも幸せに、と考えられる心が平和をつくるんだ」と、小学校三年生の子が描きながら言つたんです。私はびつくりして、「ぼくの考えなの？」と聞いたら、「中尊寺のおじいさんのお坊さんが言つていたよ」と言うんですね。これはやつぱり藤原時代からずつと平和をつくつていこうとしてきた中尊寺さんのお坊さんが、きつとその子

がどこのだれかもわからないし、その男の子が覚えているかもわからないけれども、種蒔きというか、話してくれたんだ。その子の心の中にしつかり入っていて、それで遙か広島の方に行つて、中尊寺さんで聞いた話が思い出されたんですね。やはりあの広島で「中尊寺さん」という言葉が出た。それで私も中尊寺さんに次の年にやつて来まして、ますます藤原三代の心意気に感銘しながら、少しずつ「中尊寺さんのおじいさんのお坊さん」と子どもさんがおつしやつていましたけれども、その方が種を蒔いたように、私も平和をつくつていく種を蒔いていこうと頑張つております。今日のこのタイトルを、この前、偶然写経に来たときにチラシをいただいて、本当は今日は山梨の方に行つてある予定だったのに、そちらを止めて、こちら平泉に来ました。そして、とてもとてもまた何とも言えない感動を…。今日のことは、まだ言葉では言えないくらい、皆様方の話を聞いて、これからもがんばつていこう、という気になつて、今度は横手に写生に行こうかな。黄金の稲穂の風景を、私もいろいろな所で見えていますけれども、横手のは見えないので、これは皆さんと一緒に描くというのではなくて、

池内先生にお尋ねします。先生が科学者として、論理一辺倒じゃない追いかける方をされていることに感銘しました。一体、そういう思いを、どうやつてできたのか、どうしたらそういう思想をもった科学者がたくさん出るのか、ということをお聞きしたいと思つておりました。

池内 一つはやつぱり教育ですよ。特に子供時代に様々な世界を知らせるということ。本当は今の社会、理科、国語というように科目を縦割りにしちゃうのはあまりよくないですよ。社会の科目であつても言葉を教えたり、理科を教えたり、私たちの生活の中には全部絡んでいきますからね。しかし、ただ、やつぱり私たちの世代は、戦後の貧しい時期を知っている人たちも多いし、皆さんリタイアしたので、そうした人間たちが塾をつくつて、志を育てるような、そういうことを運動してはどうか、と。それで、年金で何とか暮らしているのだから、別にお金を取るわけではなくて、志を立てる塾を、勉強を教える塾ではなくて。そういう運動を我々が…。で、定年退職者組合みたいなものをつくらなければ、と思つたんですよ。

私個人の個展をやっていますので、そこに描いて出そうかな。場所を聞きはぐつてしまったので、目の前にマイクが来たので、お尋ねした次第です。大変失礼いたしました。今日は、池内先生、志賀先生、井上先生、佐越先生、そして佐々木先生、ありがとうございます。私のこれからの生きる支えにもなります。

志賀 先ごろ、大館の親戚に誘われて、大館に行つてまいりましたが、泰衡は大館で惨殺されるわけですね。そして、泰衡夫人も追いかけていくのじゃありませんか。それで、大館でまるで祠のような小さなお宮さんに案内されました。二つありまして、一つは泰衡公を祀っているんです。小さな…、しかし地域の人たちが隣組交替でお花をお供えして、お線香をあげている。もう一つは夫人が行き倒れた所で、そこも隣組の人たちがお掃除をして、お花をきれいに庭に咲かせていて、小さなところですけども、感激いたしました。

□菊地慶矩、平泉で印刷会社をやっております。

それからもう一つは、特に高校から大学の時期に本をたくさん読むということですね。科学と心、科学の心をどう育むのか。それをどのように人間と結びつけていくか、ということでしょう。例えば寺田寅彦とか、そういう人たちの随筆とか、そういうものを読んで、客観的に科学を見る目を育てる、学んでいくということが必要だと思いますね。だから、高校とか大学の中で、教育の中で、今は読書の時間というのがつくられています、そのときに科学者が書いた人間的な文章を読む、読ませる。そしてディスカッションするというのが大事でしょう。

志賀 今、池内先生がおつしやつたことは本当だと思うのです。文学者には科学者が多くいます。それは客観性があるということだと思ふんです。ですから、科学をやるということとは、科学者になるということだけではなくて、客観的な目が、絵描きさんにしても、文章家にしても、科学性というのがいかに大事かということ。私はいつもうらやましく思つております。

佐々木 先生は、そういう縦割りというものを批判されたものも書いていらつしゃいます。それから今度は茨城からも書いたのが、今日、新聞に載っていましたね。

池内 『科学者と戦争』(岩波新書) というタイトルです。科学者の軍事研究に関する歴史的な反省、読みやすい本ですから、どうぞ。

佐々木 確かに、平泉を歩いた文化人は、高野素十も水原秋桜子も医学、山口青邨は鉱学、科学者でした。

いろいろお話いただきましたが、科学の池内先生に私が感じ入ったことが一つございます。以前、アメリカのケネディ大使がここにいらしたときに、貫首が金色堂でご案内をして、説明が終わってもケネディさん、そこを動かないんですね。いつまでも動かない。とうとう、帰りの新幹線に間に合わないということになって、キャンセルして、それでそのあと県庁に行つて知事さんに会う約束していたのが、それができなくなつたのですが……。それで、次の新幹線まで一時間あるということで、御一行安心してゆつくり

境内を歩かれたんです。確かに、世界遺産になつて外国の方が見えるようになったのですが、日本人は遺産の前をどろんどろん通過していく。立ち止まつて、あるいはしゃがんで、足を組んだりしてゆつくり観て思索している人は、外国の人が多い。我々は少し考えたほうがいいかな、と思つております。

今日は、池内先生が、秘仏の前で動かないんですよ。「科学者が仏像に魅入つて」と、感心してしまいました。本当に、敬意を表したいと思います。

デイスカッション、これで時間でございます。皆さん、ありがとうございます。

第五十五回 平泉芭蕉祭全国俳句大会 特別講演

「奥のほそ道 回り道」

講師 西村 和子先生

皆様、こんにちは。西村和子でございます。今日はこんな素晴らしい会場で、皆様にお話をさせていただけるというのを嬉しく思います。

私は今、ご紹介がありましたように、年もばれてしまいました(笑) 俳句を作りはじめたのは十代の頃でございます、清崎敏郎先生きよさきとしろうに出会いましたのが十八歳の時でした。ですからもう、考えてみますと半世紀、俳句を作っているんだな、と思つております。

この会ももう五十五回目と伺つて、長く続けているということはとても大切なことだし、大変なことなんだろうな、と思います。

今日は「奥のほそ道 回り道」という題です。で、何処へ話が逸れていくかちよつと分かりませ

んけれど、どうぞお付き合いくださいませ。

はじめに、お手元に資料が何枚か配られているかと存じますが、一枚目は皆様よくご存じの『奥のほそ道』の平泉の件くだりを、私が書いてきたものです。それから二枚目は、此処から回り道をするお話のための、やはり『奥のほそ道』本文からの抜粋です。で、三枚目は『季語で読む源氏物語』という本を先年出しました。その宣伝ですが(笑) 今日、その辺までお話ができると嬉しく思います。芭蕉の『奥のほそ道』と『源氏物語』の、関係つて一体あるのだろうか、と皆さんお思いなるかと思ひますけれど、実は凄く深い関係があつた、と私は思います。

私たちは『知音』(俳句会)の仲間で「奥のほそ道」を辿る旅というものをしております。

今年は二周目の最後の年として、名月を敦賀で見、最後に大垣へ行くという計画を、ちよつと芭蕉が辿つた季節に合わせて計画しております。

東京から二泊三日で、勿論、新幹線とかバスを使つて通るのですけど、一年に一回、芭蕉のあとをだいたい正直に辿つて行くと足かけ八年くらい掛かるんですよ。それでも、辿る度に新しい発見があつたり、自分たちの俳句をそこで作つてみたり、それからバスの中では本文を朗読しながら、そんな旅を楽しんでおります。

それとは別に『奥のほそ道』の朗読会というものも過去に致しました。『奥のほそ道』がどれほど声を出して読むのにふさわしい、心地の良い、推敲、彫琢ちやうたくしつとした文章であるかということに身に沁みて感じております。

今日は中尊寺の本堂で平泉の件を朗読できる、という素晴らしい機会に恵まれましたのでどうぞ皆様、この本文を見ながらでも結構ですが、もうほとんど皆様はその件をご存じの方だと思えます。資料はご覧にならずに耳だけで味わつて頂けると嬉しく思います。

三代の栄耀えいよう一睡のうちにして、大門の跡は一

里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館まうたかたにのぼれば、北上川南部より流るる大河也。衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷えぞをふせぐとみえたり。偕さも義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢くさむらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで泪なみだを落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな

曾良

兼ねて耳驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠たまの扉風ひらにやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既に退廃空虚の叢くさむらと成べきを、四面新に囲て、藁わらを覆て風雨を凌。暫時しばしば千歳の記念かたみとはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

平泉の本文はたったこれだけなんです。四百

字詰め原稿用紙一枚に足りないくらいなんです。私は、平泉のところは松島とか象潟に劣らず、芭蕉が本当に力を込めて書いた名文だと思ふのが、書き写してみても、え、こんなに短い量だったのかという発見をいたしました。

それは、此処に描かれている世界というのは藤原家三代の栄華から滅びるまで、その後五百年経つてから芭蕉がこの地を訪れた。五百年以上の月日が流れているわけですよ。高館に登るところという処が見えると、五百年前から変わらない北上川、衣川、それから高館の下で二つが合流して地形を描いているわけですけど、その後、「功名一時の叢となる」と滅亡を描いている。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」という中国の杜甫の「春望」の詩を思いながら、「時のうつるまで泪を落し侍りぬ」と書いてあるところに、私たちが芭蕉と一緒に時を経つのも忘れて、藤原三代と義経の栄枯盛衰というものに心を及ぼしているわけですね。

「時のうつるまで」ということは、この時代の

「刻」はほぼ二時間単位、しかも芭蕉がこちらを訪れたときは陽の長い頃ですから、冬の短日の頃の「時のうつるまで」とは全く違います。今の時計で計る二時間とはまったく違う「刻」が流れた時代です。ですから、二時間余り「泪を落し侍りぬ」。そのところに現実の時間と、芭蕉の心の中に去来する歴史的な時間が、この一文に書かれています。そして、この名句が出来たわけですよ。

夏草や兵どもが夢の跡

ここからまた筆を転じて中尊寺の色々なところを巡るわけです。

自分の筆で写してみても…これ(資料)は万年筆で書き写したのですけれど、皆様にもぜひ書き写すことをおすすしたいと思ひます。紀行全部を書き写すと、四百字詰め原稿用紙だと三十枚ちよつとだそうですね。ぜひおすすすめします。

それから音読してみてください。声に出して読むということが、とても心地よい文章です。



芭蕉祭特別講演

これを書き写してみても、後半のところで気が付いたことがあります。それは「二堂開帳す」それから「三将の像をのこし」「三代の棺を納め、三尊の仏を安置す」という風に三、三、二、三、三という数字が多用されている。さらに「七宝散うせて」、ここは段々減びてゆくものの運命まゝを書いていきます。「四面新に囲て」、これは鎌倉時代の覆堂のことを言っているようですが、今日私たちが見ることができる光堂は、新しい覆堂に囲まれて守られている光堂、それ以前はあの光堂が風雨に晒されていたって、想像できないですね。

芭蕉が見た光堂は覆堂のある光堂です。これで「暫時、千歳の記念とはなれり」という風に安堵の筆を置いておりますが、芭蕉の句は覆われていない光堂を描いていると思うんです。

「五月雨の降りのこしてや光堂」これだけ五月雨が降っている季節でも、そこだけは降り残したのであるうかと思われくらい光り輝いている光堂、という風に描写している、素晴らしい文章だと思います。

どうぞ、よく知りつくしている件だと思われるも、音読してみたり書写してみたりして下さい。そうすると、どうして此処がそんなに長い時間を感じるのだろう、たったこれだけの字数でそれだけの世界が感じられるのだろうということが、その秘密が分かってくるような気が致します。

平泉の段の真ん中辺ですが、先程言ったように「時のうつるまで涙を落し侍りぬ」、自分がどれだけ、落涙したかということ芭蕉は堂々と書いていますね。『奥のほそ道』全体を通読してみますと、芭蕉がよく泣いているんですよ。昔の人は「泣いた」とか言わないですね。「涙を落した」、それから「袂を濡らした」。今はハンカチで目頭を押さえたとかいうと泣いたってことですが、日本の伝統的な文学の表現では「袂を濡らした」、「涙で濡らした」ということですね。

(資料の)二枚目をご覧ください。

これは『奥のほそ道』の本文から、芭蕉が泣いているところだけを抜粋したものです。まず、旅立

ちのところから早速泣いていますね。一部分だけ書き抜きました。

千住と云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゞぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪

ここで二回も「泪」という言葉がでてきます。最初のところは遙々と旅に出るところですので、皆と別れを惜しむところですから、「離別の泪」とはつきり、正確に書いてますね。別れを惜しんで涙を落しましたよ、ということを書いています。そして、この一句が、有名な句ですけど、とても不思議な句ですね。

「行春や鳥啼魚の目は泪」鳥は囀りますよね。それを鳥は別れを惜しんで泣いているのだ、という風に芭蕉には聞こえる。そして「魚の目」水中の魚の目はいつも濡れてますよ。それなのにわざわざ「魚の目は泪」。これは水に濡れているので

はなく涙で濡れているのだと芭蕉には見える、という風に離別の涙を、人間だけではなく鳥も魚も、涙を注いでいるのだということの強調として、この句が置かれているのだと思います。

これについては、また後で詳しくお話しします。次に一行置いて書きましたのは、「佐藤庄司が旧跡」の場面です。

麓に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし、先哀也。女なれどもかひくしき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。堕涙の石碑も遠きにあらず。

これは佐藤庄司の息子、継信・忠信兄弟が(源)頼朝軍と戦って、頼朝が義経を討つために追手を派遣しますよね。その時に頼朝軍と戦って兄弟が討ち死にしてしまうんですね。でも、老母に心配させまいと思って、この継信・忠信兄弟の嫁たちが女ながらに主人の甲冑を身につけて、あたかも

凱旋して帰って来たように姑に見せて慰めたという、そういう伝説が残っているわけですね。

これは「古浄瑠璃(正本集)」の「やしま」というものに詳しい章です。私はその古浄瑠璃を見たことがあります。私はその古浄瑠璃を見た時そのことが書かれておりましたし、言い伝えられているわけですね。確か『奥のほそ道』の絵巻物、(与謝)蕪村がのちに描いていますが、そこでも女性が二人、甲冑を身につけて姑に見せているという絵があつて、非常に印象的な場面でした。

そこを訪ねた時に、芭蕉は「人の教ゆるにまかせて泪を落し」た。それは義経の運命、義経に味方した人々の運命に涙を流しているわけですね。そして女ながらにかいがいしき姿を見せて、五百年前の碑までも残っていることに「袂を濡らし」た。哀れとか感動とか、滅びていったものへの想いが芭蕉を泣かせているわけですね。

「堕涙の石碑」というものがある。ここに来ると皆、涙を落とさずにはいられない、その石碑が残っているところも遠くなかったという風

留めています。

次に泣いていますのは「壺碑」^{ひぼのいしづみ}です。

行脚の一徳、存命の悦び、羈旅^{きりよ}の労をわすれて、泪も落るばかり也。

壺碑にいたって芭蕉は千載の形見というものに出会ったという実感を持ったわけですね。芭蕉はなぜ「奥のほそ道」の旅に出たのか?色んな説がありますけれど、隠密説も面白いのですが、私はやはり芭蕉は歌枕を訪ねて歩いた、訪ねて行かなかったところまで挨拶の文を残している、ということにカギがあると思いました。

なぜそれをしたかという、その頃、俳諧という文芸が大衆的になって乱れていた。世の中の人々の楽しみではあったけれど、ちゃんとした日本文学の伝統に組み入れられなくなるのではないか、ということを芭蕉は思っていたと思うのです。それで、自分が正当な文学として、俳諧というも

のを日本文学史の中に残したいという意図があつて「奥のほそ道」の旅に出たのではないかと思われま

す。というのは、いろんな歌枕を訪ねています。歌枕というのは歌に詠まれている名所、ポイントなんです。

陸奥というのは、芭蕉が住んでいた江戸からでさえ遠いところでした。が、もつともつと昔、平安時代というのは、京の都にいて陸奥まで行った人はごく限られた人たちです。それでも陸奥にはたくさんさんの名所があつて、あそこへ行くと萩が綺麗だとか、ここで西行はこういう歌を詠んだとか、私たちが外国の名所に憧れるような思いで、都人たちは平安の昔から陸奥という場所に憧れていたのです。

今では海外旅行も気軽にできるようになりましたけれど、少し前までは、霧のロンドンとか花都パリとか、映画とか文学で知って憧れていました。たでしょう?それと同じ感覚で、千年前の都人は陸奥に憧れていました。

名作が沢山詠まれている、その歌枕を俳諧でつづつていこうという意図があつて、芭蕉は巡つて行ったんですね。

しかし、実際に行つてみると、山は崩れていたり、道が変わつていたり、川が氾濫していたり、昔の歌枕に行つても同じような風景に出会うことはできなかつた。でも、壺碑に至つて初めて、あれが千年前の証拠なんだ、というものに出会つた。本物ではなかつたという説もありますけれど（笑）芭蕉はそれを信じたんですね。

壺碑で初めて千載の形見に出会つた。で、「行脚の一徳：」。その感激で泣いたのだと思いますね。まぎれもなく何百年前の昔の形見を見に此処へ来たんだ、わざわざ陸奥に来て良かったなあと思つた、その感激の涙です。

そして先程お読みした平泉の欄があつて、「時のうつるまで泪を落し侍りぬ」。ここではたくさん涙を流したということを隠していませんね、長いこと泣いた。

次は羽黒山です。今度は文章で泣いたとか書いてませんけど、俳句の中に残っていますね。一つは芭蕉自身が詠んだ

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山を巡つたわけですけど、色々秘密のことが多く、文章に書いて残さないということが約束なので何も記しません、と書いてあつて「語られぬ」。語ることが出来ない、その「湯殿にぬらす袂かな」。私も裸足になつて湯殿山に行きましたけれど、そこで濡れたというよりは「ぬらす袂」ですから、やつぱり有難くて、感激しましたよ、という表現なんだと思います。

曾良は「泪」という字を使っていますね。

湯殿山銭ふむ道の泪かな

曾良

二人とも靈験あらかたな出羽三山を出て、身も心も洗われたような気がして感激の涙を落した、

有難いと思う涙を落した、そういう表現ですね。

次は「市振」のところですよ。

宿では隣の部屋で、遊女が送つてきた男と語つているのを襖越しに聞くわけですよ。遊女は自分の、こういう運命になつてしまったことを嘆いていて、ちょうど隣に僧形の芭蕉と曾良がいたものですから、ここから暫く後をついて行かせてください、と頼むのですね、その場面ですよ。これ、遊女の言葉ですよ。

衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁させ給へ、と、泪を落す。

これは遊女が涙を落したのです。「結縁させ給へ」ってね、ちょっとビックリしますけれど、これは仏道の縁ですよ。遊女が結婚して下さい、と言っているわけではないですよ。

僧形の「衣の上の御情に」縫りたいので暫く縁を結ばせてください、見え隠れでも後を慕つて行

きたい、という風に随分つましいお願いをするのですが、ここで芭蕉ははつきりと断るんですね。我々は先を急ぐので一緒に、遊女と道連れになるわけにはいかない、きつと仏の御加護がありますよと言つて、この後きつぱり断ります。

でも、遊女が涙をこぼしてまで頼んだんです、凄いですよね。普通の人だったら、じゃあ、そこまで歩きましょうか（笑）と言つてあげたくなりますね。ここは芭蕉の演出だという説もあります。『奥のほそ道』全体を歌仙の組み立て方であるという風に見ますと、恋の座だから遊女が出て来るんですね。花の座も月の座も、そういう場面がありますね。そういう興味を持って本文を読み直してみるのもまた、面白いと思います。

最後、これは金沢ですね。金沢に（小杉）一笑という若い弟子が出来まして、俳諧のセンスもあるし芭蕉は属目していて、金沢に行つたら一笑に会えるんだと楽しみにして行つたんですね。そうしたら一笑は亡くなつていたという事実に

会って、ここは凄く、激しく泣いています。

塚も動け我泣声は秋の風

声を上げて泣いた。しかも、一笑の塚も動いてくれと言わんばかりにね。

「泪」という言葉とか「袂をぬらす」という表現はありますが、「泣声」とまで言っているのはこの部分だけです。これは本当に悲しくて、若くして死んでしまった一笑を惜しむ想いとか、色んな想いが押し寄せて、慟哭の涙ですね。

如何でしたか、『奥のほそ道』で芭蕉はこんなに泣いているとは思いませんでしたでしょうか？

なにか修行の旅のようだと思っていましたでしょう？僧形に身をかためて墨染の衣で、曾良も頭を丸めて覚悟をしてついて来たわけですからね。私が気が付いただけで十力所泣いているんですね。(笑) 四百字詰め原稿用紙三十数枚の中で十力所ってやっぱり、相当泣いていると思います

ね。

皆様は意外に思われるかもしれませんが。私は戦後生まれなんです。父親は戦争に行った世代で「男は泣くもんじゃね」とかね、つい最近まで言われて育ちましたよ。今はどうなんでしょう？

でも古典を読んですと情けが分かる、もの的心情を理解できる。よくわかる人たちは皆、よく泣いたんですよ。で、一番よく泣いているのが光源氏なんですよ。

光源氏は恋人と会えないというだけで泣いているし、夕顔が死んじゃっただけでワンワン泣いて馬から転げ落ちたり、ズーッとその後一カ月くらい泣いて泣いて家に籠って、何か変なものけがとりついたんじゃないかって周りの人が心配したくらい、袂を濡らしてます。感激しても泣くし、悲しい時も泣くし、恋しくても泣くし、惜しんでも泣くしね。

平安時代の「もののあはれ」を理解する男たち

は、女と同じくらい泣いていたんですよ。で、「男は泣くもんじゃない」と言われ始めたのは多分、

戦国時代。男が戦わなければいけなかった時代でしょうか。私は『義経記』はあまり詳しくないのですが、どうでしょう。やっぱり戦っているものの人たちは泣かないのですか？そういう意味でもう一度『平家物語』も読んでみようかな、と思いますけど。

平家の人たちは貴族的ですから泣いていますよね。非常に優雅なところを持っています。でも、武士の時代になると泣いちゃいけない、本当に泣いていたらたまらない。その時代は、凄惨な戦争が繰り返されていきましたから。それで男は泣いてはいけない、という風に言われたんじゃないかな、と思うんです。

でも、芭蕉は『奥のほそ道』で大変よく泣いて見せてます。それはやはり、自分は平安の文学に出て来る男たちと同じように「もののあはれ」も哀しさも感激も、ものすごく感じやすい心を持っているから涙を流すのだ、ということを書いて

らなかつたんだと思うんですよ。

それで、だいぶ回り道して『源氏物語』の話を見せていただきたいと思います。

(資料) 三枚目の『季語で読む源氏物語』という本を出したので、これをご覧になると源氏物語の時代に季語なんてないでしょう？と皆さんおっしゃると思いますが、その通りなんです。季語という言葉は源氏物語の時代には無かったです。

でも、歌を詠む時の「題」というものが色々あって、それは季節に関わらず、恋だとか山だとか寺だとか、そういう題が出るわけなんです。その一つとして「季題」という、季節にかかわる題がありました。

俳句を五十年作っている者として、『源氏物語』を大人になって読み返してみた時に、自分も恋をしたり子供を産んだり大切な人と別れたり、そういう体験を経てから『源氏物語』を読むと、これに全てが凝縮されているくらい素晴らしい小説だ

と再発見しましたし、更に私にとって新鮮だった発見は、名場面には必ず季節が描かれていることです。

まるでバックグラウンドミュージックのように、何の花が咲いていたとか、月光が美しかったとか、虫の音が聴こえたとか、霜が輝いていたとか、大切な場面にはそういう季語が散りばめられているんです。逆にいうと、この季語描写がない場面は大切な場面じゃないんですね。そのくらい面白かったです。

そのダイジェスト版というか、目次をここ（資料）に記しましたが、『源氏物語』を始めから順番に読んでいくのではなく、一年間の季語で断ち切って場面を拾ってみました。でも、ここに書かれていない名場面も、また沢山あるんですね。「霞」という季語で『源氏物語』を読み直してみましたところ、源氏の旅立ちと芭蕉の旅立ちが非常によく似ている、ということに気が付きました。そこをちよっとお話ししたいと思います。

『源氏物語』は、ご存知のように京都の中で書かれていたものですから、源氏は生涯ずっと京都に生まれ育って暮らしていたんですね。ただ人生のうち一度だけ須磨、明石に行き、住んでいたことがあります。それは何故かというと、光源氏がまだ二十代の若い時、当時の帝の彼女だった、輿入れが決まっていた朧月夜というお姫様と間違いを犯してしまっただけです。

源氏には、勿論、紫の上という正妻ではないけれど、ちゃんと一緒に住んでた女性が居たのですが、ものすごく色好みですから色んな女性がほっとかない訳なんですよね。で、ある日、朧月夜と仲良くなってしまうと、彼女の所に通っているうちに発覚してしまうんですね。それは雷が鳴った日の翌日なんですが、どうも都に居づらくなっただけなんです。

帝が結婚しようと決めてた人だったわけですからね。しかも自分の政敵にあたる右大臣家のお姫様だったわけですから右大臣も面白くないし、帝は怒ったりはしなくてすけれど、余りいい気持ちで

はない。その頃、光源氏は順調に出世していたのですが、世の中の見目が厳しいですから、これは罰を受ける前に自分から、須磨へ行こう、と。須磨へ流されたと言われていますが、自分から身を引いて須磨に退居したんです。須磨の巻では淋しい年月を送って、でも明石の入道に招かれて；結局それが後の、源氏の繁栄のためには良い縁を結んだことになるのですが。

その源氏が都から須磨へ旅立っていく日というのが――、まず『源氏物語』の方を読みますね。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。

これ一つ、「有明の月」覚えておいてください。

花の木どもやうく盛りすぎて、わづかなる木陰の、いとしろき庭に、うすく霧渡りたる、そこはかとなく霞みあひて、秋のあはれに、多くたちまさされり。隅の高欄におしかゝりて、とばかり、ながめ給ふ。

花、この花というだけで桜です。桜はもう、盛りを過ぎてしまった。有明の月、それから盛りを過ぎた桜、それから霞がかつていた。

これは正妻葵の上の左大臣家に、いよいよ都を発ちますという挨拶をしに行った、翌朝の光景です。有明の月が見えていて、盛りを過ぎた花が見えていて、それらが霞みあつている。それを名残惜しげに眺めている光源氏の後ろ姿を見て、人々は、「入りがたの月いと明きに、いとゝなまめかしく清らにて、物おぼいたるさま、虎、おほかみだに泣きぬべし」とあります。

源氏が別れを惜しんでいる姿は素晴らしくて、もののあはれとか情けとか、趣はわからないであろう虎や狼でさえ泣くであろう、と。

さらに源氏が旅立つときです。

「御供に、たゞ五、六人ばかり、しも人、むつまじき限りして」出掛けて行った。

そしていよいよ都を離れる日は、こういう歌を

残しています。

いつかまた春のみやこの花を見む 時うしな
へる山がつにして

いつかまた春の都の花を見ることが出来るだろうか、私は時勢に遅れてしまった。山賤とは山に住んでいる木こりとか、そういう人です。今ももう落ちぶれてしまっているけれど、いつか都の花をまた見るだろうか。そういう思いで、桜の花がほぼ散ってしまった枝に結びつけてお送りした。

昔の人は優雅ですね。枝に結びつけて文や歌をお送りしたんですね。

そして舟で出掛けます。そこも名文句なんですね。夜の明けぬうちに旅立つわけです。

道すがら、おも影につとそひて、胸も塞がりながら、御舟に乗り給ひぬ。日長きころなれば、追風さへそひて、まだ申の刻ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。(中略)うち返り見給へるに、来しかたの山は霞み、はるかにて、まことに

三千里の外の心ちするに、權のしづくもたへがたし。

今読んだのは全部『源氏物語』の原文なんですよ。でも、ここまで読むと『奥のほそ道』をよく読んでらっしゃる方は、えー似てるなあ、と思いません？うなずいてらっしゃる方は、ああ、凄くよく似ている、とお気づきでしょう。まず、弥生二十日過ぎに出発したことね。弥生二十日過ぎに源氏は出立しています。芭蕉もそうでしたよ。

有明の月が出て来る、それから名残の花を見ている、舟の旅である、三千里の思い、離別の涙：ね？物凄くよく似ているんですよ。『奥のほそ道』の旅立ちの場面はこうでしたね。

弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月是有明にて光をさまれる物から、不二の峰幽にみえて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。

むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千じゆと云所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそぐ。

この「月是有明にて光をさまれる物から」というのは、このまま『源氏物語』の文章をたち入れているんですね。昔の日本の文学は名作の一部分を：歌とかね、有名なところを一部分、まさにコピ・ペですけど、そこを切り取ってこっちに入れるという手法がありました。謡曲なんかはもう、そのとおりなんですよね。それによって、その文章以外の想像の世界を広げるといふ効果があるわけですから。

「月是有明にて光をさまれるものから」というのは、これは『源氏物語』の「帚木」の段で、十七歳の光源氏が、空蟬という人妻と初めて恋をして明け方帰っていく時にね、

月是有明にて、光をさまれる物から、影さやかに見えて、中くをかしき曙なり。

という名文があります。

その時に、十七歳の光源氏は、同じ月の光でも見る者の気持ちによって、色々見え方が違うんだという。

何心なき空の気色も、ただ見る人から、艶にも、凄くも、見ゆるなりけり。

という具合に、まさに青春に目覚めたわけです。同じものを見ても同じ雨を眺めても、人生経験によってその時の自分の気持ちによって、同じ空も凄く艶っぽく見える。この時は艶っぽく見えたんですよね。でも、凄くすさまじいものにも見えるんだな、という風が目覚めた。非常に印象的な場面なんですけれど、その名文を芭蕉はここにたち入れています。

「幻のちまたに離別の涙をそぐ」

この時に芭蕉と別れを惜しんだ女性がいたんじゃないかって思いませんか？そう思ってしまうという書き方ですよこれって。私はもうびっくりしましたね。ああ、絶対別れを惜しんだ。だって、まるで自分が光源氏になったような(笑) 場面の

作り方じゃないですか。少なくともこの文章を書いた時には、『源氏物語』の文章を非常に意識して入れてたと思いますね。ぜひ、興味がありませんたら、『季語で読む源氏物語』をお読みください。この様に季語というものが無かった平安時代でも、日本人というのは季節によって季節の変化に自分の想いを託したり、歌を詠んでみたりして、そうやって想いを述べてきた民族なのだということがとてもよくお分かりになると思います。

この、『源氏物語』の光源氏は、折口信夫が言う「貴種流離譚」の一つなんです。

やんごとなき身分に生まれた、とても身分の高いつとに生まれた種、という意味が貴種です。光源氏は帝の子供ですからね。そういう高貴な生まれだった人が、ある罪を犯して流離する、そういうお話。折口信夫が日本文学の伝統の中には貴種流離譚というのがあるということを指摘してますが、『源氏物語』の光源氏は須磨、明石が流離の時代だったわけですね。それで都に返り咲いて、

その後はまた素晴らしい人間になっていくという、そういうお話が結構多いんですね。

もう一つ、先程言いました芭蕉が行かなかった歌枕にも挨拶の句を送っているというお話をちよつとしたいと思います。

それは藤中将実方という人の、ゆかりの地。「笠摺白石の城を過、笠嶋の郡に」笠嶋の郡というのは宮城県ですかね、中将実方の塚というのがあるんですね。芭蕉はそこへ行きたかったんです。でも、ひどい五月雨で、集中豪雨だったんでしょうね。危険だと言われてたし、自分も疲れてしまったので「よそながら眺やりて過」ぎた、そういうところがあります。

そして行けなかったところへ挨拶の句を残してます。

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

「さ月」五月雨の道がぬかっていたので行けな

かった。笠嶋は何処だろうなあ、という風に思いを残しているんですね。

実方の歌は、一番有名なのは百人一首に載ってますけど

かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知ら
じな燃ゆる思ひを

かっこいい歌ですよ。こんなに私があなただけを思っているのに、あなたは全然知らないでしょう、私の心の「燃ゆる思ひを」。

掛け詞として使われている「伊吹のさしも草」とは、お灸の艾のことです。こんなに思いが燃えているけれど私は言わないから全然分からないだろう。非常にニヒルな、ストイックでクールな男だったようですけれど。

その実方というのはどういう人だったかということ、この人も貴種だったんですよ。藤原家のお父さんもお母さんも生まれが良く、名門の貴公子だったんです。勅撰（和歌）集に六、七首歌

が残っているというので歌人としても有名な人だった。でもある時、急に左遷されてしまうわけなんです。まさに『源氏物語』が書かれていた時代、一条天皇の頃。中宮定子のところに行ったのが清少納言ですし、彰子のところにいたのが紫式部だったわけですね。

その同じ時代のある日、京都の東山へ桜狩に行っただけです。そしたら雨が降って来て皆、慌てて雨宿りしたんですね。そこで実方は

桜がり雨はふりきぬおなじくは濡るとも
花のかげにやどらむ
(撰集抄)

桜狩をしていたら雨が降ってきた。そんなに慌てて雨宿りに行かなくても、同じことだったら例え少々濡れても花の陰に隠れよう、という歌を詠んだ。素敵ですよ。誰かが、なかなか風流ない歌ですねなど言っただけです。

そしたら藤原行成（こうせい）、字がとても上手く、清少納言と仲が良かった…実は実方と三角

関係だったという説が残っています。その行成が、その歌は面白い、でも実方は「痴なり」って言ったんです。「をこ」って馬鹿って意味なんですよね（笑）おこまがしい、って言うでしょ？

そしたら実方は怒り狂って、杓を持って行成の冠を落したんです。当時の貴族の男にとつては恥をかかせたということなんです。絶対、髻を露わにしていけなかったわけですから。

その後、いきなり左遷させられてしまいます。彼は任地の笠嶋の道祖神のところを馬で通ったから、土地の人が「ここは道祖神が祀っているところなので、ちゃんと馬から降りて拜んでから行きなさい」と言った。しかし下馬せず通り過ぎようとして、神の怒りに触れ落馬して命を落としてしまった。死んだ後も、行成に出世を先に奪われたことを恨んで、雀に生まれ変わって宮中に出入りしている。そういう伝説があるんですよ。

それだけだったら血気に逸る傲慢な若者だけでしょ？それなのに、西行も実方塚で歌を残しているし、その歌枕を訪ねて芭蕉も「奥のほそ道」の

時どうしても行きたかった、それなのに行くことが出来なかった。芭蕉が心惹かれた理由が分からないですよ。それで『源平盛衰記』（げんべいじょうすいき）を読んでみました。そうしたら、もっと詳しく書いてあったんです。

「一条院の御宇」二人とも宮中に参内していた時に、実方中将が何か日頃の恨みを持っていて、何も言うこともなく杓を取り直して、行成の冠を打ち落として庭に投げた。「もとよりあらはになしてけり」。

その時、行成は少しも騒がず「行成騒がず閑々と主殿司を召て冠を取寄せ笄抽出して髪搔なほし」櫛でこう、搔き直して「冠打ちて殊に袖搔合」ちゃんと襟を正して、実方に向かつてこのように言った。

「一体どうしたことでしょうか、いきなりこんな乱暴を受ける心当たりがございません。しかも、殿中ですぞ」松の廊下みたくですね（笑）「その理由を承ってからお返しいたしましょう」

という風に言ったので、実方は立場が無くなって突っ立っているばかりだったんです。

それを一条院が格子戸の内から見ていた。そんなことあり得ないですよ（笑）櫛子の隙から見ていて「行成は勇々しき穩便の者也」行成は偉い、穩便に事を収めた。で、蔵人頭に出世させたいんですよ。

実方には「歌枕注して進ぜよ」という罰を授けて陸奥に流した。歌枕注して進ぜよ、と言うところが優雅でしょう？それだけ都人にとっては歌枕が何処にあつて、何処で誰が、どのような歌を残したかということは、まだちゃんとしたガイドブックが無かったわけなんです。そのガイドブックを作れ、という訳なんです。それで実方は歌人ですから、一生懸命調べ歩いたんですよ。

「阿古屋の松」という謡曲があります。それで三年間、歌枕を調べた。阿古屋の松だけが何処にあるのか分からなかった。確かに陸奥の国にあると聞いていたのに、無い。無くて無くて訪ねあぐ

ねていたら、一人の翁に出会った。翁が「あなたは何かもの想いをしている、何を悩んでらっしゃるんですか」と聞いた。「阿古屋の松を訪ね歩いているんです」と実方が言った。

そうしたら翁が「陸奥の阿古屋の松に木隠れて出づべく月の出やらぬ哉」という歌がある。都からわざわざ訪ねて来たんですね。今は国が二分さされているので、隣の出羽の国の領土に阿古屋の松があるんですよ」と教えてくれた。実はこの翁は塩竈の大明神だったというんですね。塩竈の大明神の化身によって、実方は阿古屋の松を知ることができた。

「阿古屋の松は何処ぞや。いで羽の国を訪ねん。野くれ山くれ里過ぎて。そこしもいさしまり。本の身を知る雨ならば。」ずーっと訪ね歩く道行があつて、やっと阿古屋の松に行きついた、という謡があるんですよ。これは『奥のほそ道』の安積山のところだ。

「かつみく」と尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ

と非常によく似ているんですね。それも芭蕉は意識して書いているところなんです。

なぜ実方が死んでしまったか『源平盛衰記』には詳しく書いて有りました。ある日、実方が笠嶋の道祖神の前を馬で通りがかった。そしたら里人が

「この神は靈験あらかたな神だから、下馬して拜んでから過ぎなさい」と言った。

実方は「いかなる神ぞ」どんな神なんだ、と聞いていますよ。「これは都の賀茂の河原の西の一条、北の辺にいた出雲路の道祖神の娘が商人に嫁いで親に勘当され、この国に追われてきた。それで里人が崇め奉っているのだ。」

実方は都の貴公子ですよ。そんな都の賀茂の河原の……。それを聞いて「さては此神下品の女神にや」って言っているんですよ。自分は上品の人間である。しかしこれは下品の女神だから「我、下馬におよばす」と言つて馬に鞭を打つて通り過ぎようとしたんです。で、運の悪いことに落馬して死んでしまった。罰が当たったという風

に言われ続けているんですよ。可哀そうじゃないですか。(笑)

『源平盛衰記』にも「人臣に列て人に礼を不致ば被流罪、神道を欺て神に拜を不成れば横死にあへり。実に奢る人也けり」と書かれてますけど、西行や芭蕉はやっぱ風雅な人間だったなあと思って、心惹かれていたのです。歌枕をずっと訪ね歩いて行った人だから、西行も歌を残していませんね。

朽ちもせぬその名ばかりを

留め置て枯野の薄形見にぞ見る

(山家集)

形見のすすき、というのが今でも植えられていますけれど、軍記物から見ると、文学者が見る価値観、文芸の輩から見ると風雅なものが見る価値観とは、これくらい違う、ということですから芭蕉は実方の魂を慰めたくて、どうしても

行きたかったんですね、でも行けなかった。

私は行ってみました。そこに大きな杉が植えられているんですよ。その杉に藤の花の蔓が絡まって見事な花を咲かせるんです。藤中将実方は藤原家ですからね。実方塚というのがありまして、そこが実方の墓と伝えられていますけれど、そこには桜狩の歌碑が側に建てられている。その墳墓の上に藤の花が散っているんですよ。素晴らしいところですので、ぜひ皆さん行って下さい。

もし、実方が歌枕の権威になって都に帰つたら貴種流離譚になっていたんですね。けどどあえなく亡くなつてしまったので、そうは成り得ませんでしたけれど。

『奥のほそ道』の旅に出た芭蕉の心の中にも、やはり何か、日本文学の伝統である貴種流離の思いというのがあったような気がします。色んなところを辿って歩いて行つてるわけですね。

それで芭蕉は確かに『奥のほそ道』という名作

を残したことで、永遠の命を得ましたよね。本年、三百二十七年経っているそうですけど、その後の私たちも此処に来て、芭蕉に想いを馳せながら、私たちの句を作っている。それから『奥のほそ道』を読むことで芭蕉の思いはまた蘇る。人間の命は短いですけれど文芸の命の長さをつくづく感じます。それを芭蕉も願っていたのではないかと、こういう処に参りますと特にその思いが致します。

どうも、ありがとうございました。(一同拍手)

プロフィール

にしむら かずこ

昭和41年 「慶大俳句」に入会、清崎敏郎に師事。

昭和45年 慶應義塾大学国文科卒業。

平成8年 行方克巳と「知音」創刊、代表。

句集 『夏帽子』(俳人協会新人賞)

『窓』『心音』(俳人協会賞)

著作 『虚子の京都』(同評論賞)

毎日俳壇選者。『季語で読む……』シリーズ執筆

継続。

秘佛御開帳 「一字金輪佛頂尊」

菅原光聴

平成二十八年六月二十五日より十一月六日まで、中尊寺秘佛「一字金輪佛頂尊」の御開帳が中尊寺讚衡藏秘仏室にて奉修されました。

中尊寺一山では「平泉」世界文化遺産登録五周年記念・東日本大震災復興祈願の行事として準備を進めてまいりましたが、折しも四月十四日、最大震度七を観測する「熊本地震」が発生いたしました。当年は東日本大震災から五年目にあたる年ということもあり、震災直後の暗中模索の日々が思わず脳裏をよぎりました。

一字金輪佛頂尊は月輪に住する金剛界大日如来が胎藏界の日輪三昧に住したお姿とも言われ、万物の営みの全てを体現した仏さまとされています。この仏さまを本尊として行われる修法の力は五百由旬（一由旬は十数キロメートルとされる）に及ぶほど絶大だといわれています。しかし、強さとは裏腹な素月の様に柔和なお姿は「人肌の大日如来」

また、ヨーロッパから来られた中年のご夫婦が、入れ替わる参拝者の人波のなか一時間もずつと静かに仏さまを見つめておられました。部屋を出られる折に奥様が目と胸に手をやって「涙が出るほど胸がいつぱいになりました」とジェスチャーでお伝えいただきました。

ただ寂として坐しておられながら、常にそれぞれの人に対峙して、その心の琴線を照らしてくださる如来のただならぬ力を感じずにはいられませんでした。

参拝された方から、「このように徳の高い仏さまであれば、秘佛とせず常に拜むことができるようにしていただければ」とのご意見もありました。確かにその考え方も正しいでしょう。ただ、方便をもって仏が人々の前から姿を消すことによつて、逆に仏を求め、仏教を実践する心が喚起されるという考え方もあります。仏教には、姿は見えなくても念ずることによつてお会い出来る仏様もおられます。いつでもそばに駆けつけて下さる菩薩様もおられます。

前回、平成二十四年の御開帳は震災の翌年のことでした。三陸沿岸被災地へのボランティアとおぼしき装いに身を包んだ方々が、一心に一字金輪佛頂尊に手を合わせている姿

と称され、白く光る玉眼の眼差しに見つめられると、自然と静かな心持ちになってゆくのを覚えます。

国の一大事を救う仏様であると同時に、個人の心にも安心を与えて下さるそのお姿は、藤原秀衡公の念持仏という伝承もうなづける気がします。

日々御開帳にお参りいただいた方々には、自然災害に翻弄されながらも、人間もまたその自然と不二の存在であり、必ず訪れるであろう再生を「ポロン」のご真言と共に一心に念じていただくことに努めました。

ある日、お側でご案内をさせていただいたとき、新聞の切り抜きをもった若い女性がじつと仏さまのお顔を見つめながら佇んでおられました。話を伺うと持っていたのは昭和六十一年の御開帳の記事で、紙面の端に「〇〇子に似ているかしら」との文字が手書きされています。このほどこ他界された御母の遺品から見つかった紙片で、今年再び御開帳が行われるというニュースを聞き及んでお参りにいらしたとのこと。まだ小学生当時の自分をこの仏さまに重ね見た母の思いがこの仏さまを通して伝えられた様でした。

がたびたび見かけられました。誰しもが仏と共鳴し、菩薩のように、困っている人たちのために何かをしたいと突き動かされる心を体の内に秘めていることに気づかされた思いでした。

あの震災から五年にあたる今年、彼岸の九月二十四日には地元の方々のご協力をいただいて「中尊寺・町民参拝」が行われ、町内外から三〇〇名を超える方々が秘佛を参拝し、被災地の復興を祈念しました。

滅多にお会い出来ないこの仏さまにやつとお会い出来たという感動がお互いに共鳴しあいながらも、お参りされた方それぞれが、自分だけの充足感を与えていただいたかのように感じられる今回の御開帳でした。

期間中お参りいただき、災害復興に心を寄せていただいた多くの皆さまに深く感謝申し上げます。

(総務部次長)

「平泉」世界遺産登録五周年記念法要 『如意輪講式』について

菅野宏紹

『如意輪講式』は、奥州藤原氏三代藤原秀衡公の御母が、比叡山延暦寺の僧澄憲法印に依頼して作成された如意輪観音を讃歎する全七段からなる講式です。

この講式は、平成九年発行の中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊号において、同研究所佐々木邦世主任（当時、現所長）が「よみがえる信の風光―秀衡の母請託如意輪講式を読む」と題した論文を発表され、そこには原文、書き下し文が付されており、

その後、世界遺産登録三周年の年である平成二十六年に、山田俊和貫首から「これが平泉の真の世界遺産だ」というものは何であろうか、という話題になった際に、澄憲が制作した「如意輪講式」ではないかということになりました。山田貫首は八五〇年ぶりにこの法要を復元することを思い立たれ、天台声明の泰斗である海老原廣伸師（北総教区

ました。式文の朗々たる独唱、伽陀念仏の僧俗一体の唱和、聴衆の中には感動の涙を流される方もおられました。秀衡公の御母がいかに如意輪観音に深く帰依されていたか、門外漢の小生でも少し理解できたような気がしております。

法要当日、両山の僧侶、特に招かれた圓教寺大樹孝啓探題大僧正・天台宗務庁阿部昌宏部長・延暦寺水尾寂芳副執行・復元に携わった関係者、来賓合わせて二〇〇名が参加されました。



如意輪観世音菩薩像

泉養寺前住職）に相談され、国文学の柴佳世乃先生（千葉大学文学部教授）、音楽学の近藤静乃先生（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）をご紹介いただきました。これらの先生方に加え、毛越寺貫主藤里明久師、佐々木邦世師、積善院住職佐々木仁秀師等を委員とした「如意輪講式奉修委員会」を平成二十七年二月に組織し、中尊寺一山の了解のもと本格的な復元作業に着手しました。海老原師が全体的なコーディネーターとなられ、国文学的な読み方を柴先生が、仏教的読み方を佐々木邦世師が担当され、声明音位については近藤先生が、伽陀・念仏の博士作成指導を佐々木仁秀師が担当されました。

この間、中尊寺、当山と同じく奥州藤原氏と深い縁のある医王山毛越寺の僧侶ほか、中尊寺ゆかりの寺院僧侶から出仕者の選定を行い、福聚教会中尊寺支部・毛越寺支部会員に法要出仕を依頼、伽陀念仏の詠唱、修礼等を開始し、僧侶、ご詠歌衆それぞれの修礼や全体リハーサルを積み重ね本番に臨みました。

今回の法要では、全七段のうち、「本願利益門」「如意福徳門」「往生極楽門」を抽出して編成した法要形式となり

福聚教会加藤玲子名誉講師を始め中尊寺・毛越寺のご詠歌衆の詠唱、僧俗一体となって唱えた伽陀や念仏は、まさに平泉の平和思想を体現した一大法会となりました。

まさに、世界遺産登録五周年記念に相応しい法要であったと思いますし、それに少々携わることができたことはありがたいことであつたと感じております。

（法務部執事）



如意輪講式と縁の深い書写山圓教寺の大樹孝啓探題大僧正（中央）も随喜

如意輪講式

差定

導	中尊寺貫首	山田俊和
始	地藏院	佐々木秀圓
結	大養寺前院	海老原明久
本願	泉養寺前院	藤里仁秀
利	積善院	佐々木慶信
益	千手院	千葉亮賢
文	満福寺	千葉澄照
陀	藥樹王院	北嶺亮啓
	永泉寺	中岡永興
	實積院	櫻浦章頼
	東泉院	室生頼成
	正善院	高倉弘述
	圓乘院	佐々木五弘
	常住院	佐々木亮
	壽福寺	加藤玲子
	福聚教	中尊寺支部
	福聚教	毛越寺支部
念	念仏句頭	
詠	詠唱衆	
會	具在前	菅野宏紹
行	利生院	清水秀司
事	觀音院	佐々木有法
承	承仕	大徳院
仕		

維時 平成二十八年六月二十六日 午後二時執行

会場 中尊寺本堂
衣體 應當素絹七条切袴

平泉世界文化遺産

如意輪講式奉修委員会

委員長	中尊寺貫首	山田俊和
副委員長	毛越寺貫主	藤里明久
副委員長	泉養寺前任職	海老原廣伸
委員	千葉大学文学部教授	柴佳世乃
委員	東京藝術大学音楽学部非常勤講師	近藤静乃
委員	中尊寺圓乘院	佐々木邦世
委員	中尊寺積善院	佐々木仁秀
委員	中尊寺執事長	清水広元
委員	毛越寺執事長	千葉慶信
委員	中尊寺利生院	菅野宏紹

唱導門の故地 安居院を訪ねて

佐々木 邦世

昨年二月初め、私は、京都で北大路の手前から大宮通「寺之内上」(北へ)行つて車を降りた。そこに、安居院西法寺という市中寺があります。

この、安居院の開祖が澄憲法印。そう、奥州の藤原秀衡の母の請託を受けて『如意輪講式』を制作した、その澄憲です。当時まだ、二十代半ばだったでしょう。比叡山東塔北谷の竹林院に住して、詞章の修学に専念していたころでした。

しかし、澄憲は比叡山で起筆推敲したのではなく、播州書写山(兵庫県)に行つて、二七日(14日)籠もつて講式を制作したのです。書写山は、天人が常に降りてきて桜の生木に如意輪観音を拝んだといわれます。摩尼殿のマニは「如意」の梵語です。

後白河院の近臣であつた父藤原通憲(信西)が平治の乱で非業の最期を遂げます。澄憲が三十四歳のときでした。澄憲も、縁座(巻き添え)で下野国(栃木県)に配流されますが、間もなく帰洛します。このころから、京の里坊「安居院の澄憲」として世人に慕われるようになります。

澄憲は妻帯し、生れた長男が後継の聖覚です。実子の法嗣を「真弟」といい、聖覚も比叡山で学びました。後に、世評「濁世の富楼那」、つまり説法第一のひと藤原定家が『明月記』に書いています。聖覚は唱導門を大成し、法然上人の法弟となり、文献を集成した『言泉集』が伝わります。

門前の石柱には「聖覚法印旧蹟」とあり、澄憲が住した本来の安居院は、少し離れた所であつたようです。現在地は、聖覚の墓所地に再建されたもので、浄土真宗本願寺派に属しています。

十五年ほど前、はじめてここを訪ねた際、先代のこ

住職に、什宝の「阿弥陀四十八願」を見せていただきました。承元二年（二二〇八）の奥書があり、「叡山延暦寺東塔院前権大僧都聖覚 四十二歳」と書してありました。

「安居院始祖澄憲法印尊影」も拝見しました。その画面の上部傍に「華王院蓮行房澄憲法印」と。これは、昭和辛卯年（二十六年）に、天台宗の曼殊院門主山口光圓師の染筆です。



「華王院蓮行房澄憲法印」吉川観方画（京都安居院西法寺蔵）

その山口光圓師が、澄憲にはじまり聖覚が大成したこの唱導門について、「論議と法談と法式を通じて、法華による浄土信仰」の法門、と解釈していたのが思い出されます。先学の卓見でしょう。

時が移り人が代わっても、京人も、遠国陸奥のひとつも、また、宗派とかそういうものを超えて、通じあえるものがあり、路地がありました。

くわんのんの慈眼無量の秋のかげ 八幡城太郎
水澄むや誰もが胸にある佛 加藤三七子

こうした信の風光に接すると、宮沢賢治の世界「時空の移動」とか、東に西に南に北に「行つて」という、そこになにか通じるようにも思われます。

東二病氣ノコドモアレバ
行ツテ看病シテヤリ

また

南二死ニサウナ人アレバ
行ツテコハガラナクテモイトイヒ

観音菩薩、菩薩は「目指して道を行く人」です。迷うなかに、迷わぬものを求めて「行く」道です。「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」という賢治は、信仰の人、菩薩といえるでしょう。

澄憲法印、無論そうです。ただ、澄憲は比叡山を降りて、老いて妻帯し、京一条の里坊安居院に住したので、名僧列伝にその名は無い。けれども、世に「四海の大唱導」と称讃された菩薩でした。

菩提心を発すとは、人間が最も人間らしい心をもつことです。

（中尊寺仏教文化研究所長）

「平泉「如意輪講式」より第五門抜」

第五に宿縁厚故心門とは、この界の衆生に機縁相応せることを展べむ。それ、この菩薩は娑婆に有縁の薩埵、利生無双の大神なり。まことに此土の衆生彼の尊に化俗結縁もつとも深厚なるをや。

百済国の七尺の霊像、送って極楽の東門の閤に安んじ、上宮王の七生の本尊、留めて雍州北京の室に置けり。聖武皇帝の、仏殿を南都に排け泥土を和して如意輪像を造る。良弁僧正、砂金を東土（陸奥）より得たりし。

弘法大師は第三地の菩薩、彫刻の功を励まして形像を摩尼の峯に著す。

性空上人は六根浄の行者、天鳥の告げによつて生木を書写山に刻む。ここに知りぬ、観世音は娑婆に縁深く、日域に契り厚きことを。何ぞ況んや釈迦如来は閻浮提の諸々の衆生をもつて、併しながら（悉くみな）この菩薩に付属したまえり。

天台寺桂泉観音出開帳

菅野 澄 円

平成二十八年七月三十日から九月十一日まで中尊寺讚衡蔵を会場に、天台寺の御本尊聖観世音菩薩の出開帳が行われました。歴史的にも初めてのことで、「桂泉観音さん」「御山の観音さん」と親しまれ、鉦彫りの代表作として知られる仏像です。

八葉山天台寺は、二戸市浄法寺町にある古刹で、奈良時代の神亀五年（七二八）に行基菩薩によって開山され、山内の桂の大木を刻んで本尊聖観世音菩薩としたと伝わります。近年では瀬戸内寂聴権大僧正が住職をされていたことで知られるようになりました。参道登り口には、今でも桂の大木と桂清水（桂泉）という湧き水があり、清水を湛えています。

桂清水・桂泉と呼ばれる場所は、青森県弘前市大沢堂ヶ平にもあり、かつては修験道場として栄えた地です。全国的にも石川県加賀市の山中温泉、長野県小菅など、同様の



8月27日には天台寺住職のギャラリートークが行われた

地名が残っていますが、いずれも信仰の対象となった歴史を持つています。

古代の日本人は桂と泉についてどのようなとらえていたか、その手がかりの一つが古事記・日本書紀の「海幸彦と山幸彦の物語」です。海幸彦の釣り針をなくしてしまった山幸彦が、その釣り針を探すため、海神である豊玉彦の宮殿を尋ね豊玉姫と出会うという場面で、宮の前にある井戸と桂の木（湯津香木）が登場します。湯津（齋つ）は神聖の意です。香木については曖昧なところもあり、他の場面では「カツラ」「カエデ」両方の読み方があります。また中国で桂花と呼ばれるのは木犀のことなので、古事記日本書紀の湯津香木を桂だと単純に説明仕切れない部分があります。ただ、神々が降り立つ程の神聖な香木という意味では、落雷のあつた檀木の香り高い根の中心部分を仏像とした古代インドに通じます。仏教経典に見える最初の仏像造立といわれるのは、『増一阿含経』巻二十八で優填王が牛頭梅檀をもつて刻んだ五尺の釈迦仏の尊像とされています。梅檀・白檀・紫檀は香木で木目も美しい木です。日本では入手の難しい木ですので、同じ条件を満たす檜材が多

用されましたが、桂材も東日本では多くの作例が残っています。中尊寺の秘仏一字金輪佛頂尊、金色堂の諸仏の一部も桂材であることが解っています。また中国の神話で月桂とは、月にある想像上の樹で、その生長と共に月が満ち欠けすると考えられました。現代人のほとんどは気にもかけませんが、月の満ち欠けは農耕・狩猟・漁業、そして生命の営みにつながる指標でした。山幸彦の物語で井戸の側に桂の木があつたように、その生息は水辺によく生育し、山中では溪流などに見かけることが多く、清流を指し示すように佇み、根元から清水を生み出すかの如き桂の大木は、霊木としての神秘性を備えていたことでしょう。言うまでもなく水も又、命の源です。

鉦彫の仏像は、かつては制作途中の仕上げを行っていない仏像であるという学説もありましたが、現在では意図的に木肌を現し鑿跡を残したものと考えられ、そこに御衣木（仏像の用材）そのものを神聖視していたことがうかがわれます。桂泉観音像も、お顔や御手は滑らかに仕上げられているのに対し、衣服や冠には鑿で規則正しい縞模様が彫られています。箔押しや彩色をすることなく、木の温もり

を感じます。

自然そのものを八百万の神々として崇拜してきた日本人にとつて、御神木や霊木の中に仏を感じ得し、彫り出ししていくことは、最も自然な造像方法であつたと言えるでしょう。

鉦彫の仏像も、東日本を中心に残っていて、桂材×鉦彫という組み合わせは、平安期におけるこの地域の仏教信仰の広まりと関係があるようです。奈良京都の職業的仏師とは別の、遊行僧による造像も指摘されています。

天台寺では平成二十五年九月から平成三十二年三月まで



天台寺参道入口の桂清水

「重要文化財天台寺本堂仁王門保存修理事業」が行われています。昭和二十九年の屋根葺替え修理からでも、六十年ぶりの修理です。工事完了までの間、覆屋がかかり拝観エリアも限られておりますので、出開帳の会場となった讃衡藏では、天台寺境内の情景を想像していただけるよう配慮いたしました。期間中、修理事業へのご協力をお願いしたところ、御参拝の皆様より募金三三三、三〇〇円が寄せられております。

名誉住職瀬戸内寂聴様からは寄稿をいただき、展示およびパンフレットに掲載させていただきました。天台寺総代会様、二戸市教育委員会様、文化財建造物保存技術協会様にも御助言、御協力をいただきました。みなさまに心より感謝申し上げます。

〈参考文献〉

『日本仏像彫刻の研究』 久野健 吉川弘文館

『天台寺』 編集・岩手県立博物館

(管財部執事)

中尊寺秘佛と金色堂町民参拝

千葉 快 俊

今年九州地方と東北地方に大きな爪痕を残した自然災害が発生した。

四月十四日、熊本県益城町と西原村を震源とする「熊本地震」。

これは震度七を観測する地震で、今でも余震が続き、熊本県・大分県で関連死も含め百三十一人の尊い命を奪った。

また、八月三十日には、日本の南で複雑な動きをしてきた台風十号が、大船渡市付近に上陸し、岩泉町を中心に釜石市、大槌町、宮古市、久慈市に豪雨をもたらせ甚大な被害を与え、岩手県内で二十名の死亡、三名の行方不明者を出した。

その後、北海道に移動し十勝地方で川を氾濫させ、農作物や牧畜業に深刻なダメージを与えた。

あまり知られてはいないが、この台風は中国大陸の低気圧と合わる形となり、海を越えた北朝鮮にも被害をもた

らし、行方不明者十五名、四万四千人が被災した。

甚大な被害をもたらした東日本大震災から早五年。復興も進んではいるものの、被災地では未だに避難生活を余儀なくされ困難な生活をおくっている方もたくさんいる。

これらのことに鑑み、秋彼岸の九月二十四日、中尊寺では町民の皆様と共に一字金輪佛頂尊におすがりし、被災地の復興、国土安穩を祈願し、また、金色堂では、これらの自然災害で犠牲となった多くの尊霊が浄土へ導かれるように物故者供養をすることとなった。

発表が開催日五日前と非常に遅かったため、町民の方々に集まっていただけのか心配したが、趣旨に賛同された方々約三百人が、夕方五時過ぎに金色堂前へ続々と集まってくださった。

金色堂前で、参拝に先立ち山田貫首が「一字金輪佛頂尊は天変地異があつた時に多くの人々の心を慰め、憂いを取り除き、安心を与えてくれる仏様、自然災害で亡くなった方の菩提を弔い、復興を祈念し、世界に平和が訪れ、我々の暮らしに幸福が満ちるよう、この機会にご縁を結んでいただきたい」と集まった町民の方々に呼びかけ、それに続

き、僧侶が金色堂と秘仏室に別れて、読経を始めると同時に、町民参拝が始まった。

夕闇迫る時間帯なので、事前にNPO法人みんなでつくる平泉（小野寺郁夫理事長）をお願いし、八百個の「夢灯り」を金色堂前から秘仏室までの通り約二百メートルに並べていただき、参拝者の足下を照らした。



特に、金色堂前の石段に並べられたその灯りは、幻想的であり、参拝者がそこを歩いていく姿を見ていると、まさに浄土へ導かれて行くような姿に感じられた。

金色堂では僧侶が阿弥陀経を唱えて災害物故者を慰霊し、秘佛一字金輪

佛頂尊の前では法華経を唱え被災地復興を祈願している中を、参拝のみなさまはゆつくりと手を合わせて祈りを捧げられていた。最後に世界平和を祈願した「中尊寺ハスの実」をお配りし、町民参拝を終了した。

世界平和を語るとき、近年の北朝鮮の核実験や核武装問題、中東イラクやシリアの内戦、そしてその影響によるヨーロッパの難民問題、ロシアとウクライナの国境紛争、世界のどこかで必ず争いが絶えない現実がある。

今まさに世界中が不満を募らせ、爆発するかのようないを感じてしまう。

このような時こそ、世の中に「平和の心」を発信できた事は、大変意義深いことであつたと思う。これからも、より広く繋がりをもち世界に訴えていかななくてはならない。

今回の開催にあたり、お手伝いいただいたNPO法人みんなでつくる平泉の皆様、「夢灯り」の準備から撤収まで、誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

（総務部執事）

「平泉」世界遺産登録五周年記念

念仏会く浄土の祈りく 報告

三 浦 章 興

平成二十八年十月二十二日午前十一時より、中尊寺本堂にて、「平泉」世界遺産登録五周年を記念する諸行事の一環として、「念仏会く浄土の祈りく」と題した法要が執り行われました。

中尊寺は嘉祥三年（八五〇）、慈覚大師円仁によって開かれたと伝わっております。慈覚大師円仁は、唐に渡り様々な苦難を乗り越え多くの教えを学び、それらを日本にもたらしました。現在天台宗にて執り行われている法要「常行三昧」もそのうちの一つです。

さる平成二十五年十月六日、慈覚大師千五百年御遠忌の報恩行事として、「常行三昧」と「念仏会」を併せて編成した法要を執り行いました。その時は初めての試みでありましたので、こうすれば良かったのではという反省点は

あつたものの、多くの参詣者に参列頂くだけでも有り難く、何とか無事に修することができました。

本年は世界遺産登録五周年の記念すべき年ですが、また東日本大震災から数えて五年目となります。一人でも多くの方に、東日本大震災やその後に発生した自然災害による物故者の追善供養をして頂くため、そして参加者各家の先祖代々の霊を供養して頂くために、またはそれぞれの心の願いを祈願して頂くために、多くの参詣者が来山される秋の紅葉の時期を選んで、厳修することと致しました。

「常行三昧」について説明いたしますと、阿弥陀如来への帰依を目的として、阿弥陀仏の名号を唱え、阿弥陀経を誦する法要です。阿弥陀経を唱える際には、道場内を行道（本尊を中心に、その周囲を時計回りに歩くこと）するのが特徴です。本来の形であれば、阿弥陀経は一回のみ唱えますが、今回は法要が終わるまでの間、十回ほど繰り返し唱え、その間僧侶は道場内を行道することとなります。

「念仏会」は、大きな数珠を広げ、皆で輪になってその数珠を繰り送りながら、声を合わせて「南無阿弥陀仏」と念仏を繰り返し唱える法要です。古来より百万遍と称し、

百万回念仏を唱える行法があり、多くの参列者を交えて行われるものとしては、京都百万遍知恩寺のものが有名です。一般的には葬送儀礼の一つとしてこの地域でも見られますが、亡くなられた方の冥福を祈るため、近隣の方々が集まって数珠繰りを行うことがあります。

今回使われる大数珠は、普段は施餓鬼会の際、白蓮講中によつて念仏を唱えるときに使われるものです。その大きさは、長さは約十三メートル、数珠の玉の数は五四〇個、数珠の玉の大きさは直径が約二センチメートルです。そのため本堂の畳が敷いてある外陣いっぱいには広げないと回すことはできません。

さて、当日は前回の反省から多くの方々にお手伝いをお願いすることが必要とされたため、中尊寺の檀家総代・世話人の皆さま、普段は法要の前にご詠歌をお唱え頂いているご詠歌衆の皆さまに集まって頂き、法要の意味するところや、何も知らないでお参りに来た方々を積極的に念仏の輪の中へ入って頂くよう、スムーズに進行が行われるようにするため、綿密に打合せを行い、法要に備えました。

いよいよ十一時から法要が始まります。初めに中尊寺貫

ループは初めての経験だと思えますが、仲間と一緒に、皆の願いを仏様に届けるがごとく、大きな声で念仏を唱えていました。小さなお子さんを連れられた若いご夫婦は我が子に数珠を繰らせ、一生懸命周りの大人のまねをしながら、精一杯数珠に掴まっている姿を見て目を細めていました。

今回は参列された皆さまに対し、その証となる小さな護符を用意させて頂き、数珠繰りの輪を抜けた方々には、その場で僧侶の手から直接お渡しさせて頂きました。

このように念仏会は円滑に進められて行きましたが、前回からの課題であったこととして、内陣の僧侶の読経と、外陣の参列者の念仏のリズムを合わせるものが木魚一つであるということ。本堂内に響く二つの違った言葉を同じリズムで合わせるのは意外と注意深く行わないとバラバラになってしまうのです。木魚を叩く僧侶は、常に両方の声を聞きながらうまく合うようにと叩きますが、なかなか難しいものだと苦勞を語っておりました。

午後二時を過ぎたあたりで、最後の阿弥陀経が唱え終わると同時に最後の南無阿弥陀仏が唱えられ、念仏会は無事終了いたしました。

首以下、出仕の一人僧侶方が正面から本尊様の安置してある内陣へ入堂し、常行三昧が始まりました。

僧侶方が内陣へ入られるのをお迎えした後、外陣では総代世話人とご詠歌衆が、大数珠を広げ、数珠を繰り始める時を待ちます。法要の次第が進み、内陣の僧侶が阿弥陀経を唱えながら行道を始めました。それを合図に、南無阿弥陀仏と唱えながら数珠繰りが始まりました。

当初は、一般の方々が遠慮されて、なかなか輪に入って頂けないのではないかと心配もありましたが、事前にマスコミ等を通じ広報活動を行っていたためか、念仏会に参加するため来山された方々が外陣の隅に列をなして待っており、数珠繰りが始まると同時に、数珠の周りには人でぎっしり埋まり、本堂内に念仏の声が高らかに響きました。

開始から一時間ほどすると、今度は中尊寺に参拝に来られて初めて念仏会があることを知り、趣旨を説明すると興味深げに堂内に入り、周囲の見よう見まねで数珠を繰り、念仏を唱える方が多くなりました。

団体でいらつしたご老人方は願うところを心に思い目を閉じて静かに念仏を唱えられており、若い男女のグ

約三時間に渡る法要でありましたが、今回の念仏会には三〇〇人を超える方々に参列頂きました。

中尊寺では年間多くの法要を執り行っておりますが、今回の念仏会のように参拝に来られた方が自由に参列頂ける法要は、ほとんどありません。我々僧侶の間でも、もつと多くの方々に、そしてより自由な形で法要に参列頂き、仏縁を結ぶ機会を作れば良いのだがと常々話しております。今回の念仏会を一つの成功例として、今後新しい、または現行の法要をうまく形を変えるなどして、そういった機会を増やせばというのが今後の課題となるでしょう。

良忍上人は比叡山で修行された後、融通念仏宗の開祖とされました。融通念仏を辞書で調べますと「我が念仏の功德は一切人に融通し、一切人の念仏の功德は我に融通する、云々」とあります。

その教えに従えば、今回の念仏会にて唱えられた念仏は、一つ一つが融通（溶け合う）することで幾多もの念仏と成り、多くの魂を供養する力となり、また念仏を唱えた一人一人の願いを叶える力となったことでしょう。

（法務部長）

中尊寺奉納神楽を終えて

千葉 快 俊

平成二十八年九月十七日と九月二十四日の両日、岩手・宮城の四団体の神楽保存会の方々に中尊寺本堂で神楽を奉演していただきました。

未曾有の犠牲者を出した震災から早五年が過ぎ、復興も進んでいるとは言え、未だ仮設住宅生活や故郷を遠く離れ、暮らしている方々が沢山いる現実があります。

しかし、たとえ今までと違った生活環境の中であっても、況してや遠くにいても、地元根ざした伝統文化や風習が復活することにより、望郷の念や、震災からの復興の兆しを感じ取れることになるのではないかと思います、中尊寺では震災の年から沢山の三陸郷土芸能団体をお招きして、境内で奉演していただいております。

また、津波で道具等を失ってしまった芸能団体様に対しては、資金面でご援助させていただいております。

この度は、その一環として三陸北部・南部・地元を代表

南下する「南回り」を隔年で行い、地元では「鶴鳥様」と称されています。

このような巡業形態は全国でも類例がなく、平成二十七年三月二日国指定重要無形民俗文化財に指定されました。

大室神楽（石巻市・旧北上町）

大正十年に藤沢（一関市）町出身の神楽師・千田清人氏が舞を指導したことにより始まったとされ、戦争により一時中断した時期もありましたが、創始期の古風を現在まで継承してきた南部神楽です。

東日本大震災で神楽道具を流されましたが、全国からの支援で復活し活動を再開。以後、震災復興に関わる各行事に積極的に参加・出演しています。

昭和五十七年、石巻市（旧北上町）の指定無形文化財に指定されました。

岳神楽（花巻市）

創始は定かではございませんが、文禄四年（一五九五年）と記された獅子頭があることから、その時代にはすでに神楽が存在していたことが分かります。

初源は、南北朝時代にまで遡ると考えられ、五百年以上

する神楽保存会をお招きし、物故者供養及び被災地復興を祈願する目的と、合わせて世界遺産登録五周年を迎えたこの平泉中尊寺で、みちのくの文化を広く世界に発信していただくために奉演していただくことになりました。

神楽保存会の紹介

小田代神楽（奥州市）

奥州市江刺区は清衡公の父君藤原経清公ゆかりの地であり、江刺区田原に継承されています。宮城県北部、岩手県南部地方に分布する南部神楽に分類されていますが、法印神楽を祖としているため、南部神楽とは趣が異として、「式舞」を重んじ、瀬台野神楽の流れを汲む神楽です。

創始は明治二十八年とされ、今年、奥州市指定無形民俗文化財に指定されました。

鶴鳥神楽（普代村）

岩手県に広く分布する山伏神楽の典型的な神楽で普代村鳥居に鎮座する鶴鳥神社の神霊を移した獅子頭を権現様とし、毎年一月から三月にかけて大漁成就・五穀豊穰・家内安全などを祈願すべく巡業しています。

この巡業は久慈市まで北上する「北回り」と釜石市までの伝統をもち非常に古い神楽であると言われており、早池峰山を霊場とする修験山伏により、祈祷の舞が神楽になったとも言われております。

現在は、早池峰神社の前身である妙泉寺の配下である集落内の「六坊」によって伝承されております。

昭和五十一年、国指定重要無形民俗文化財に指定、平成二十一年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

奉演のあらまし

九月十七日

本堂で、「座敷神楽」を開催するのは初のこと、上段の間・外陣で舞台を設置。四面の三方を観覧席（椅子席も含め約百席）とし、舞台すぐ傍でご覧いただけるよう準備しておりましたが、小田代神楽が始まる前から、満席となり、後ろの方は立ち見となりました。

千葉信胤氏による司会進行で始まり、橋本裕之先生の解説があり、そして、演舞が始まり、特に小田代神楽の「宮鎮舞」は、祈祷の舞で扇の四方封じ、太刀による火難病魔祓いが早く素晴らしい動きと相まって、力強さがよく表れており、観るものを魅了してくれました。

2016.9.17&24

WATE, URAZAMI
Chuson-ji Temple

中尊寺奉納神楽

東北地方に未曾有の災害をもたらした東日本大震災より五年という節目の年にあたり、
中尊寺本堂において岩手・宮城両県の神楽団体による上演会を開催致します。

物故者供養及び被災地復興を祈願し、あわせて

世界遺産登録五周年を迎えた平泉文化の意義を、広く発信致します。

出演団体 ◆17日

平成28年(2016)奥州市指定無形民俗文化財

小田代神楽 [岩手県奥州市] ●こだしろかぐら

藤原清衡公ゆかりの地、奥州市江刺区を代表する芸能。
法印の技を伝える格式が光る。

◆ 演目 / 宮鎖舞、鐘巻道成寺



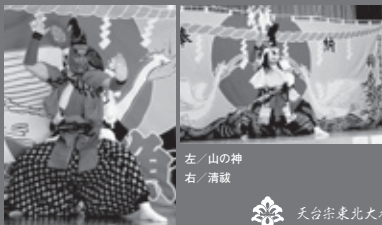
左 / 宮鎖舞
右 / 鐘巻道成寺

平成27年(2015)国指定重要無形民俗文化財

鶴鳥神楽 [岩手県普代村] ●うのとりかぐら

岩手の沿岸地方を代表する、伝統の神楽。
復興に向けて力強く、華麗に舞う。

◆ 演目 / 清祓、山の神



左 / 山の神
右 / 清祓

出演団体 ◆24日

昭和57年(1982)石巻市(旧北上町)指定無形文化財

大室南部神楽 [宮城県石巻市] ●おおむろなんぶかぐら

沿岸と内陸を結ぶ芸能の絆。
復興の願いを伝統の舞に込めて。

◆ 演目 / 水神舞(子ども神楽)、屋島合戦



水神舞 屋島合戦

平成21年(2009)ユネスコ無形文化遺産登録

岳神楽 [岩手県花巻市] ●たけかぐら

民俗芸能の宝庫・岩手を代表する山伏神楽。
渾身の舞に、祈りの心が息づく。

◆ 演目 / 三番叟、女五穀、権現、翁



左 / 翁
右 / 権現

天台宗東北大本山 関山 中尊寺

岩手県西磐井郡平泉町平泉寺衣関202 TEL.0191-46-2211

終了後、中尊寺一山による経清公の御命日年忌法要「白符忌」が執り行われました。本場に偶然でしたが、経清公ゆかりの地である小田代神楽がこの場で奉演されるとは、因縁を感じざるを得ませんでした。

鶴鳥神楽では「山の神」が囃子と舞手が一体となり、山の神がおりにきて厄難を祓う姿が、観るものを離さなかつたようです。特に指先と腕の動きが独特で太刀を持ったときなどは、神懸かり的な動きとしか言いようのない素晴らしい演舞でした。また、囃子方の太鼓を打っておられた方は、ご高齢にも関わらず流れるような太鼓の刻み方が他を圧倒し、舞手をより引き立て、まさに神様が降臨してきたような迫力の演舞でした。

九月二十四日

前回と同じ進行、解説があり、大室南部神楽で始まりました。子供達による「水神舞」、義経公とその家臣、佐藤継信・忠信兄弟の「屋島合戦」の二番が披露され、特に「屋島合戦」では、南部神楽の特徴とも言える物語が色濃く演出され、継信の死に瀕している姿や義経との掛け合いが見事でした。

最後の岳神楽では、やはり「翁舞」でしょうか。権現様が激しく「歯打ち」をし、踊る姿は「素晴らしい」、の一言。絶妙な舞手と囃子手の一体感。さすが神楽の最後を締めくくる舞でした。

また、お客様の中では獅子頭でいただき、権現様の胎内くぐりをして悪魔退散・無病息災を願っていた方もおられました。

ある団体参拝者の方で、神楽に魅了され集合時間に間に合わなくなった方もおられたとのことで、旅行代理店様には、誠に申し訳ないことをしてしまいましたようです。

御奉演いただいた各保存会の皆様、特に司会進行をお願いした平泉文化遺産センター館長の千葉信胤氏、それから各団体の解説をお願いした追手門学院大学教授(前岩手県文化財保護審議委員)の橋本裕之先生の御陰をもちまして滞りなく終了いたしましたことを感謝申し上げます。

(総務部執事)

三陸郷土芸能奉演

破 石 晋 照

「三陸郷土芸能奉演」は、紅葉や菊まつりで賑わう秋の行楽シーズンの境内に、一層の華やかさを添える行事。東日本大震災が起こった二〇一一年から毎年開催され、今年で六回目の開催となった。虎舞に始まり獅子舞、さんさ踊り、剣舞、あるいは鹿子踊りなど、多様な三陸地方の郷土芸能を内陸に住む私たちも聞き知ってはいたが、かつてこれほど多くの団体が当山の境内で奉納演舞を行うという機会はなかったであろう。岩手県の三陸地方と内陸は高速鉄道や高速道路で結ばれてはおらず、郷土芸能の団体をお招きするためには、片道二時間も三時間も要する道のりを朝早く出発していただかなければならない。そのような状況にありながら、毎年の行事に快く参加していただき、おらが町の郷土芸能を広めることに労を厭わないその姿勢にただ感服するばかりである。

震災当初、団体のみなさんと話をする時、やはり中心とながら一生懸命に踊る。震災で道具全てを流され、活動を再開した郷土芸能団体に加わった新たな伝統の担い手は、堂々と観客の声援にこたえ、中尊寺をあとにした。

震災後、コミュニティの伝統・伝承を守るため、少人数で少しの時間でもと活動を再開させ、再び集いの場としての役割を担いはじめた郷土芸能は、今やそこにかかわる人々にとつてのアイデンティティの一つとなっている。震災当初小学生だった子供たちが被災直後の学校の体育館ではじめて地元の郷土芸能に触れ、そして今や高校生になって第一線で活躍し、誇りをもって次世代に芸能を教え、今度は自分たちが継承を行う立場になっていくことなどを、目を細くしながら語る先達たちの側に立って芸能を眺める時、震災直後の大変な状況下で、彼らがなぜ祭りや芸能、伝承を精一杯守ろうと努力をしたのかという理由がわかったような気がした。書物や映像からは決して習得することができない、会話を通して、稽古を通して、肉体を通じて初めて伝えることができる伝統文化をまもってゆくこと。それは自分たちが生れ、育った郷土そのものを守ってゆくことに他ならないのである。

(総務部次長)

なっていたトピックは、大震災での被災のことであった。集落のコミュニケーションの機会・集いの場を担っていた郷土芸能が大震災で道具を喪失したことや、コミュニティの有り様が変化したことを機に、継続することが少なからず困難になり、一度は継承が途絶えかけたという話をされた団体もあった。それぞれの郷土芸能の中心を担う方々は、芸能活動を行っていくために必要な会員の勧誘や、道具や運営費用の確保のために大変な努力をされたそうである。

今年初めて奉演に参加していただいた県北沿岸宮古市の法の脇獅子踊りは、震災の津波で道具を全て流されてしまい、ようやく今年の夏から再開が可能になった。震災以降数年間は活動ができなかったが、少しずつ道具を揃え、今年のお盆に再開後をはじめの公演をおこない、二回目の公演として当山で奉演を行っていただいた。活動のできない数年間、たくさんの方の不安があったものの、決して活動再開をあきらめることはなかったという。ずらりと獅子のならんだ踊りの列の後ろには、ひとときわ参拝客の目を惹き一生懸命に踊っている男の子がいた。まだ小学生の彼は衣装・カシラをつけて舞うことはできないが、小さな体を揺らし



奏演：法の脇獅子踊り

風信 / 語録

◇平泉芭蕉祭に招かれて、五月雨の中みちのくへ向かった。新幹線が北上するにつれ、雲が薄れ、一ノ関に着いた頃には雨も上つていた。地元の俳人たちが毛越寺、高館、中尊寺と案内して下さった。高校の修学旅行を含めると四回目の平泉だったが、これほどじっくり丁寧巡ったのは初めてのことだった。

◇古都ひらいずみガイドの会でも活動中の岩渕洋子さんの語りは、まるで語り部のように。藤原清衡の生い立ちや、凄絶な人生を、私は初めて知った。毛越寺はあやめの花が盛りを迎え、池のほとりで雨後の風に吹かれていると、「三代の栄耀」が幻のように立ち上ってくる。平和な仏教の理想郷が、ここ

にたしかにあつたのだ。

◇高館からの光景は、奥の細道の文章のまま。北上川、衣川は美しい緑の中を流れ、三百年前に訪れた芭蕉は、この山河を目のあたりにして「時のうつるまで涙を落し」たのだらう。それは藤原家の滅亡のち五百年を経た頃だったという。

◇中尊寺は、寺内の円乗院の住職、佐々木邦世さんのご案内を得た。折しも世界遺産登録五周年を記念して、秘仏一字金輪仏の御開帳が始まったばかり。そのお堂に入る時、邦世さんが「あなたの作に、露けしや我が真言は五七五があるでしょう。その真言を一字で現したのが、梵字ボロンです」そんな達意の紹介を得たせい

か、秀衡公の念持仏と伝えられる

女身仏は、今まで拝んだ仏様の中で最高に美しい微光を放つて見えた。人肌の大日如来とも呼ばれるその肌は腕輪のところまで柔らかに窪み、頬は紅潮し、半眼の瞳は近づくときらりと厳しい光を送ってくる。透かし彫の宝冠を取ると、髪の毛の筋ひと筋が梳られ、結い上げられているとのことだった。◇能楽堂へ案内されたのは夕暮時だった。茅葺の屋根には草が伸び、小花を咲かせているものもあった。鏡板の松は星霜を重ね、滅びの美しさに心が吸われるようだった。見所の庭に佇んでいると、ほととぎすの声。あれは和泉が城の方角だろうか。ここで八月に行われるという薪能を是非見に来た

い。

◇戦後すぐに始まったというこの俳句大会は、今年で五十五回を迎える。会場は毛越寺と中尊寺で一年ごとに替わるそうだが、今年の中尊寺の参集殿が改築中のため、本堂で行われた。ご本尊の丈六の釈迦如来へ法要が捧げられた後の講演を務めるとは、貴重な体験だった。「奥の細道まわり道」と題する話の冒頭に、平泉の段を朗読した。四千字の原稿用紙わずか一枚に収まる文章の中に、悠久の時間が流れていることを改めて知った。

女身仏

西村和子

闇脱ぎし肌涼しき女身仏
梅雨晴間秘仏の朱唇語るかに
ほととぎすシテ去りワキ去り魑魅消え
ほととぎす鏡の松に呼びかけて



天台座主傳燈相承式

千葉 亮 賢

平成二十八年五月十一日、天台宗最高の慶事である「傳燈相承式」が、滋賀県大津市、総本山延暦寺根本中堂で厳かに奉修されました。



「傳燈相承譜」に御名を記される
森川宏映天台座主猊下

同日、雨に洗われた比叡の御山の新緑の下、第二七七世天台座主森川宏映猊下がお乗りになった殿上輿は、午前十時過ぎ、延暦寺の大書院をご出発。天台宗・延暦寺一山の代表出仕者を先導とされ、霧に煙る参道を根本中堂へ向かわれました。

ご入堂の後、猊下は本尊薬師如来に礼拝。天台声明の秘曲「祝禱唄」が堂内に響き渡る中、天皇使、宗内外の関係者、有縁の方々ご参列のもと、第一世義真和尚以来、歴代座主猊下の署名が連なる「傳燈相承譜」に御名を記されました。

ご署名の後、あらためてご本尊、宗祖伝教大師をはじめ比叡山満山の神仏に対し表白を捧げられ、天台宗徒・関係者に諭示を發せられました。

まず、「座主相承譜に蹟を留めましたことは、洵に光栄の極み」と心中にふれ、「宗を挙げて『一隅を照らす』道心を全国に浸透させようとしております」と述べられました。

続いて、「しかしながら現代社会はうらはらに、国家も個人も、神仏にかわって経済発展こそを最高の規範としているかにみえます。その結果、人々

はおのれ一人の利益を優先させるあまり、『慈をもつて衆を与うるなり。悲をもつて苦を抜くなり』と祖師が教えられた互いを思いやる心を、あまりにもないがしろにしているように思えてなりません。『世界はまた、地球温暖化、自然破壊、核拡散、飢餓、内戦と難民の増加、テロリズムの蔓延など、人類を滅亡させかねない危機をはらんでおります』と、憂いのお気持ちをお知らせしました。

さらに、「このような負の連鎖を打破し、世界平和を実現するためには、仏教が説いているようにお互いの価値観を認め、共生する姿勢が必要であります」と語り、「今こそ、宗祖大師の示された『己を忘れて他を利する』という慈悲の精神が強く求められております。『このような重大なる時にあたり、一途に仏天の加護と、宗祖の冥助を仰ぎ、報恩の誠を尽くし、もつて人類の幸福に寄与せんとする』決意を表明されました。

森川猊下は、大正十四年（一九二五）年、愛知

*

県春日井市出身。比叡山の山林保護を志し、京都大学農学部に入學されました。その後、昭和二十五年（一九五〇）、延暦寺一山真藏院住職を拝命。延暦寺営林課において長年比叡山の山林育成・管理に尽力。営繕部長を通算三期務められました。営林関係には通算二十五年の長きにわたり携われ、「比叡山の山林を伝教大師のお衣と考えるゆかしい伝統があり、私も山林の仕事を通して、『天台本覚思想』が身につきました」とお話になっております。

動植物・鉱物などすべての存在は仏性を持ち、成仏できるとする「天台本覚思想」について、「これこそが仏教の中心思想だと思っております」と、記者会見では述べられておりました。

*

座主猊下をお支えする私たちも、諭示ならびに前述の猊下のお話にありますように、開宗以来一二〇〇年にわたる祖師先徳の御教えを奉ずるとともに、より一層法燈護持に精進しなければなら



座主ご上任に伴う記者会見にて。記者の問いに祈りの大切さを説かれる狛下
(平成28年3月2日)

いと決意を新たにいたしました。
天台座主傳燈相承式に陸奥教区を代表して参列してまいりました。相承式並びに狛下のお人柄の一端をご紹介します次第です。

「天台ジャーナル」・「比叡山時報」を参照。

ちばりょうけん
天台宗陸奥教区宗務所長。

奥州藤原氏四代公の レントゲン写真資料を寄贈されて

菅野 澄 円

〈報告〉

平成二十八年三月十九日、岩手医科大学様、医学博士足澤輝夫様より、当山に貴重な学術資料の寄贈がありました。昭和二十五年に行われた中尊寺御遺体学術調査では、岩手医科大学の足澤三之介教授（当時）が、四代公のレントゲン写真の撮影を担当されました。残雪の残る三月の月見坂を撮影装置を分解して手分けして背負って運んだ事が記録に残っています。また、足澤博士のご子息であり同じく医学博士の足澤輝夫先生によれば、終戦から五年しか経っていない日本ではレントゲンフィルムの手も困難で、実は闇市から手に入れた物であったらしいとのことでした。様々なご苦労を経て撮影されたレントゲン写真は、忠衡公と伝えられた首級が泰衡公であるという貴重な成果を上げるなど、奥州藤原氏の学術調査研究に大いに貢献しました。

ところが、これらのレントゲン写真は、報告書や学術論文の中で資料として掲載されてはいましたが、原板の所在については顧みられることがなくなっていました。平成



第51回日本医学放射線学会秋季臨床大会の様子

六年に中尊寺が『中尊寺御遺体学術調査最終報告書』を刊行した際にも発見することは出来ませんでした。

平成二十七年十月に盛岡で第五十一回日本医学放射線学会秋季臨床大会が開催されることとなり、岩手医科大学のこれまでの研究成果発表の場で御遺体学術調査時のレントゲンを印刷したパネルを展示したいとのご連絡を頂いたのは同年七月のことでした。

中尊寺がレントゲンフィルムの原板について探しているとお伝えしたところ、足澤輝夫先生・岩手医科大学様がそれぞれ等身大の印刷物とその縮小版を所蔵されていることがわかりました。残念ながら原板であるフィルムは見つかりませんでした。医科大の先生方の見解では、フィルム自体が劣化している可能性が高く、現存していても像を鮮明に残している可能性は低いとのことでした。

これらの貴重な資料とそのデジタル写真が、岩手医科大学様、足澤輝夫様のご厚意により、三月十九日の基衡公の御遠忌法要にあわせて、中尊寺に寄贈されました。中尊寺からは感謝状と中尊寺ハスをお贈りした次第です。

寄贈品

奥州藤原氏四代レントゲン写真パネル

寄贈者

学校法人岩手医科大学 様

医学博士 足澤輝夫 様



〔管財部執事〕

岩手医科大学矢巾キャンパスに植えられた中尊寺ハス

〈報告〉

白山神社能舞台 屋根葺替及び耐震補強工事

佐々木 五大

中尊寺境内に隣接する、白山神社能舞台の屋根葺替及び耐震補強工事が十一月二十七日に無事終了いたしました。ご賛助いただいた皆様に御礼申し上げますとともに、工事概要と今後の課題についてご報告いたします。

能舞台屋根の老朽化

中尊寺境内に隣接している白山神社能舞台は、江戸時代に一度焼失したものの、嘉永六年（一八五三）に仙台藩によって再建された由緒ある舞台です。国もその歴史的価値を評価し、重要文化財に指定しています。

この舞台では、毎年五月の白山神社祭礼において、一山の僧侶が「古実式三番」、「御神事能」を奉納する——江戸時代から承継され、明治維新による廃絶も免れた中尊寺の

習わしを窺う史料ともいえる建物です。また八月十四日には、プロの能楽師・狂言師による中尊寺新能が開催され、本年度第四十回を数えるなど、恒例行事の場としても親しまれています。長年風雪に曝されたことにより、各部の老朽化が進んでいました。

最も心配されていたのが屋根の腐朽です。あちこちに苔が堆積し、また飛来した種子から育った草が着生している部分もあって、大変見苦しい状態でした。茅葺き屋根は、茅の抜けや潰れによって次第に痩せていくため、定期的なメンテナンスも欠かせません。軒近くは茅の補充（挿し茅）をたびたび行い、その形状を整えてきましたが、それだけでは屋根全体のポリウムが失われていくのは止められません。部分的な雨水の浸潤も確認され、屋根裏の木構造部の腐朽も心配されました。近年では茅の層が薄くなつた部分にトタン板を差し込むなど、外観を犠牲にしつつもその場しのぎの対処を余儀なくされてきました。

改修工事に向けた取り組み

こうした状況の中、屋根葺き替えの気運は高まりつつあ

りましたが、東日本大震災の影響で話題に上しがたい情勢となり、しばらく進捗をみませんでした。県内の復興が進むにつれて、いよいよ工事を急がなければ建物が心配だという声が上がリ、平成二十五年三月、地域有志による「白山神社能舞台維持修復協賛会」が発足しました。この団体は能舞台修繕費用の勸募を行うほか、能舞台の維持に必要な諸懸案について、所有者である白山神社と連携して、関係者間の連絡調整の役割も担おうとするものです。中尊寺の僧侶も数名が参加しています。

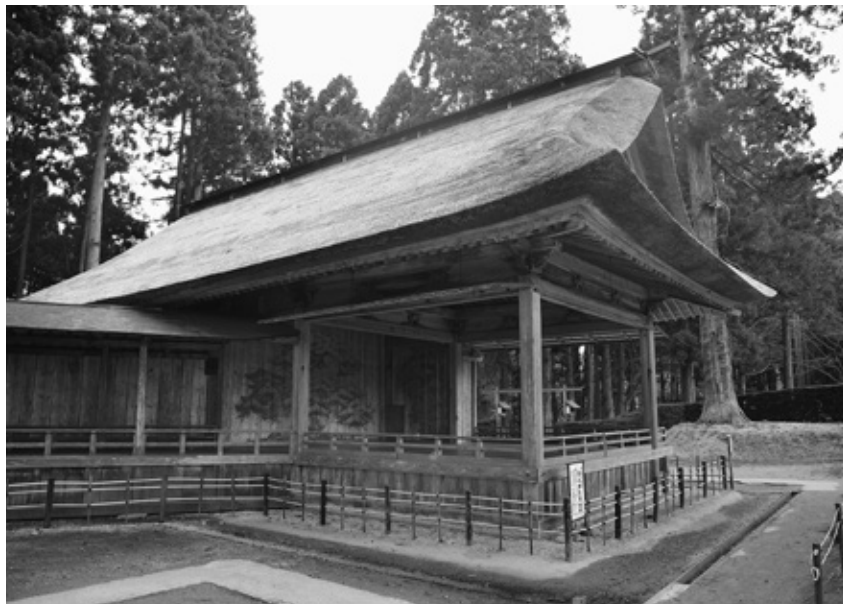
葺き替えは大規模な工事であるため、国・県・町に補助をお願いする必要がありました。はじめに工事の技術的な指導・監督を行う文化財建造物保存技術協会（文建協）による地盤調査と耐震診断があり、次いで調査報告を受けた文化庁から「耐震補強を並行して実施することが必要」という答申をいただきました。修復協賛会としては、当初は屋根の葺き替えのみを想定していましたが、行政としては「公費を充てるからには、屋根のみを修繕して地震で倒壊する危険性を看過することはできない」という判断があったようです。

能楽堂は舞台屋根の荷重の多くを柱が支持しているので、地震に弱い印象を受けますが、白山神社能舞台に限っていえば岩手宮城内陸地震（平成二十年）と東日本大震災にも耐え、築一六〇年を経た堅牢な建築です。手厚い耐震補強によって舞台機能や内外観が著しく変化すると、文化財価値にあたるマイナスの影響もある為、景観にも配慮した工法を検討していただきました。

工事の推移と工法

ゴールデンウィークが終わるとすぐに、葺き替え作業がはじまりました。早速足場が上がって屋根の状態を見てみると、引き抜かれた古い茅こそ「ここまで使ったか」という程に傷んでいましたが、その下の木構造部に目立った腐朽は見られませんでした。銅板やトタン屋根が、葺き素材の劣化が屋根裏の腐朽に直結するのに比べて、茅葺き屋根の粘り強さを感じました。

敷き詰めた茅同士に隙間ができないよう、丁寧に押し込む作業が終わると、軒や母屋まわりがシャープに刈りそろえられ、いかにも清々しい印象です。十一月三日の中尊寺



葺き替え完了後の能舞台



屋根葺き替え工事の様子（請負業者：有限会社熊谷産業）

能において、葺き替え直後の清新な舞台で、私がシテ（能の主役）として舞台を勤めさせていただきましたのは誠に光栄でした。

残された耐震補強工事では、元の壁板に耐力壁と呼ばれる補強板を重ねることで、筋交いを入れるよりも内観への影響を抑えられました。楽屋の屋根裏には金属の筋交いが設けられましたが、こちらもあまり目立たない規模です。いずれも古材に釘を打たない施工法が採用されており、能舞台としての文化的価値を極力損なわずに、耐震安全性が高められました。

今後の課題について

今後の課題は、今回の耐震補強は暫定的な規模であるとして、三十年後を目途に抜本的な耐震対策が必要であるとの見解をいただいたことです。あるいは解体修理によって、地盤に免震構造を設けるほどの措置が必要になるかもしれません。また、舞台に描かれた「鏡の松」に用いた絵の具の褪色や剥離も目立っており、修理が必要といわれて久しいです。作業を依頼できる技術者も減少し、あるいは高齢



「鏡の松」

になってい
るので、す
みやかに向
き合うべき
問題です。
茅葺き屋
根も、定期
的なメンテ
ランスにこ
れまで以上
に留意すれ
ば、より長
持ちすると
のこと。白

山神社と修復協賛会の連携を密にし、取り組む課題かと存じます。
今後とも白山神社能舞台護持へのご理解・ご協力をお願い申し上げます。

（管財部長・白山神社能舞台護持修復協賛会会員）

世界文化遺産平泉点描 ガイドあ・ら・かると

外国人記者のみた中尊寺

岩 淵 洋 子

「合掌！」

と促すガイドの言葉に青い目の記者三人は、両手を合わせ中尊寺本堂のご本尊の前で頭を垂れていた。参拝の前には柄杓を使い手水で手を浄めることも巧みであった。その傍らで同行の若い日本の女性二人が囁いた。

「合掌って何？」

私は合掌の意味が外国人に通じ、日本人に通じないことに度肝を抜かされた。そこで、若い二人の前にさりげなく立ち、もう一度合掌をやって見せてその場を過ごした。

私はこのように、平泉町内の史跡遺跡を案内しているボランティアガイドである。退職後直ぐに

知人に勧められ、ガイド研修講座を受講し、ガイドを始めて十三年目を迎える。今年四月から十一月までの観光シーズン中七十回程のガイドをこなしている。

ガイドは毎回様々なお客様とのふれあいから、数え切れぬ程の活力や教えを頂く。このような折々のお客様とのふれあいと、世界文化遺産平泉の一端を紹介させて頂く。

冒頭に紹介したエピソードは、十月下旬「東京・東北地域の連携による外国人旅行者誘致推進協議会」の海外メディア等を対象にした共同招聘旅行の一環で、中尊寺を案内した折の一コマである。訪れたのはウォール・ストリート・ジャーナルのコラムニスト二名と、有力旅行情報サイトのチーフリーダーで世界トップ50の旅行ブロガー一名と、歴史専門の女性通訳と関係者も合わせ五人だ。

外国のメディア関係者を案内する場合に気を付けていることがある。中尊寺のどの場所を中心に案内するかということである。国内の多くのお客

様のように「金色堂」の拝観が第一でないからだ。今回の三人は、先程の手水での柄杓の使い方や参拝の所作から日本の仏教文化に造詣が深い人たちであろうと推察した。限られた時間の中でガイドとして出来ることは、言葉による説明は最低限とし、中尊寺の醸し出す仏教文化の雰囲気につくりに、ゆったりと浸っていたらいいこと、と思った。

本堂参拝の後は、大池跡と蓮池を案内した。この辺りは平泉の歴史の始まりと終焉が隣合せになっている場所だ。大池跡は現在冬野が続いているが、初代清衡が七堂伽藍を建立し、落慶法要時には「中尊寺供養願文」を読み上げた所でもある。五メートル程の道を隔てた隣には、平泉の終焉を象徴する花、八百年の眠りから醒めた中尊寺蓮の咲く池がある。隣合っているものの、この二つの場所は説明がないと理解できない所である。大池跡と蓮池の間には、約百年という時の流れが横たわっている。この百年の流れの中の遺跡史跡が平泉町内には点在している。その遺跡史跡の点

を繋げて、平泉仏教文化をお客様に理解して頂くのがガイドの役割である。大池は、丁度発掘調査中だったので、外国人記者の方々にも遺跡の意義を理解して頂いたように思う。

続いて、いよいよ中尊寺仏教文化真髓を結集した讚衡蔵・金色堂・経蔵・覆堂の見学である。これ等ははつきりと目に見える現存している文化財であり、英語の説明板もあるので、じっくりと文化財を鑑賞して貰うこととした。

この後は、竹林を背に樹齢三百五十年の樅の木のある大長寿院の境内である。この竹林を抜けると、老杉の中にある白山神社と茅葺きの野外能舞台が現れる。この二つの境内の静寂な空気に彼等は心を奪われたようであり、しばらくの間身じろぎもせずに見入っていた。ガイドの説明の入る余地はなかった。特にも、能舞台の茅葺き屋根の風に靡く穂芒が気に入ったようで、写真を何枚も撮っていた。この景を見ながら私は、数年前に案内したポーランドの工学博士の方が、桃山様式の

弁慶堂の山門や庇の彫り物の建築美に甚だ感銘を受けていたことを思い出した。また、一、三年前外務省の事業で中南米のメディアの記者を案内したことがあった。お馴染みの芭蕉像に「オー、バショウ！」と歓声をあげ、「ポエム！ポエム！」と叫んでいた記憶も甦ってきた。

このように外国の方々には日本人観光客とは違った視点で中尊寺を見ている。私達地元の方が気付かない中尊寺の価値を見出し、一山丸ごと受容して下さっているのである。日本人が忘れてしまった日本文化特有の「侘・寂」の風景や文化を鋭く察知して感銘して下さっているのである。

中尊寺の仏教文化は金色堂だけでなく、風景をも含めて時代も幅広く奥深いことを理解して頂き、四季折々の風景を楽しんでいただければ嬉しい限りである。

『草笛』二月号より

い わぶち ようし
古都ひらいずみガイドの会。



なお、能舞台（重文）の茅葺屋根は昨年、文化庁指導のもと全面葺替え。更に耐震補強工事も施工されました。

中尊寺境内樹名板の 設置にあたって

阿部慶元

境内に生茂っている木々や草花はその多くが自生するものですが、なかには様々な想いを込めて植えられたものもあるようです。それらは代々大切に守り育てられてきたもので、その努力が実を



結び、多くの観光客で賑わう今日でも色々な野草や昆虫、野鳥などの棲む自然豊かな森を形成しています。金色堂から凡そ五〇mほどのところにあるモミの木にかけられた鷹（猛禽類）の巣に代表されると思います。この巣は年々巣材を注ぎ足して巨大なものになって使い続けられているようです。モミは温帯林の主要構成樹種で平安の頃には数多くみられたと考えられますが、伐採に弱く徐々に姿を消していったようです。岩手県が北限と言われていますが、今では内陸部にあるモミの自然林としては中尊寺が北限となっているようです。東物見台や金色堂西側に広がるモミの林は境内林として守られてきたもので、いわば自然遺産であり文化的景観といっても過言ではないと思います。

境内には参道を中心に昭和の中頃に設置したと思われる樹名板がみられ、その頃から樹木への愛着や緑の大切さを訪れる人々に理解していただく取り組みがなされてきました。今回、この樹名板を新しいものに取り換えるということで、私ども

平泉メビウスの会に話が寄せられました。予め既存の樹名板や樹木、草花についてまとめていただきましたので、そのデータをもとにして現地調査から取り組むことになりました。「いつも接していれば相手（植物など）から自己紹介をしてくれる」が持論なので、日頃から手入れをされている職員の皆さんの経験が大いに役立つ、そのような思いから一緒に植物同定会を実施しました。既存の樹名板に囚われることなく、類似する樹木が認められる場合には図鑑等のデータを駆使し、全員で一つ一つ樹木の特徴を確認しながら慎重に樹名同定の同定に努めることにしました。単に学術的な調査に止まらないで、参加した皆さんに少しでも正しい知識を身につけていただきたいという思いからでした。

まず植物名の表記方法について検証してみたいと思います。動物もそうですが植物の名前は漢字表記や平仮名表記、片仮名表記と様々用いられますが、学術的名称としては通常片仮名表記（バラ科サククラ属エドヒガンなど）が用いられますが、



写真1



写真2

これはあくまでも通例として用いられるものであって、拘束力を持つものではありません。ただし、平仮名を用いているか片仮名を用いているかでその時代背景に迫ることが出来る点は面白いと思います。

写真1をご覧くださいませしょう。

「かえで科やまもみじ」と表記してあります。現代文は「漢字ひらがな混じり文」を使用するようになってきていることから、地の文の中に生物の和名を平仮名で表記した場合、なんとも読みづらい

く変わったところは分類方法であり、「科」の扱いに多くの変更が生じています。これまでは植物図鑑や教科書などで使われてきた新エングレー体系（旧来分類法）による科名を用いることが通例となっていました。この考え方はマクロ形態的な仮説を根拠に分類体系を作り上げたもので、いわば見た目で分類していたこととなります。今回採用されたAPG植物分類体系（APGⅢ）はミクロなゲノム（DNA内の全ての遺伝情報）解析から実証的に分類体系を構築するもので、根本的に異なる分類方法です。解析の技術が飛躍的に進歩したことから、遺伝子レベルでの分類が可能になり分類学研究の主流となつて、新しく編纂される図鑑等はAPGⅢによる分類体系が採用されるようになってきています。以上のことを踏まえて今回設置した樹名板の科名についても、APG植物分類体系による科名を採用することにしました。今回の調査で対象となつた植物について、新エングレー体系（旧来分類法）による科名との違いを表にしてみました。

	種名	科名 (新エングレー体系)	科名 (APG植物分類体系)
1	イロハモミジ	カエデ科	ムクロジ科
2	ツルアジサイ	ユキノシタ科	アジサイ科
3	ムラサキシキブ	クマツヅラ科	シソ科
4	中尊寺ハス	スイレン科	ハス科
5	ショウブ	サトイモ科	ショウブ科
6	ヤブカンゾウ	ユリ科	ススキノキ科
7	アオキ	ミズキ科	ガリア科
8	シキミ	モクレン科	マツブサ科
9	ショウジョウバカマ	ユリ科	シュロソウ科



文になってしまいます。そこで視覚的に識別しやすくするために今は片仮名表記になっています。戦前においては、「漢字カタカナ混じり文」を使用するのが慣例であったことから、地の文の「漢字カタカナ」と視覚的に識別しやすい平仮名表記になっていました。写真1の樹名板はその時代のものか、あるいは戦後間もなく設置されたものと考えられます。

それでは写真2について考えてみましょう。「いね科クマザサ」と表記してあります。科名は平仮名、種名が片仮名で記されています。戦後、生物の和名が片仮名で表記されるようになってから設置されたもので、昭和から平成にかけて発行された植物図鑑もこのような表記方法になっていました。その後、科名も片仮名で表記されるようになり、新しく発行される図鑑などもすべて片仮名表記になり今日に至っています。

次に科名について考えてみたいと思います。昨年、平凡社の図鑑「日本の野生植物」が凡そ三十年ぶりに編纂され十二月に発行されました。大き

次に種名について考えてみたいと思います。動物や植物の種名を日本語で表したものを「和名」といいますが、その他にラテン語で表記される学名というものがあります。ラテン語というと馴染みがない印象を受けますが、私たちの身の周りにはラテン語が溢れかえっております。園芸店に並んでいる外国起源の草花の名前がそうです。チューリップやクロッカス、グラジオオラス、アイリス、シンビジュームなど数え上げればきりがありませんが、これらのなじみ深い名前は属名を表すラテン語（学名）なのです。輸入された草花には和名が付けられているものもありますが、その殆どは学名をそのまま使用しているようです。余談ではありますが、栽培の歴史が百年以上と古く、日本人に親しまれているチューリップに和名が付けられていないのは不思議といえば不思議です。外国起源の草花がラテン語で呼ばれるのは極自然ですが、日本古来のギボウシやカタクリをそれぞれホスタやエリスロニウムという学名で販売していることには違和感を覚えずには居られ

ません。

既存の樹名板に「ヒガンザクラ」という表記がありました。これは「エドヒガン」の別名といわれており、ほかにも「アズマヒガン」や「タネマキザクラ」という別名もあるようです。交通手段や情報伝達手段が発達していない時代には、狭い範囲で通用する名前であれば不都合はなかったことから「地方名」で呼ばれることが多かったようです。しかし、情報化時代にあつては全国的に通用する名前が必要になってきます。植物図鑑に記載されている種名で標準和名といわれるもので、平凡社が発行している図鑑「日本の野生植物」に用いられている名称です。この名称は「岩手県野生生物目録（二〇〇一年三月）」に反映されていることから、今回採用する種名はすべて岩手県野生生物目録によるものとしています。

あべ けいげん
平泉メビウスの会。

福島県国見町 国史跡「阿津賀志山防塁」と

中尊寺ハス

大 栗 行 貴

東北自動車道を南下し、大崎・仙台の平野、宮城県南部の山間の道を抜けると、福島盆地を見下ろす広々とした眺望が現れます。その盆地の北縁に位置するのが、福島県国見町です。

国見町は、平泉から南に約一五〇キロメートル、福島県中通り地方の最北端に所在し、東北自動車道・国道四号・JR東北新幹線・東北本線の主要幹線が集中する交通の要衝となっています。人口は約九、六〇〇人、桃・柿などの果樹を中心とする農業が主産業の町です。

当町には、文治五年（一一八九）、源頼朝が率いる鎌倉方と奥州藤原氏の軍勢が戦った「奥州合



国史跡「阿津賀志山防塁」国道4号北側地区

戦」に関わり、藤原氏が築いた「阿津賀志山防塁」が存在します。現在、奥州藤原氏のゆかりの地として中尊寺から株分けいただいた蓮が、防塁の眼下に咲いています。本稿では、阿津賀志山防塁と両町の交流を象徴する中尊寺ハスについて紹介させていただきます。

阿津賀志山防塁とは、鎌倉から北上する源頼朝の大軍を迎え討つため、土塁と堀が全長約三・二キロメートルにわたり構築された防衛施設です。「阿津賀志楯」とも表現され、阿津賀志山中腹の斜面地から阿武隈川の旧氾濫原まで隙間なく累々と築かれました。

防塁は、二重の堀と三重の土塁からなる「二重堀構造」を基本とし、当時の基幹交通路である奥大道を遮断しています。源平合戦から奥州合戦の内乱期には、交通路を遮断し要塞を構える戦術がとられました。その戦術を現在に伝える最大規模の遺跡です。

この合戦は、源頼朝と藤原国衡を大将とする平泉方の双方数万の軍勢が対峙し、当町を主戦場と

する戦闘が三日間にわたり続きます。奥州合戦最大の激戦地となり、戦闘がダイナミックに展開したことがうかがえます。

阿津賀志山合戦での敗退以降、平泉方の抵抗は小規模な戦闘を繰り返すに留まり、奥州藤原氏の第四代泰衡は、多賀城・平泉を離れ、北に逃れる途中、秋田県北東部の地にて家臣に殺害されます。奥州藤原氏の滅亡は、阿津賀志山での勝敗で決したのです。その後の鎌倉幕府成立と合わせ、時代の転換点となった戦いでした。

なぜ奥州藤原氏は、東北の守りをこの国見町に置いたのでしょうか。冒頭に紹介した福島盆地の景観が大きく関係します。奥羽山脈と阿武隈山地に囲まれた福島盆地は、平野部と山々の高低差が大きく、地形による区切りが明瞭です。峠となる場所も少なく、交通路が集約されていく場所が国見町でした。また、阿武隈川によって形成された盆地群が連なる中通り地方は、関東から北上するにつれて漸移的に文化や気候、風土が変わります。

その北端である国見町を抜けることは、もう一步、道奥へ入り込むことを感じさせます。

奥州合戦において、防備の薄かった白河関とは対照的に、阿津賀志山防塁に防御が固められたのは、信夫佐藤氏の存在とともに、国見地域がもつ地形的特徴が反映されていると考えられないでしょうか。

八〇〇年前の合戦を今に伝える阿津賀志山防塁は、奥州藤原氏が総力をあげて構築した遺産であり、浄土をめざした奥州藤原氏が武力で滅ぼされた奥州合戦の悲劇を伝える史跡です。

一方、この合戦で活躍し、合戦後に伊達郡を領有した中村念西は「伊達」と名乗り、伊達氏の歴史が始まります。奥州藤原氏の終焉と鎌倉幕府や伊達氏による新たな時代の幕開けにも関わる合戦がこの地で行われ、防塁が八〇〇年間受け継がれてきたことは、郷土の歴史として町民共有の誇りを深めています。

現在、阿津賀志山防塁下二重堀地区の眼下に咲



下二重堀地区の眼下に咲く中尊寺ハス

く中尊寺ハスは、奥州合戦で滅亡した藤原泰衡の首桶から発見された蓮の実をもとに開花したものです。平成二十一年に中尊寺から株分けを受け、地元の育成会により栽培が続けられています。現在は、四五アールの水田に、一万本ともいわれる大輪が咲き誇ります。毎年、多くの方が阿津賀志山防塁とともに中尊寺ハスを愛で、奥州藤原氏や平泉とのつながりや歴史性を感じる事が出来る場所となっています。中尊寺ハスの株分けを契機とし、両町の結びつきやゆかりを再認識した交流が、さまざまなレベルで活発になっています。

来春道の駅もオープンする国見町。七月から八月頃、中尊寺ハスが見頃となる阿津賀志山防塁に、お越しいただき奥州合戦の戦跡と国見町を巡ってみてはいかがでしょうか。

おおぐり こうぎ

国見町教育委員会、生涯学習課学芸員。



阿津賀志山防塁下二重堀地区で交流を深める両町児童

「如意輪講式」を書く

―千葉方彩書作展―を終えて

千葉 高代

「おん。ばらだ。はんどめい。うん。」

会期中、本堂上段の間の床の間に掲げられた如意輪観音像のお軸を前に、薬樹王院ご住職と、観音経そして冒頭に記した如意輪観音様のご真言をお唱えすることから一日が始まりました。



中尊寺様を会場に、この書作展を開催することができましたのは、おもいがけない良きご縁に導かれて形にできたものです。

平成二十五年春、薬樹王院での観桜会のメンバーの一員に加えていただいたことが大きなきっかけとなりました。ここで初めて、山田俊和貫首様と同席させていただき、おこがましくもわたくしの作品をご覧いただいたのでした。緊張し、自分の世間の狭さを感じながらも、貫首様との会話が楽しかったことを覚えていきます。翌年の観桜会も一緒にさせていただき、公募展入賞作品（書道学会展読売新聞社賞）を持参できることとなったのでした。評価いただけるような作品を創ることができ始めたタイミングも重なり、奇しくも貫首様のお目にとめていただくことができました。おんと思っています。話題の中に、如意輪講式の書作品化についても触れられていたのですが、まさか私に関わることになろうとは思いませんが、まさか私登録五周年に向けての構想が既に練られていることを知ったのでした。

そして平成二十七年五月、如意輪講式の式文を
書作品とする依頼を受けることになったのでし
た。「藤原秀衡公の御母の請託により作られたも
のであるから、地元女性の手に依って」という
言葉をいただいたことで、得難い機会を与えられ
ていることに勇気を出し、自分にできるだろうか
という不安を抱きながらも、勉強させていただ
きます」と引き受けさせていただきました。

まずは家族に伝え、そして我が師にも報告し、
指導を仰ぐこととなりました。作品としてどれく
らいのものが書けるだろうかという気懸りは尽き
ないものの、師の言葉に舟を漕ぎ出そう、「いざー」
の思いでした。

資料をいただき、まずは読むことから始め、何
度もページを繰りながら、耳慣れない言葉や仏教
用語を辞書とネット検索で調べつつ、お寺の方へ
の質問もたびたびでした。岩手日報に連載された
中尊寺仏教文化研究所佐々木邦世所長の「よみが
える信の風光―平泉『如意輪講式』を語る」から
は多くを学ばせていただきました。

私は今、新和様（漢字かな交じりの書）に力を
入れて取り組んでいます。特に題材の選び方が
作品作りの上で重要になっています。自分にとつ
て、その内容がすつと入り込んでくるもの、心を
動かされるような言葉との出会いが作品制作の励
みになっています。如意輪講式の式文を書くにあ
たっても同様でした。読み込んだ上で、書きたい
と思った語句や文言を選び出していきました。

どの書体（楷書・行書・草書・篆書・隷書、新
和様）にするか、またどのような書風（書きぶり）
にするか、そして用具用材（筆墨硯紙）も色々試
し、草稿を練りながら、折々に、師に指導をいた
だいては書き込み、貫首様に草稿や作品をご覧い
ただき、選んでもらうことを何度か繰り返しなが
ら書き進めていきました。作品によつては紙を消
耗せず一気呵成に書き上げることができたものも
ありますが、何度も何度も書き込んでやっと仕上
げた作品がほとんどでした。

料紙は一関市東山町の「東山和紙」をといいこ
とで、作品制作の用紙としては初めて使用させて

いただきました。当初は、難しさがああり、なか
か思うように墨が乗らず、運筆（筆運び）に骨力
を求められました。東山和紙にも徐々に慣れ、紙
の厚みと色味、かす（微細な樹皮）の入ったもの、
入らないもの、かすの入り具合などを見ながら、
どの題材に使うかを考えました。それも贅沢なほ
どにたくさん東山和紙をご準備いただいたお陰で
す。普段から使い慣れた紙でも、色画仙紙や東山
和紙でも、線や墨色が思った以上に出せたときは
うれしいものでした。

書作の折には、大阪観心寺の如意輪観音像の写
真を壁に貼り、「お力をお貸しください」と手を
合わせて向かったこともしばしばでした。如意輪
観音様は初めて見るタイプのお姿でした。六臂を
具し（六本の腕を持ち）、それぞれ徳を顕わす相は、
人々を苦悩から救い、あらゆる願いを（意のまま
に）叶える観音菩薩で、特にも思惟の手は一番私
の心をつかむものでした。「如意輪はおぼしわす
らいて、つら杖つきておわする」（『枕草子』）ど
うしたら救えるかと、耳を傾け、一緒に悩み、共

に歩いてくださるように思えたからでした。

平成二十八年三月には、不二現代書展授賞式の
出席にあわせ、京都まで足を延ばし、大報恩寺（千
本釈迦堂）を訪ねました。六観音を前にして、そ
の美しい姿にしばし佇みました。如意輪観音様の
台座が荒々しき岩場のようになっており、この観
音様が求められていることを私なりに思いを巡ら
せたのでした。

六月二十六日には、八五〇年ぶりに復元された
「如意輪講式」法要に参加させていただきました。多く
の参列者の方々と詠唱させていただきましたが、
作品として書き上げてきた言葉が、音となり曲と
して目と耳を、そして、その意をより染み込ませ
るものでした。

いよいよ、最後の作品「観自在」の制作を終え、
ほっとしたところで、このたびの作品展開催日程
が伝えられ、作品展への準備が始まりました。打
合せ、会場の下見、諸準備、設営・撤去など中尊
寺様のご配慮ご厚意をたくさん頂戴いたしました。
会期前後は日常のあれこれに加え目まぐるし

く時が流れました。

この書作展には、書友は勿論、友人・知人・親戚など関係者を含め、大勢の方々が足を運んでくださいました。会場が中尊寺本堂であることから、たくさんの方々の参拝者にも作品を見ていただけたらという有難さもありました。

開催期間中、こんなにも観光客が中尊寺を訪れているのだ、と実感させられたものでした。この



展示風景

時期は夏休みも終わり、参拝者の数が減る時期と聞き及んでいましたが、会期二日目の日曜日は、大曲の花火の帰り足に立ち寄る人々の数が驚くほどでした。私

がどうしても外せない仕事を終え、中尊寺への道すがら見た光景は、駐車場からあふれたバスの列でした。本堂へ向かうと、外も中も人、人、人！受付は大変な状況！手伝いをお願いした書友や家族に任せてこ舞いをさせておりました。準備いただいた展示目録があつという間に無くなり、目録をコピーして対応、更に増刷の発注を掛けていただくことになりました。この日は中尊寺全山大変な一日だったようです。

次の日からは、落ち着いてきたものの、台風十号の襲来した八月三十日（拝観を十四時で終了。岩泉・久慈・宮古に甚大な被害）以外は、やはり中尊寺。参拝者がそれほど途絶えることもなく訪れていました。

海外からの観光客も多く、アジアはもちろん、スペイン、フランス、スウェーデンなどの欧州、アフリカ、オーストラリア、中米などからも観光に來られておりました。平泉ユネスコ協会鈴木四郎会長のアドバイスを受け、海外の方にも、「サインプリーズ！」で芳名帳に記帳いただきました。



外国からご参拝の方も芳名帳に記帳された

中には留学予定の方で、漢字で記帳された方もいらっしゃいました。

また、新しい人との出会いと、旧交を温めなおす時間をも頂戴しました。学生時代の友人が、遠く長野県の松本や福島から訪ねてきてくれたり、近くにいながらもなかなか会えない友人も足を運

んでくれたりと、サプライズがたくさんありました。「有朋自遠方來。不亦樂乎」當に体現できたひと時でした。

今回の作品作りは、本当に勉強になりました。今まで学んできたことを土台に、今持てる力で書作に励み、約一年間取り組んできました。まだまだ未熟ながらも、試行錯誤しながら作品を作り出す苦しみと喜びを、普段取り組んでいる公募展への挑戦とは違ったものを味わいました。

また、期間中たくさんの方々にお祝いと励ましの言葉を頂戴し、本当にありがたく幸せなことでした。心よりお礼申し上げます。今後も精進を重ね、良い作品を書けるように努力してまいります。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

最後になりましたが、この書作展を開催するにあたり、得難い機会を与えていただきました中尊寺貫首山田俊和様、長期間様々な面でサポートくださった北嶺澄照氏、開催にあたり、総務執事千葉快俊様、総務次長菅原光聰様をはじめ中尊寺の

皆様に、そしてご指導いただいた私の尊敬する師、伊藤泉鶴先生（岩手県花泉町出身、宮城県白石市在住）、日頃頼りとしている書友土方豊子様（期間中急遽お手伝いいただいた三澤恒様、鈴木の子様に心より感謝申し上げます。そしてまた、家族の理解と協力があつたればこそのものでした。義母より、「一生の宝になったね」と。その言葉の通りです。

「今いるところが道場だ。師もあり、友もある」（レッスングのことばより）

ありがとうございました。

プロフィール

ちば たかよ

相模女子大学短期大学部国文科卒業。日本書道教育学会岩手書学院所属。方彩書道教室主宰。書道学会展読売新聞社賞（創作）、不二現代書展創立六十五周年特別賞（新和様）各受賞。平泉町在住。



書道教室の子供たちと

中尊寺光勝院建設事業

菅野 澄 円

平成三十年の竣工を目指し、中尊寺光勝院建設事業が開始されました。

これまで本堂で行われる法要・行事は、その控室・講演会会場・食事休憩室として、旧宿院東稲荘や大広間を使用してきました。しかしながら昭和三十年代に建てられた旧宿院の老朽化は甚だしく、それに接続する事を前提として建てられた大広間も、ユニバーサルデザインで求められる人に優しい構造とは言いがたい物でした。世界文化遺産登録以降、御参拝の皆様、檀家・信者の皆様が求めるニーズは、多様化しております。坐禅や写経、檀家の方々の葬儀・法事をできる限り静寂な空間で行うことと、日本中そして世界各国から足を運んでいただいた方々に、ゆつくりと本堂をお参りしていただきたいという思いを両立することはなかなか難しい問題でした。また、地域の方々が、講演会や勉強会、郷土芸能、奉納演奏などを中尊寺を会場に行い



光勝院完成予想図

たいという希望も年々増えております。当事業計画は、平成二十二年から検討を開始してまいりましたが、東日本大震災により計画を一時中断、その間にも景観・地下遺構への影響の調査・議論を継続しております。

文化庁の許可を得て、これまでに、旧建物の取り壊しと発掘調査を行いました。地下遺構をきちんと把握し、その上で今後の建設工事が進捗して行く予定となっております。

（管財部執事）

岩泉町での

ボランティア活動報告

佐々木 秀 厚

平成二十八年八月三十日から三十一日にかけて東北地方に上陸した台風十号の被害は甚大なもので、岩手県北部の岩泉町では多数の高齢者がお亡くなりになりました。住宅の被害が七五六戸の内、七二三戸が全半壊しました。岩泉町は、北上山地東部に位置しており、勾配のきつい山々にかこまれております。耕地は少なく、林野が多く、河川は小本川、安家川、接待川が流れています。この流域に沿って集落を形成しています。

当時、岩泉町は二〇〇ミリを越す降水量があり、地山が岩盤の山々は、雨水を蓄える最大量を遙かに超え、大木が混じり合った雨水が濁流となり安家川と小本川沿いの集落を巻き込んで流していった様子です。各方面から岩泉町に通じる幹線道路は、ほとんどが崖崩れの影響により通行止めで現地までたどり着ける道路は壊滅状態でした。その後、

災害復旧がようやく始まり、町の住民からは、復旧ボランティアが不足しているとの声が上がりましたが、交通事情が悪く盛岡市からの交通手段は車かバスだけで二時間近くかかります。

交通事情が落ち着きだした十月十三日に、中尊寺から三名のグループで岩泉町小本地区に災害復旧ボランティアに行くことができました。盛岡市災害ボランティア送迎バスで、私達を含め十九名の団体が盛岡市内を早朝に出発しました。参加者の職業は、社会福祉関係や建設業、そして私達でした。私達も東日本大震災でのボランティア経験はあるのですが、見渡す限り皆ベテランの方々に見えました。日頃、一人を除き、肉休労働などしていない私達が役に立つのかと思ひながらバスのシートに座っておりました。

岩泉町小本地区に近づいてきますと、台風災害の爪痕が目の前に現れ始めました。川の護岸は崩れ、至る所に大木が引っかかり、狭い畑には生活用品が泥まみれで無造作に山積みにされていました。その瞬間私の頭に浮かんだ文字が「山津波」でした。津波は海だけではなく海から離れた山間部でも起きるということを実感しました。

小本地区に到着して社会福祉協議会の方にはじめにいただいた言葉が「やってあげるではなくやらせていただく」という気持ちでボランティア業務を行ってください」との事でした。やはり「やってあげている」という気持ちは態度に出てしまう。被災地の人たちにも申し訳ない。私はその言葉を噛みしめつつ、日常の寺での生活や仕事に生かしていかなければならないと思いました。

全員が三班に別れて各方面に移動となり作業開始となりました。私が与えられた仕事は、十人のグループで一般住宅の床上浸水した屋内の汚泥を撤去する作業でした。家の周りには消毒用の石灰がまかれ、この家にお住まいだった方は外のコンテナボックスでの生活を余儀なくされていました。このあたりの十月の気候は平泉よりもかなり寒く、「おばあさん風邪を引かないでよ」と、私は心の中でつぶやいていました。この日も平泉とは十度位の気温差がありました。

他のベテランボランティアの方々と屋内に入り、狭い梁の間に体を入れ、二十センチはある泥の層をスコップで掘り出し、一輪車に積み上げました。日頃の運動不足がたた

り、この作業を三十回も繰り返せば腕はすでに張り、握力はなくなってくる始末です。この状態が続くと作業を休みたくなるのですが、先にいただいた言葉の「やらせていただく」という八文字に力をいただきながら作業を止めることなく続け、午前中の内に一日分の作業が終了し、帰宅となりました。

災害復旧ボランティアを体験して思うことは、いかに迅速に災害前の形に戻すという事が目標点なのだと感じました。そして、普通の生活が戻ってきてからの心のケアが必ず必要なのではないかと実感しました。

(参拝事業部執事)

中尊寺本堂にて

北 嶺 澄 照

年に数回、ご縁のある方が来山され、或いは地元NPO法人、ガイドの会の研修等で中尊寺山内をご案内します。



ご本尊釈迦如来坐像

研修会の場合ですと、中尊寺の麓にある弁慶の墓と弁慶堂（東物見台）本堂と鐘楼と宝物館讃衡蔵と金色堂と経蔵と旧覆堂と白山神社能舞台と大池跡（大池伽藍と中尊寺ハスの話）のコースで、二時間半ほどかけてということも。時間の限られているお客様の際は、金色堂を中心として四十分程度という時もあります。

平成二十五年三月二十四日、本堂ご本尊釈迦如来坐像の開眼法要が執り行われました。像高は二七五cm、台座・光背を含めた総高は五mにも及ぶ尊像です。中尊寺の大檀主奥州藤原氏初代清衡公が「丈六皆金色釈迦」像を鎮護国家大伽藍（大池伽藍）のご本尊として安置したことにならない、造頭されました。

仏には「三十二相」といつて三十二の優れた特徴があります。本堂のお釈迦さまは最近造られたばかりですので、その内のいくつかがよくわかります。中尊寺の歴史など、ひととおり話した後、ご紹介しています。

まず、頂髻相。仏の頭頂部の肉は隆起しています。仏には智慧が頭の中にぎつしりと詰まっていらいっしやる。それで我々人間とは違い、頭の頂上がぼこんとふくらんでいます。

子供さんたちに話をする時には、お釈迦さまには失礼ながら、「鏡餅みたいに二段になっているでしょ」と説明しますと、「あつ、ホントだ」、「そうだね、そうだね」とうなずいてくれます。

そして縷網相。仏の手足の指の間には、水かき状の金色の網があります。その網で衆生（生きとし生けるもの）を漏れなく救うわけです。仏の悟りの内容や、願いを私たちの目に見えるように示しているのが、仏さまの手の形（印）



左手には縷網がはっきりと見える

相）です。中尊寺のご本尊は説法印を結ばれていて、釈尊がお教えを説き明かす時のお姿をあらわしています。「中尊寺経」といわれる紺紙金銀字交書一切経や紺紙金字一切経の見返し絵によく見られるもので、左手の甲を正面に向けたようになっていて、親指と人差し指の間の縷網がはっきりと見えます。ご参拝のみなさまに「私たちの指の間の水かきはどのように小さいわけですが、仏さまの水かきは、あのように大きいのです」と語りかけ、次いで両手で水を掬う仕草をします。ある時、七十代の男性の方が「水ももらずに衆生を救い上げる水かきなのですね」とおっしゃった、そのようなこともありました。

以前、頂髻相と縷網相を説明したところで、小学校高学年くらいのお子さんから、「頭についている巻き貝みたいなものは、なんと言うんですか?」との質問が。「螺髪と言います」と答えると「どれくらい大きいですか?」と。これには答えることができず、それがずっと気にかかっていました。造像時のものがどこかにあるのではと思いい、後日寺でその話をしましたら一個、色見本として仏師の方から渡されていた螺髪が見つかりました。

満身ま
すいめて
三日続けた
心から
あのが
とう
びん
と

この袋は被災地の救済に
懸命に働いたボランティアの
お礼として、お礼状を
投じて下さる活動して下さる
思いが伝わって来ます
ありがとうございます
ご縁を結ぶことができた
と感謝いたします

西村公朝・飛鳥園
『やさしい仏像の見方』 新潮社 昭和五十八年
中村元・福永光司・田村芳朗・金野達編
『岩波仏教辞典』 岩波書店 平成元年

十月十六日、僧侶二名が久慈市へ。



見つけた螺髪

昨年の十二月二十八日、この日は中尊寺のお供え餅を搗く日で、地元の子供会が来山し、餅搗きを体験して、お昼には庫裡でお餅を食べるのが恒例となっています。その後で何か話をして欲しいと依頼されました。当日、本堂は正月の準備中ということもあり、宝物館讃衡藏で仏さまの姿について話をし、見つかった螺髪を子供たち一人ひとりの手に取って見てもらいました。「へえー、遠くから見ると小さいけど、これくらいの大きさなんだ」、「螺髪はソフトクリームみたいに渦を巻いているね」と子供たち。そ

れから白毫、印相のことをはじめとして、驚くほど多くの質問を受けました。おかあさん方、ご参拝の方々にもごらんいただきました。

「見る」「聞く」も大切なことですが、「さわってみる」「手にとってみる」ことで、こんなにも違うものなのだと、私自身勉強させられた思いでした。

これから本堂で機会があるたび、この螺髪を手にとっていただき、みなさまとご縁を結ぶことができれば、と感じています。

〈参考文献〉
西村公朝・飛鳥園
『やさしい仏像の見方』 新潮社 昭和五十八年
中村元・福永光司・田村芳朗・金野達編
『岩波仏教辞典』 岩波書店 平成元年
(葉樹王院住職)

陸奥仏青ボランティア活動に参加して

佐々木 亮 王

平成二十八年八月三十日、台風十号が東北地方に上陸、東日本大震災の被災地である岩手県を襲い、沿岸部を中心に甚大な被害をもたらしました。岩泉町における被害は、新聞・テレビでも大きく報道されましたので、ご記憶の方も多いと思います。

天台宗陸奥教区仏教青年会（陸奥仏青）では、これまでも東日本大震災のボランティア活動で沿岸部を訪れていますが、今回、私は台風十号にかかわる災害復旧ボランティアとして宮古市に行つてまいりました。宮古には大震災以降ボランティアで度々お邪魔しております、今も継続的に仮設住宅などを回り、座禅会や写経会を通じて地元の方々と交流を深めております。そういったご縁もあり、宮古での活動実施となりました。岩泉の被害が大きく取り上げられており、私自身、宮古はどういう状況になっているのだろうか、たいへん気がかりでした。

泥を落とすのに悪戦苦戦し、かなりの時間を要しました。昼食後、周りを歩いてみましたが、まだ営業を再開することができてない店舗も多く、使えなくなった家具や家電などが外に出されたままとなっていました。そのような中でも、たまたまその日から営業を再開したスーパーには、たくさんの方が訪れており賑わっていました。店員の方々は、忙しく働かれています。どこか安堵の表情をされているように感じました。

同じ班には夜行バスで関東方面からおいでの方がいて、何度もいらつしやっているとのこと。大震災から五年を経た今なお、遠く県外から足を運んでくださっている方がいるのだと、非常にありがたく胸が熱くなる思いでした。

しかし、歳月が経過し、ボランティア参加者の減少は目をそらしてはならない事実であり、復興に向けて、さまざまな面で人員・人材の不足という課題を抱える地域も多いという話を聞くこともあります。今後とも私たち陸奥仏青にできることがあれば、積極的に活動を展開し、少しでも地域の方々の笑顔を増やしていきたいと思えます。

（常住院法嗣）



九月十三日宮古へ。現地に向かう道路は何度も使つてきた山道を通つたわけですが、左側の斜面から流れてきたであろう土砂により、ガードレールがなくなつていたり、陥没している箇所が多々見られました。また右側には川が流れているのですが、流木・巨大な岩などが川中のいたる所にあり、さらには濁流に流されて完全に道がなくなつていく場所もありました。宮古に着くまでにも既にこのようなありさまで、私を含め三名の参加者は、台風の恐ろしさをまざまざと感じたのでした。

ボランティアで向かったのは、宮古市役所近くのレストランでした。二階建てのお店で、東日本大震災の際に一階部分が被災し、ずっと二階で営業をされていたようでした。その後、着々と準備されてきた矢先、大型台風が襲来し、お店の方も出鼻をくじかれた形のようでした。

他のお店では、五年前の被害からようやく営業を再開されたばかりで浸水被害に遭われた方々もおられたよう心が痛みました。私たちの作業は、主に泥だらけになった食器類を集め、洗浄するものでした。五年前の大震災当時からのももの含まれていたのでしょうか、こびりついている

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

この一年を振り返って

佐々木 浩 子

平成二十八年の中尊寺支部の活動は、本堂裏にありました旧宿院の取り壊しもあり、従来とは異なることも多く、不手際もあったかと存じます。会員のみなさまにはご不便、ご迷惑をお掛けしましたことをお詫びいたします。

一年を振り返りますと、三月十一日の陸前高田市小友地藏尊における東日本大震災物故者追善法要に支部として初めて参加しました。例年は寺院婦人だけでしたので、大勢でご詠歌を唱えることができませんでした。慰霊の気持ち、より伝わったのではないかと思います。その後も「平泉世界遺産の日」平和祈願法要、同日開催のシンポジウムへの参加、如意輪講式……。ひたむきに練習した日々が思い起こされます。六月二十六日、八五〇年ぶりに復元された如意輪講式では、普段は「引退したから」とあまり法要に出ていらつしやらない大先輩方、毛越寺支部等、合わせておおよそ五十

名が参加しました。入退堂のご詠歌、僧侶の声明の美しさ、参加者全員が一体となった響き・迫力、言葉では表せない程の感動でした。

十月に行われた念仏会も参加いたしました。大数珠を繰る人数が多い時、少ない時があり、程好い人数となるよう輪の中に出たり入ったり、大変ではありましたが、皆で協力しながらお手伝いさせていただきました。

いよいよ本年は、陸奥教区内花巻市を会場に、福聚教会東日本奉詠舞大会が開催されます。それに伴い練習も本格的になってまいりました。昨年は当支部主催で詠舞の研修会も行いました。総本部講師の矢島八重子先生をお招きし、夕方遅くまでお稽古を付けていただきました。一昨年に引き続き陸奥本部主催の詠唱・舞踊研修会も開催されました。各々実りある研修を受けられたようです。各地で行われた研修会にも例年より多くの参加があり、東日本大会に向け徐々に気運が高まっていると感じております。

大会に向け皆様方の一層のご支援とご助力をお願いいたします。

(常住院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事)

新刊紹介

二〇一六年一月〜十二月

〈出版〉

『ミネルヴァ 日本評伝選 藤原秀衡』

——義経を大將軍として国務せしむべし——』

ミネルヴァ書房 著・入間田 宣夫 二〇一六・一・十

『東北の古代史5 前九年・後三年合戦と兵の時代』

吉川弘文館 編・樋口 知志 二〇一六・四・十

『みちのく平泉を歩いた文化人たち』

文芸社 著・岩淵 国雄 二〇一六・五・十五

『頼朝と街道 鎌倉政権の東国支配』

吉川弘文館 著・木村 茂光 二〇一六・十・一



〈報告書〉

『岩手県文化財調査報告書第147集』

平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 第76次発掘調査概報』

岩手県教育委員会生涯学習文化課 二〇一六・三・三十

『平泉文化研究年報 第16号』

「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会 二〇一六・三・二十八

『岩手県平泉町文化財調査報告書第125集』

特別史跡無量光院跡発掘調査報告書XII ―第30次調査―』

平泉町教育委員会 二〇一六・三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第126集 平泉遺跡群発掘調査報告書』

金鶏山遺跡第5・6次 伽羅之御所跡第24次 正法遺跡第1次

志羅山遺跡第109〜111次 新井田遺跡第1次 無量光院跡第31次』

平泉町教育委員会 二〇一六・三・三十一

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

白山社及び胸形根神社・梅木田遺跡・平泉野遺跡』

一関市教育委員会 二〇一六・三・二十五

『平成27年度骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

一関市博物館 二〇一六・三・二十五

〔関山句囊〕

〈第五十五回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

(平成二十八年六月二十九日 於中尊寺)

(當日句入選)

紅ほのと青水無月の秘仏かな (大会長賞)

*西村和子選 特選 盛岡 兼平 玲子

万緑を天蓋として光堂 (中尊寺賞首賞)

特選 奥州 小野寺テル子

阿豆流為の志継ぐひき蛙 (毛越寺賞主賞)

特選 秋田 加藤 義峰

古代蓮匂ふ秘仏の朱唇かな

秀逸 奥州 梅森 サタ

凛として目元涼しき金輪仏

秀逸 西和賀 門屋 允子

晴ればれと平泉の日の鐘一打 (岩手県知事賞)

*小菅白藤選 特選 奥州 菅野 好子

秀衡の夢の色とも蓮ひらく (河北新報社賞)

特選 金ヶ崎 松本 雅子

千年を一睡とせし蓮の花 (岩手日報社賞)

特選 奥州 石井 文子

おもむろに世界遺産の暮の声

秀逸 金ヶ崎 佐藤 嘉子

「平泉の日」異国語耳に心地よく

秀逸 一関 桂田 一穂

光堂出て万緑に溺れけり (岩手県議会議長賞)

*小畑柚流選 特選 大崎 砂金 元子

みほとけの笑みを賜へり古都の夏 (岩手日報社賞)

特選 奥州 鈴木 正子

御仏に青葉まぶしき御開帳

秀逸 盛岡 鈴木 智子

金箔の疲れの見ゆる堂涼し (岩手日日新聞社賞)

*白濱一羊選 特選 北上 伊藤 順子

中尊寺秘仏にトマト供へたし

秀逸 奥州 伊藤豆流杞

蕉翁の道細からず道をしえ (岩手日日新聞社賞)

*渡辺誠一郎選 特選 西和賀 門屋 允子

木漏れ日にくぐりてよりの光堂

秀逸 湯沢 加瀬谷敏子

涼しきや螺鈿に残る海の色 (平泉觀光協会賞)

*照井翠選 特選 一関 伊東 静枝

夏草や津波の跡の風の道 (岩手日日新聞社賞)

特選 盛岡 木村 耀子

紫陽花の石を枕に寺の庭

秀逸 奥州 佐々木秀子

全山へ声明運ぶ青葉風

秀逸 奥州 佐藤たけ子

(応募句入選)

ままごとの父春の野へ出勤す

*西村和子選 (天) 愛知 高松 正明

すずめ来て羽根あるものも青き踏む

(地) 盛岡 工藤 幸子

溪流の渦をちこちに山若葉

(人) 盛岡 鈴木 智子

花冷えや仏の長き薬指

秀逸 八尾 龜山 常男

曲水の宴に金鷄山の水

*小菅白藤選 (天) 登米 藤野 尚之

三陸の空から肥後へ鯉幟

(地) 平泉 鈴木 信

播るほどに播鉢の中臙なる

(人) 北上 下田 栄一

囀りや写経の一字抜けてをり

秀逸 仙台 丸山千代子

みちのくの仏国浄土あやめ咲く

*小畑柚流選 (天) 奥州 小野寺昭次

義経の哀史の色や薄桜

(地) 一戸 犬股百合子

代田搔く牛に鞭打つ古戦場

(人) 横手 藤井ただし

職退いて背伸びは無用桐の花

秀逸 福岡 渡邊ひでお

下萌えや跡とは何も無き所

*白濱一羊選 (天) 盛岡 兼平 玲子

逝く春の風の電話を風が聴く

(地) 一関 千葉浅沙男

堅香子の花食べたなら飛べるかも

(人) 宮城 水戸 勇喜

みちのくの出自確かな蚪蚪生る

秀逸 一関 小山 尚宏

(入選重複句は省き、秀逸は編者が適宜に掲出)

児童生徒

岩手県内 小中学校児童生徒の部 (投句総数一〇二句)

清明やプレイの合図で一球目

特選 花巻市太田小学校 六年 阿部 礼知

人々の顔朗らかに春の風

特選 花巻市太田小学校 五年 堀岡 奏

啓蟄や土の中にも命あり

特選 花巻市太田小学校 六年 八木 力勇

平泉町内 小中学校児童生徒の部 (投句総数七〇八句)

平泉小学校 特選 (三句)

夏の夜に赤く浮きたつ大文字

五年 千葉 龍羽

虹の橋空のあなたに旅行する

六年 千葉 慶周

青空に入道雲がせのびする

六年 荒井 一斗

長島小学校 特選 (三句)

なつよるケロ口ひらくんのこもりうた

二年 小野寺優海

水田のみなもにうつるわかばかな

五年 岩渕 有希

たけのこをぼくとじいじでふんばりあい

二年 千葉 碧空

平泉中学校 特選 (三句)

澄み渡り新緑乱舞大文字

三年 佐々木あゆな

桜花たばしね山に咲きほこる

一年 眞籠 健

若々し初の後輩さくらんぼ

二年 小野寺 陸

〈第十四回 みちのく「二夜庵」俳句大会〉

六つ子かも知れぬ地蔵や赤のまま

*太田土男選 大賞 平泉 鈴木 信

秋の日の一掬にあるみ空かな

特選 一関 鈴木道紫葉

星月夜賢治の絵本よみ聞せ

特選 一関 佐藤 玲子

(応募句)

一足の靴を磨きて迎盆

特選 一関 菅原 節子

夏帽子鞆に詰めて法話聞く

*小菅白藤選 特選 一関 小野寺東子

東に向く川ばかり流灯会

*照井 翠選 特選 奥州 小沢 有彩

西行のころ

海に清盛陸に秀衡望の月

『俳句』一月号 矢島 渚男

梵鐘のくぐもる音や冬紅葉

中尊寺菊の色濃き日本晴れ 『寒雷』三月号 小野寺東子

闇に浮く金色堂の淑気かな

『寒雷』四月号 菅原 武男

梅雨晴の奥の細道月見坂

僧房へ走り根階蟬時雨

万緑や一すぢ光る衣川

『寒雷』十月号 小沢 有彩

山気満つ風の涼しき月見坂

『寒雷』十二月号 川端 隆之

ひかりては飛ぶさや堂の屋根の雪
冬の川高館跡に見下ろせり

『草笛』二月号

菅野 啓子

二ヶ月の光きはだつ中尊寺

『草笛』四月号

岩瀬 洋子

近くまで来たとメモをく西行忌

『草笛』四月号

千葉 信子

かしこみて関山茅の輪くぐりけり

『草笛』八月号

伊藤 晴子

西行の讃めし束稲山笑う

『草笛』八月号

瀧口 千尋

みちのくの朱夏に古刹の写経かな

写経文唱へ墨する堂涼し

薫風や硯の海に香立ちぬ

青葉風如来の許の写経かな

水無月や写経納むる光堂

『草笛』八月号

岩瀬 洋子

中尊寺秘仏を開き夏旺ん

『草笛』十月号

稲玉 宇平

竹林の風まつすぐに能舞台

『草笛』十月号

小野寺束子

人も去り供花墓守す彼岸明け

「たばしね」三月号

北嶺 澄照

閑かさや竹皮を脱ぐ坊の庭

「たばしね」七月号

鈴木 信

如意輪を讃へる声や梅雨晴間

「たばしね」七月号

北嶺 澄照

伊達南部津軽松前台風禍

「たばしね」九月号

鈴木 信

如意輪の思案の御手や秋立てり

「たばしね」九月号

佐々木邦世

地震の影孕みしまさに山眠る

一関俳協例会十二月

佐々木邦世

〔関山歌籠〕

(平成二十八年四月二十九日)

〈第三十七回西行祭短歌大会〉

*吉川 宏志選

西よりの織ほそき日照そば雨そえに湿りつつ我が子見てゐ
る初めての虹 (中尊寺貫首賞)

滝沢 山口 明子

瓦礫より拾ひし鐘のよみがへりふる里の寺新
年祝ふ (平泉町長賞)

宮城県 大津美智子

ぎこちなく赤児を抱けば仏間から「めんこい
なあ」と妻のまぼろし (平泉観光協会会長賞)

一関 佐藤 政勝

水張田のまはりは草の刈られゐて乾く匂のた
だよひゐたり (岩手日報社賞)

奥州 阿部 洋子

立春のけふは日ざしも明るみてわれに小鳥の
こころ萌せり (IBC岩手放送賞)

一関 小野寺政賢

吹くとなき風にひろがる稲穂波とまるとんぼ
もたゆたふ如し (岩手日日新聞社賞)

北上 高橋 重光

*小野寺 政賢選

「秀衡」の能楽すすむ軒の端に燕ひたすら巢
づくりはじむ 平泉 佐藤 チヨ

中尊寺の木道をたどりあくがれし片栗の花飽
かず眺める 平泉 三浦 陽子

騎馬武者の列に茶髪も手綱とり東下りの行列
がゆく 平泉 千葉 久子

久々に馬糞を見しといふ声す武者行列の過ぎ
し路上に 花泉 小野寺政賢

ゆるやかな傾斜連なる莊園田注ぐ用水今も田
越しに 一関 千葉 利二

篁の能楽堂に大鼓の澄みし音響き能の始まる

平泉 晴山 京子

五蘭盆の夕べを燃ゆる薪能 関山の夜は蟬も
ねむらず 一関 吉田 英子

義経の最期のドラマ見し朝雪の大文字束稲山
に見ゆ 平泉 山田 利恭

厄年の男子ら担ぐ若水の樽の中より微かな音
す 松川 畠山 喜一

霽ふる月見坂行き拝したる弁慶堂にらふそく
灯る 一関 斎藤のり子

御神事能番組

平成二十八年五月四日

法楽
古実式三番

開口 佐々木五大 大鼓 三浦 章興
祝詞 千葉 快俊 小鼓 佐々木亮王
若女 菅野 澄円 笛 清水 秀法
老女 破石 晋照 後見 菅野 宏紹

狂言小舞

八島

破石 晋照

後シテツレ 佐々木五大

前シテツレ 佐々木亮王

能

シテ北嶺 澄照

竹生島

ワキ 菅野 成寛

ツレ 佐々木宥司

問 菅野 澄円

大鼓 菅野 宏紹
大鼓 佐々木長生
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水 広元

五月五日

開口

佐々木五大

笛 清水 秀法
後見 菅原 光聴

狂言

附子

太郎冠者 北嶺

次郎冠者 破石 晋照
航 主 北嶺 澄照

菅野 結希
菅原 彩名

稚児衆 菅野 澄晃

子方 菅原 光哉

能

鞍馬天狗

シテ 佐々木五大

ワキ 佐々木秀厚

問 破石 澄元
破石 晋照

大鼓 三浦 章興
大鼓 千葉 快俊
小鼓 菅原 光聴
笛 清水 秀法

秋の藤原まつり中尊寺能 十一月三日

連吟 平泉 二葉ざらり園 園児三十五名

鞍馬天狗

老 松

仕舞 一関喜桜会

羽 衣クセ 本澤 京子

羽 衣キリ 八重樫結花

素謡 一関喜桜会

シテ 藤井 忠男

頼 政 ワキ 三浦 博

能 シテ 佐々木五大

猩 々 ワキ 佐々木秀厚

太鼓 三浦 章興
大鼓 佐々木長生

小鼓 菅原 光聰

笛 清水 秀法



狂言「附子」 平成28年5月5日

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成二十七年十二月一日〜平成二十八年十一月三十日

□ 平成二十八年

三月十一日 於涌谷町篋峯寺

東日本大震災祥月命日法要

山内より二名出仕

六月二十日 於平泉ホテル武蔵坊

陸奥教区布教師養成所研修会

講演「町とお寺の関わりについて」

講師 深大寺住職 張堂完俊師

山内より十一名参加

九月十日 於毛越寺

二部檀信徒会二隅大会

山内より一名、檀徒八名参加

集まった浄財七五、五〇〇円は地球救援募金へ

十一月二十九日 於天台宗務庁

天台宗人権啓発公開講座 委員 三浦章興参加

十一月十二日 於平川市浄土寺

天台宗一斉托鉢

山内より五名参加

集まった浄財一〇九、三二二円は平川市社会福

祉協議会並びに地球救援募金へ

□ 役職任免

(平成二十八年四月一日)

天台宗典編纂所編纂委員

圓乘院 佐々木邦世

天台宗典編纂所電子仏典員

瑠璃光院 菅野 康純

天台宗総合研究センター研究員

眞珠院副住職 菅野 澄円

(平成二十八年七月五日)

一隅を照らす運動副会長

中尊寺 山田 俊和

(平成二十八年十月二十七日)

審理局局長 菅原 光中

□ 経歴法階

(平成二十八年四月二十日)
山家会講経論義二之間勤仕畢

中尊寺

山田 俊和

□ 褒賞

(平成二十八年十月三十一日)
住職五十年勤続表彰

大長寿院

菅原 光中

□ 表彰

(平成二十八年九月二十九日)
法務大臣表彰

地藏院

佐々木秀圓

□ 教師補任

(平成二十八年四月二十一日)
大僧都

円教院

千葉 快俊

執務日誌抄

平成二十七年十二月一日

二十八年十一月三十日

平成二十七年

◇十二月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 東北観光プロモーションin台湾(5日、総務快俊 於台北市)
- 五日 平泉総社神輿会二十周年祝賀会(貫首・執事長 於武蔵坊)
- 七日 薬師会(讚衡蔵)
- 八日 一般社団法人みらいの子ども達へ 顧問荒殿明良氏来山(貫首・執事長 茶室)
- 九日 平泉文化観光振興基金運営

- 十一日 委員会(執事長 於役場)
- 十一日 平泉観光協合理事会(執事長)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十三日 骨寺村莊園米奉納
- 十四日 弥陀会(讚衡蔵)
- 十六日 秋期定例一山会議
- 十六日 中尊寺節分講中総会(執事長・法務 於泉橋庵)
- 十七日 第二五六世天台座主半田孝淳猊下密葬(貫首・随行亮王 於滋賀院門跡)
- 十八日 白山会(本堂)
- 十八日 初詣警備会議(管財五大 於泉橋庵)
- 十九日 千葉征紀氏瑞宝单光章受章祝賀会(執事長 於武蔵坊)
- 二十三日 讚衡蔵運営委員会
- 二十四日 第二五六世天台座主半田孝淳猊下追善法要(本堂)
- 文殊会(経蔵)

平成二十八年

◇一月

- 二十七日 大館錦神社参拝(貫首・晋照)
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼

一日 ○時 新年祈禱護摩供修行

- 七時半 東山町(若水送り)着
- 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
- 十時半 総礼
- 修正会 釈迦供(本堂)
- 冬堂籠り(5日 結業、開山堂)

国際興業グループ代表取締役会長小佐野隆正氏来山(貫首 茶室)



一隅を照らす運動全国一斉托鉢 陸奥教区 浄土寺 平成28年11月12日

- 二日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
修正会 業師供(峯業師 讚衡蔵)
十六時 謡初め(広間)
- 三日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
修正会 山王供(山天堂)
- 五日 十一時 元三会 慈恵供(本堂)
- 四日 修正会 熊野供(瑠璃光院薬師堂)
- 五日 修正会 文殊供(経蔵)
- 六日 修正会 大般若会(利生院弁財天堂)
修正会 釈迦供・月山供(釈迦堂)
寒修行(行者五名、町内托鉢。小寒、節分)
- 七日 修正会 白山十一面供(本堂)
大般若会(本堂)
- 八日 修正会 弥陀供(金色堂)
修正会 業師供(讚衡蔵)
一字金輪仏・千手観音法楽
修正会結願
- 九日 十三時半 恒例「金盃披き」
「平山郁夫展―仏教伝来の軌跡、そして平和の祈り―」
開關法要(貫首・宏紹・秀厚・澄

- 十一日 円 於盛岡市民文化ホール)
東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十三日 気仙沼市観光コンベンション協会
会長加藤宣夫氏他来山(執事
長挨拶)
- 十四日 慈覚会(御影供 本堂)
お経を読む会(貫首)
- 十五日 一関・平泉地域DMO設立
検討委員会(総務快俊 於一関
市民センター)
- 十六日 立正佼成会岩手県支部様七
名来山(貫首挨拶)
光勝院建設委員会
大分県竹田市市長首藤勝次来
山(中尊寺ハス株分けについて
執事長)
- 二十日 光勝院建設委員会
文化財防火訓練
- 二十四日 中尊寺文書調査報告(菅田慶
信氏 広間)
- 二十七日 光勝院建設委員会

- 二十九日 第二五六世天台座主半田孝淳猊
下本葬(貫首・執事長・随行亮王
於天台宗務庁)
- 三十日 平泉観光協会理事会(総務快俊)
復興大臣高木毅氏・復興庁審議
官大鹿行宏氏他来山(執事長
挨拶)
- 三十二日 『世界遺産・平泉』スピーチ
コンテスト(執事長 於ホテル
サンルート一関)
- ◇二月
- 一日 月次大般若(本堂)
光勝院建設委員会
- 二日 平泉ユニバーサルデザイン
観光推進シンポジウム(執事
長 於武蔵坊)
- 三日 節分会(日数心経 本堂)
- 五日 光勝院建設委員会
- 六日 恒例大節分会(関取隠岐の海関
招く。歳男歳女七十九名、町内園児)
- 九日 岩手日日新聞社代表取締役社長山

- 岸学氏来山(執事長挨拶)
如意輪講式修礼(十日、講師
海老原廣伸師・室生述成師 大広間)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十二日 復興大臣政務官高木宏壽氏来
山(執事長案内)
- 十三日 「平山郁夫展」鑑賞(貫首・参与
光中・秀厚 於盛岡市民文化ホール)
- 十四日 シンポジウム「平泉の魅力
とその歴史と未来」(執事長
於平泉文化遺産センター)
涅槃会御速夜(本堂)
- 十五日 涅槃会(本堂)
お経を読む会(大長寿院)
- 十六日 タイ旅行博・現地旅行社訪
問(二十日、総務晋照)
- 十九日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 二十一日 一般社団法人みらいの子ども
達へ一行来山(貫首挨拶・案内)
- 二十二日 平泉町上下水道事業運営協
議会(管財五大 於役場)

- 二十三日 平泉町世界遺産推進基金運
営委員会(執事長 於平泉文化
遺産センター)
- 二十六日 大林組東北支店長高槻幹雄氏
来山(貫首・執事長挨拶)
- 二十八日 平泉観光協会通常総会(執事
長 於平泉商工会館)
- 二十九日 気仙沼市本吉冠者「高衡会」
総会(執事長 於気仙沼プラザホ
テル)
- 二十九日 香港観光セミナー・商談会
(三月三日、総務快俊 於香港)
- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
一関・平泉地域DMO設立
検討委員会(執事長 於一関市
民センター)
- 九日 平泉世界遺産登録五周年事
業推進連絡会議(総務光聡 於
県南広域振興局)
- MATTAマレーシア旅行

- 十日 博・現地旅行社訪問(十六
日、総務晋照 於クアラルンプール)
- 十日 光勝院建設委員会
岩手県観光協会賛助会員全
員協議会(総務快俊 於ホテル
東日本盛岡)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
東日本大震災慰霊法要(貫
首・仁秀・澄元・随行亮王 於陸前
高田市小友地蔵尊)
- 三・一一平泉浄土のあかり
in毛越寺(貫首・快俊・宏紹・
秀法・亮王・宥司)
- 十四日 気仙沼観音寺名誉住職鮎貝眞清
師本葬(貫首他 於観音寺)
- 十五日 台湾南投市政府代表团来山
(総務快俊案内)
- 一関・平泉地域DMO設立
検討委員会(総務快俊 於一関
市民センター)
- 十六日 平泉世界遺産登録五周年事

- 業推進会議(執事長 於県庁)
 中尊寺菊まつり協賛会役員会
 十八日 春期定例一山会議
 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)
 岩手医大様、足澤輝夫様より
 中尊寺御遺体調査時のレン
 トゲン写真資料寄贈される
 お経を読む会(観音ノ秀法)
 二十日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
 二十三日 平泉古事の森育成協議会
 (管財五大 於役場)
 源義経公東下り行列保存会
 定期総会(総務快俊 於滝沢魚店)
 二十四日 開山会(護摩供 開山堂)
 二十八日 世界遺産登録五周年記念事
 業実行委員会(総務快俊 於役場)
 大分県竹田市教育長吉野英勝氏
 来山(中尊寺ハス伝達式)
 平泉ユニバーサルデザイン
 観光推進会議(執事長 於武蔵坊)
 平泉文化観光振興基金運営
 委員会(執事長 於役場)
 二十九日 夢乃風)
 熊本地震物故者慰霊法要
 (本堂)
 光勝院建設委員会
 平泉商工会青年部通常総会
 (法務宏紹 於武蔵坊)
 二十三日 桜友会清掃奉仕(北参道)
 天台宗陸奥教区寺院婦人会
 総会(執事長 大広間)
 二十八日 平泉世界遺産登録五周年事
 業推進連絡会議(総務快俊 於
 県南広域振興局)
 光勝院建設委員会
 西行法師追善法要(本堂)
 二十九日 第三十七回西行祭短歌大会(講
 師 吉川宏志氏「西行の息」)
 ◇五月
 一日 春の藤原まつり開幕
 藤原四代公追善法要
 稚児行列
 二日 開山護摩供(開山堂)

- 平泉町観光審議会(執事長
 於役場)
 三十日 光勝院建設委員会
 三十一日 讚衡藏運管委員会
 ◇四月
 一日 月次大般若(本堂)
 二日 天台陸奥教区仏教青年会総
 会(執事長 於毛越寺)
 四日 御修法「七佛薬師大法」(一
 十一日、貫首 於延暦寺)
 五日 平泉観光協会理事会(執事長)
 八日 仏生会(本堂)
 福聚教会中尊寺支部定例総
 会(執事長 広間)
 お経を読む会(円乗ノ五大)
 光勝院建設委員会
 仙台観光国際協会様来山
 (執事長挨拶)
 九日 第一期電王戦第一局(十
 日、棋士と将棋ソフトの対局 広
 間・大広間)
 郷土芸能奉演(一関 行山流舞
 川鹿子踊)
 春の藤原まつり「源義経公東下
 り行列」レセプション(貫首・
 執事長 於武蔵坊)
 三日 源義経公東下り行列(義経公
 役 俳優高杉真宙)
 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛
 剣舞)
 四日 古実式三番 「八島」
 狂言小舞 「竹生島」
 能 「鞍馬天狗」
 五日 古実式三番 「開口」
 狂言 「附子」
 能 「このぼりを作ろう(本堂)」



- 東日本大震災物故者追善回
 向月命日法要(本堂)
 十三日 束稲山さくらの会(管財澄円
 於役場)
 弁慶力餅競技保存会総会
 (参拝秀厚 於芭蕉館)
 十四日 春の藤原まつり交通警備会
 議(執事長・管財 於芭蕉館)
 八重樫忠郎さんの学術研究
 の成果を祝う会(執事長 於武
 蔵坊)
 十五日 岩手医大様、足澤輝夫様へ
 中尊寺ハス贈呈
 国土交通省岩手河川国道事務所長
 清水晃氏来山(貫首挨拶)
 十六日 檀徒総代・世話人会総会(執
 事長・法務他 於武蔵坊)
 十七日 恒例花まつり子供大会
 十八日 米沢市浄土宗西蓮寺様団参(本
 堂回向 円乗院他三名出仕)
 二十日 山家会(貫首 於延暦寺)
 平泉菊花会総会(管財五大 於
 六日 山王講(山王堂)
 七日 北上市和賀地区岩沢自治会主催
 「山菜を味わう会」(貫首・参
 与光中・邦世 於羽山ふれあいセ
 ンター)
 十日 ウェーサカ仏教会総会(法務
 章興 於一関松竹)
 十一日 天台座主森川宏映大僧正傳燈
 相承式(第二五七世、貫首・執事
 長、随行秀法 於延暦寺)
 真言宗豊山派光明院様団参(参
 与邦世挨拶・法務章興案内)
 中尊寺菊まつり協賛会総会
 (大広間)
 東日本大震災物故者追善回
 向月命日法要(本堂)
 光勝院建設委員会
 貫首 インタビュー(「北東
 北マガジラクラ」)
 大池跡発掘説明会(執事長・
 管財澄円)
 十四日 第十九回仙台青葉能(貫首・随

- 十五日 行秀法 於仙台電力ホール
お経を読む会(積善院)
- 十六日 天台宗海外伝道事業団理事
会・総会(貫首 於宗務庁)
岩手県観光協会賛助会員全
員協議会及び「いわて観光
の日」事業(総務快俊 於メトロ
ポリタン盛岡NW)
四寺廻廊総会(執事長・総務光
聰・法務宏紹 於電通東日本仙台
支社)
- 十七日 国際興業グループ代表取締役会長
小佐野隆正氏来山(執事長
茶室)
- 十八日 平泉観光推進実行委員会総
会(執事長 於役場)
衆議院議長大島理森氏一行来
山(参与光中案内)
句誌「たばしね」六〇〇号記
念式典(執事長 於長島公民館)
- 二十日 光勝院建設工事安全祈願法
要(本堂)
- 十六日 平泉世界遺産五周年推進会
議(執事長 於盛岡市エスポワ
ールいわて)
- 十八日 第二十四回ふるさと平泉会総
会(法務宏紹 於浅草ビューホテル)
- 十九日 光勝院建設委員会
- 二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)
- 二十一日 第六十六回「社会を明るくす
る運動」平泉町推進委員会
(執事長 於役場)
- 二十二日 J R東日本盛岡支社長嶋誠治氏
来山(貫首挨拶)
- 二十四日 秘佛一字金輪佛頂尊開扉並
びに熊本地震復興祈念法要
(讚衡蔵秘仏室)
- 二十五日 秘佛一字金輪佛頂尊御開帳

- 二十二日 中尊寺門前会総会(参拝秀厚
於平泉レストハウス)
- 二十三 淡交会県南支部様茶会(茶
室・庫裡広間)
- 二十四 曲水の宴(法務宏紹 於毛越寺)
- 二十五 平泉芭蕉祭全国俳句大会実
行委員会(総務快俊 於役場)
- 二十六 台湾台北市現地旅行社訪問
(於二十六日、総務照照)
- 二十七 光勝院建設委員会
- 二十八 平泉商工会通常総会(総務快
俊 於商工会館)
- 二十九 日中友好宗教者懇話会総会
(貫首 於東京プリンスホテル)
- 三十 天台宗陸奥教区第二部檀信
徒会総会(執事長 於武蔵坊)
- 三十一 月次大般若(本堂)
- 一日 岩手日報創刊一四〇周年並
びに制作センター完成祝賀
会(貫首・随行亮王 於盛岡グラン
ドホテル)
- 二日 貫首 インタビュー(読売新
聞奥州通信部)
- 三日 貫首 インタビュー(岩手日日
貫首)
- 四日 伝教会(御影供 本堂)
中国雲南省人民政府副省長
和段琪氏一行来山(貫首挨拶・
執事長案内)
- 五日 平泉町世界遺産推進協議会
総会(執事長 於役場)
- 六日 貫首 講演(東北職業能力開発促
進大会 於つなぎ温泉ホテル紫苑)
- 七日 光勝院建設委員会
- 八日 文化庁世界遺産室文化財調査官下
田一太氏来山(執事長 管財)
- 九日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十日 法華経一日頓写経会(本堂)
- 十一日 四寺廻廊法要(貫首・執事長他
於毛越寺)
- 十二日 岡山教区圓珠院様団参(常住院
案内)
- 十三日 達へ(ポスト除幕式(本堂前)
第五十五回平泉芭蕉祭全国俳
句大会(本堂)
平泉世界遺産の日平和の祈
り(貫首他 於毛越寺)
- 十四日 月次大般若(本堂)
- 十五日 観光庁広域周遊ルート形成
事業有識者一行来山(執事長
案内)
- 十六日 伊藤園「世界遺産大茶会」
(本堂)
- 十七日 伊藤園代表取締役会長本庄八郎
氏来山(貫首挨拶)
- 十八日 ウェーサカ式典(法務宏紹・章
興・参拝秀厚・総代世話人 於毛越寺)
- 十九日 淡交会県南支部様茶会(本
堂・本堂前)
- 二十日 平泉をきれいにする会総会
(管財五大 於役場)
- 二十一日 一隅を照らす運動理事会

- ◇六月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 岩手日報創刊一四〇周年並
びに制作センター完成祝賀
会(貫首・随行亮王 於盛岡グラン
ドホテル)
- 三日 中尊寺門前会総会(参拝秀厚
於平泉レストハウス)
- 四日 淡交会県南支部様茶会(茶
室・庫裡広間)
- 五日 曲水の宴(法務宏紹 於毛越寺)
- 六日 平泉芭蕉祭全国俳句大会実
行委員会(総務快俊 於役場)
- 七日 台湾台北市現地旅行社訪問
(於二十六日、総務照照)
- 八日 光勝院建設委員会
- 九日 平泉商工会通常総会(総務快
俊 於商工会館)
- 十日 日中友好宗教者懇話会総会
(貫首 於東京プリンスホテル)
- 十一日 天台宗陸奥教区第二部檀信
徒会総会(執事長 於武蔵坊)
- 十二日 月次大般若(本堂)
- 十三日 岩手日報創刊一四〇周年並
びに制作センター完成祝賀
会(貫首・随行亮王 於盛岡グラン
ドホテル)
- 十四日 達へ(ポスト除幕式(本堂前)
第五十五回平泉芭蕉祭全国俳
句大会(本堂)
平泉世界遺産の日平和の祈
り(貫首他 於毛越寺)
- 十五日 月次大般若(本堂)
- 十六日 観光庁広域周遊ルート形成
事業有識者一行来山(執事長
案内)
- 十七日 伊藤園「世界遺産大茶会」
(本堂)
- 十八日 伊藤園代表取締役会長本庄八郎
氏来山(貫首挨拶)
- 十九日 ウェーサカ式典(法務宏紹・章
興・参拝秀厚・総代世話人 於毛越寺)
- 二十日 淡交会県南支部様茶会(本
堂・本堂前)
- 二十一日 平泉をきれいにする会総会
(管財五大 於役場)
- 二十二日 一隅を照らす運動理事会

(貫首 於宗務庁)

光勝院建設委員会

六日 貫首 講演(日本の伝統を守る
会 於ホテルメトロポリタン仙台)

九日 北上川リバーカルチャヤー
ソシエーション(以下、RCA)

理事会・定期総会・第二十
二回文化セミナー(貫首・執
事長 於ペリーホテル)

十日 お経を読む会(利生院)

十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

十六日 「国見ジュニア応援団IN
平泉訪問」一行来山

富岡八幡宮神輿総代連合会
様来山(参与邦世案内)

富岡八幡宮神輿総代連合会
様との交流会(貫首 於武蔵坊)

十七日 光勝院建設にかかる旧宿院
银杏伐採祈願法要

清衡公御月忌(胎曼供 本堂)

平泉総社神輿渡御

◇八月

一日 月次大般若(本堂)

三日 釜石芸術文化協会様来山
(執事長挨拶・参与邦世案内)

四日 「平泉の文化遺産」拡張登録
検討委員と海外専門家との
意見交換会一行来山

天台宗世界平和祈願法要・
比叡山宗教サミット「世界平和の
祈りの集い」(貫首 於延暦寺)

十五日半(平和の鐘)打鐘

五日 長島時子氏来山(管財五大)

六日 中尊寺寺子屋(かんざん亭)

七日 夏堂籠り(十一日、結衆、開
山堂)

夏休み早朝坐禅会(本堂)

中尊寺寺子屋(かんざん亭)

十日 光勝院建設委員会

十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

十四日 第三十九回中尊寺新能
能 「橋弁慶」



十八日 京都市少年合唱団 奉納合
唱(本堂)

筑前琵琶橘花流日本橋会
奉納演奏(本堂)

十九日 立正佼成会花巻教会様来山
(貫首挨拶・執事長案内)

二十一日 光勝院建設委員会

二十三日 世界遺産登録五周年記念特
別展開連事業オープニング
セレモニー(執事長 於平泉文
化遺産センター)

貫首 講話「青空説法」参与光

狂言 「萩大名」

能 「葵上」

十五日 山崎理恵子氏、平和合作画
制作(本堂前)



平成二十八年度平泉町成人式
(総務快俊 於平泉中学校体育館)

十六日 オオフジッポ 奉納演奏
(本堂)

第五十二回平泉大文字送り火
日光輪王寺新能(貫首 於輪王
寺三仏堂境内)

祖師先徳讃仰大法会伝教大師御
生誕一二五〇年慶讃四箇法
要(参与光中 於延暦寺)

二十日 平泉町民号(二十二日、参拜
秀厚 於函館・江差方面)

三菱UFJ銀行副頭取片山一朗

中同行 於多開院伊澤家)

貫首 対談(達増拓也知事 於
多開院伊澤家)

平泉総社神輿会「神酒開き」
(執事長 於泉橋庵)

二十四日 鎌倉市議林中健治氏一行来
山(執事長案内)

夏休み早朝坐禅会(本堂)

台湾嘉義県文化観光局長呉芳銘
氏・嘉義市文化局長黄美賢氏
来山(執事長挨拶)

二十八日 平泉大文字送り火警備会議
(法務宏紹 於泉橋庵)

二十九日 桜友会清掃奉仕(開山堂)

三十日 天台寺桂泉観音出開帳(九
月十一日、讚衡蔵企画展示室)

天台寺桂泉観音出開帳開眼
法要(貫首他 讚衡蔵企画展示室)

中尊寺寺子屋(かんざん亭)

貫首 講演(国見町中尊寺連育
成会特別講演会 於福島県国見町
観月台文化センター)

氏他来山(総務快俊案内)

毛越寺施餓鬼会(円乗院)

二十一日 玉川学園ハンドベル部・
オーケストラ部 奉納演奏
(本堂)

戸津説法(今出川行雲師)聴
聞(貫首 於天津市東南寺)

二十二日 平泉町上下水道事業運営協
議会(管財五大 於役場)

施餓鬼会御逮夜(本堂)

二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)

二十五日 幕田魁心氏 書奉納

二十七日 「如意輪講式」を書くー千葉
方彩書作展(九月四日、本堂)

天台寺桂泉観音展示解説
(天台寺住職・文化財建造物保存技
術協会丸本英司氏 讚衡蔵)

二十八日 天台寺修理経過報告(広間)
貫首 法話(WCRP青年部会
様 かんざん亭)
蜂神社例大祭(総務光聴 於紫
波町蜂神社)

三十一日 龍玉寺施餓鬼会(執事長 於龍玉寺)

◇九月

一日 月次大般若(本堂)

瀬見温泉亀割観音祭礼(総務快俊 於最上町亀割観音堂)

平泉町花壇コンクール(管財五大)

光勝院建設委員会

二日 平泉観光協会理事会(執事長)

三日 泰衡公御月忌(金蔓供 本堂)

天台宗福島教区長命寺様団参(法務宏紹案内)

松尾芭蕉像作者戸津圭之介氏来山(参与光中案内)

毛越寺新貫主藤里明久師・執事長千葉慶信師来山(貫首・執事長挨拶)

四日 台風十号被災地見舞(執事長・参与秀圓 於久慈市・岩泉町) 本堂法話(貫首)

岩手国体炬火採火法要(貫首・執事長他 本堂)

五日 毛越寺薬王院故千葉秀海師弔問(貫首・随行章興)

八日 天台宗九州東教区様団参(執事長挨拶)

九日 台風十号被災物故者精霊追(善回向法要(本堂))

十日 天台宗陸奥教区第二部檀信徒会ミニ一隅会(於毛越寺)

平泉商工会長千葉庄悦氏旭日単光章受章祝賀会(貫首・総務快俊 於ベリーホテル)

五日沼葉師神社秋季例大祭(法務章興 於紫波町同神社)

十一日 本堂法話(貫首)

東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

十四日 光勝院建設委員会

十七日 藤原経清公命日祭(参与光中 於奥州市江刺区) 白符忌(本堂)

登録五周年記念式典(貫首・執事長 於平泉レストハウス)

貫首 講話(平泉伝統文化フェスティバル 随行秀法 於観自在王院跡)

参議院議員赤池誠章氏来山(管財澄円挨拶)

平泉町合併六十周年記念式典(貫首・執事長 於平泉小学校)

二十四日 月見坂車椅子体験会(二十五日、平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議)

東日本大震災復興祈念・世界遺産登録五周年中尊寺奉納神楽(石巻市 大室南部神楽/花巻市 岳神楽 本堂)



石巻市 大室南部神楽

◇十月

一日 月次大般若(本堂)

三陸郷土芸能奉演(大槌町吉里吉里鹿子踊り/大船渡市 甫嶺獅子舞)

二日 中尊寺通りホコ天まつり開会式(総務快俊 於中尊寺通り) 慈眼会(本堂)

柳之御所跡発掘調査説明会(管財五大)

中尊寺町民参拝「一字金輪佛頂尊と金色堂」(慰霊と復興の祈り)(金色堂・讃衡蔵秘仏室)

二十五日 本堂法話(貫首)

二十七日 一関・平泉地域DMO設立検討委員会(総務快俊 於一関市民センター)

二十九日 天台宗九州東教区様団参(法務宏紹挨拶)

三十日 光勝院建設委員会

東日本大震災復興祈念・世界遺産登録五周年中尊寺奉納神楽(奥州市 小田代神楽/普代村 鷺鳥神楽 本堂)



奥州市 小田代神楽

十八日 第六十二回平泉町敬老会(総務快俊 於平泉中学校体育館) 本堂法話(大長寿院)

十九日 秋田錦神社山田福男様一行来山(総務晋照挨拶)

赤堂稲荷例祭(護摩供)

二十二日 秋彼岸会法要(本堂) お経を読む会(金剛/晋照)

讚衡蔵運営委員会 「平泉の文化遺産」世界遺産

本堂法話(貫首)

四日 真言宗大覚寺派補陀洛寺様来山(貫首挨拶・法務宏紹案内)

五日 古事の森事業(管財五大 於奥州市衣川区)

六日 木ノ下寂後天台宗務総長・小森文道延暦寺副執行他来山(貫首・執事長他 於広間)

七日 中尊寺菊まつり協賛会役員会(広間)

八日 三陸郷土芸能奉演(山田町大浦さんき踊り/釜石市 橋野鹿踊り)

九日 本堂法話(貫首)

十日 貫首 中国訪問(十四日、日中友好宗教者懇話会訪中団第十九回日中韓仏教友好交流大会中国大会参加 於中国寧波市)

十一日 女川町民生児童委員協議会様来山(執事長案内)

東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

- 天台宗埼玉教区満蔵寺様団参
 十三日 台風十号被害、災害復旧ボ
 ランティア参加(快俊・秀厚・
 晋照 於岩泉町、亮王 於宮古市)
 十五日 三陸郷土芸能奉演(宮古市
 津軽石さんさ踊り/宮古市 法の
 脇獅子踊り)
 十六日 平成二十八年度岩手県消防
 協会一関地区支部消防連合
 演習(執事長 於平泉町内)
 本堂法話(真珠院)
 台風十号被害、災害復旧ボ
 ランティア参加(宏紹・宥司
 於久慈市)
 十七日 天台宗九州東教区様団参(執
 事長挨拶・総務光聰案内)
 北海道小樽光明院様団参(瑠璃
 光院案内)
 十八日 第二十四回平泉町社会福祉大
 会(総務快俊 於武蔵坊)
 群馬教区沼田部様団参(貫首挨拶
 ・宏紹案内)

- 二十日 菊まつり開闢法要
 二十一日 平泉観光協会理事会(執事長)
 二十二日 世界遺産登録五周年記念「念仏会
 (浄土の祈り)」(本堂)
 天台宗陸奥教区興福寺様団参
 (執事長案内)
 お経を読む会(釈尊院)
 二十三日 皇太子殿下行啓
 (貫首御案内 金色堂・讃衡蔵秘仏室)
 文部科学大臣松野博一氏来山
 (貫首挨拶・執事長案内)
 本堂法話(円乗院)
 二十四日 一関市花泉大門地蔵尊特別大
 祭秘仏参拝(貫首他)
 二十六日 六曜社主催文芸秀衡塗展「みちの
 くの言ノ葉」(三十日、於か
 んざん亭)
 天台宗九州東教区様団参(執
 事長挨拶・快俊案内)
 二十七日 台風十号被災地見舞(執事長
 於宮古市役所)
 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)

- 毛越寺貫主藤里明久師他金色
 堂参拝
 二十九日 貫首 法話(三越伊勢丹旅行社
 様 本堂)
 三十日 本堂法話(貫首)
 ◇十一月
 一日 秋の藤原まつり開幕
 藤原四代公追善法要
 稚児行列
 郷土芸能(一関 行山流舞川鹿
 子踊り)
 二日 菊供養会(本堂)
 お経を読む会(貫首)
 郷土芸能(江刺 行山流角懸鹿躍)
 三日 中尊寺能「狸々」、謡・仕舞
 (二葉きらり園、一関喜桜会奉納
 能舞台)
 郷土芸能(一関 京津畑神楽/
 平泉 達谷窟毘沙門神楽/衣川
 川西念佛剣舞)
 立正佼成会花巻教会長石森一江

- 氏・後藤友里氏来山(貫首)
 四日 天台宗栃木教区様団参(貫首挨拶
 ・葉樹王院案内)
 第七回世界遺産学習全国サ
 ミットinひらいずみ歓迎
 レセプション(執事長 於武蔵
 坊)
 五日 信金中央金庫様一行来山
 (執事長挨拶)
 第七回世界遺産学習全国サ
 ミットinひらいずみ(執事
 長 於平泉小学校)
 六日 秘佛一字金輪佛頂尊御開帳
 閉扉法要(讃衡蔵秘仏室)
 十日 写経奉納式(本堂)
 曹洞宗群馬県宗務所檀信徒
 研修会様団参
 十一日 東日本大震災物故者追善回
 向月命日法要(本堂)
 平泉観光協会理事会(執事長)
 十五日 菊まつり表彰式(かんざん亭)
 十六日 ホーチミンJAPANAFFA

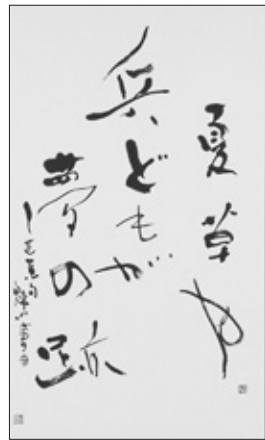
- IR・現地旅行社訪問(二十
 二日、総務晋照 ベトナムホー
 テミン市)
 光勝院建設委員会
 田代弘興猊下真言宗豊山派
 第三十三世管長就任・総本
 山長谷寺第八十七世化主晋
 山祝賀会(貫首 於ウエステ
 ン都ホテル京都)
 宮城県宗教法人連絡協議会
 様来山(執事長挨拶・総務光聰案内)
 一関地区法人会経済講演会
 (参拝秀厚 於武蔵坊)
 二十日 平泉ライオンズクラブ五十
 周年記念式典(執事長 於平泉
 小学校)
 二十二日 福聚教会陸奥地方本部詠
 唱・舞踊研修会開講式(参拝
 秀厚 於武蔵坊)
 中尊寺新能の会役員会(総務
 光聰 於観光協会)
 日光輪王寺慶讃法要(執事長

- 於輪王寺三仏堂)
 世界遺産サミット一行来山
 (総務快俊挨拶)
 二十二日 第三回世界遺産サミット(貫
 首・随行秀法 於アイーナ盛岡)
 二十三日 天台会御速夜(本堂)
 二十四日 天台会(御影供 本堂)
 二十五日 一関文化祭菊花展表彰式
 (管財 於一関文化センター)
 二十七日 天台宗海外伝道事業団ハワ
 イ訪問(十二月一日、貫首)

御奉納者 御芳名

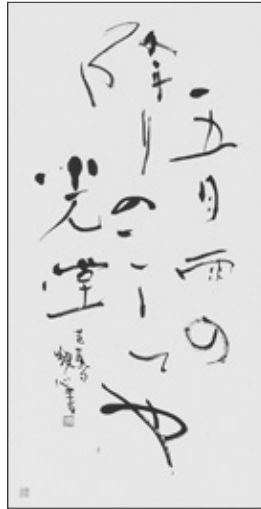
平成二十七年十二月〜平成二十八年十一月

- 一 書作品「南無大慈大悲大聖如意輪観自在菩薩」
 - 一 書作品「観自在」ほか八点(寺報グラフィア参照)
- 平泉町 千葉方彩様



- 一 書作品「五月雨の降りのこしてや光堂」
- 一 書作品「夏草や兵どもが夢の跡」

千葉県 幕田魁心様



- 一 お供餅搗き臼 一 据

平泉町 有限会社小岩材木店様



浄財御奉納者 御芳名

平成二十七年十二月〜平成二十八年十一月

- 関口一雄様 三万円
- 海鋒 守様 三万円
- 国際興業(株) 小佐野隆正様 十万円
- (有)平泉観光写真社様 二十万円
- 立正佼成会 盛岡教会様 三万円
- 立正佼成会 花巻教会様 三万円
- 荒川道雄様 三万円
- 泉養寺 海老原廣伸様 三万円
- (二世みらいの子ども達へ様 五十三万円
- 浄土宗岩手教区教務所様 十万円
- 岩手日報社様 十万円
- 片岡君子様 三十万円
- (株)NATION様 十万円
- 鈴木孝子様 三万円
- 大竹停子様 十万円
- 真言宗豊山派 慈公会様 七万円
- 裏千家 淡交会 岩手南支部様 十五万円

- 宇部和彦様 二十万円
- 和堂先生を偲ぶ会 佐藤芙蓉様 十万円
- 大聖院 多田孝文様 十万円
- 大聖院 多田孝善様 三万円
- (有)千葉恵製菓様 十万円
- 小暮道樹様 十万円
- 最勝寺様 五万円
- 青蓮院門跡様 五万円
- 毛越寺様 十二万円
- (株)伊藤園様 三百万円
- 菊池正仁様 三万円
- 城戸旭濤・草薨旭黎・押田旭蓉様 十万円
- (株)北都高速運輸倉庫東北様 三万円
- 釜石市芸術文化協会様 三万円
- 西光寺様 三万円
- 幕田魁心様 三万円
- (公)世界宗教者平和会議日本委員会青年部会様 三万円
- 長命寺様 五万七千円
- 永清寺様 十万円

文殊仙寺様

二十九万五千元

文殊仙寺 文暢様

三万円

川嶋印刷様

三万円

真言宗大覚寺派 補陀洛寺

三万円

湯本知代様

百万円

㈱三越伊勢丹旅行様

二十万円

真言宗豊山派 寶蔵寺様

三万円

立正佼成会 花巻教会 石森一江様

三万円

観音寺 千田孝明様

三万円

曹洞宗群馬県宗務所様

五万円

一関信用金庫平泉支店様

三万円

(順不同)

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成二十七年十二月〜平成二十八年十一月

平泉町 川嶋印刷様 菊地慶矩様

十万円

中野区 中村武司様

十万円

青森市 佐々木幸子様

八万五千元

一関市 (有)豊隆軌道

八万円

和泉市 辻林正博様

六万円

平泉町 (株)ゴトウ 千葉和正様

四万五千元

盛岡市 (株)光羽建設 伊藤光明様

四万円

平塚市 橋村秀雄様

四万円

旭川市 渡邊良弘様

四万円

秋田市 木村英夫様

三万七千元

一関市 (株)東北鉄興社様

三万円

平泉町 (株)フタバ平泉様

三万円

新宿区 (有)シー・エヌエス様

三万円

銚子市 (株)イクオリティー 石毛裕之様

三万円

平泉町 一関信用金庫平泉支店様

三万円

北上市 遠藤瀧子様

三万円

一関市 及川元一様

三万円

宮城県 小山利男様

三万円

栗原市 (有)金成工務店様

三万円

一関市 菊地弘道様

三万円

一関市 東北建工企業様 今野幸広様

三万円

一関市 山平様

三万円

一関市 一八 渋谷正幸様

三万円

一関市 (株)精茶百年本舗

三万円

藤沢市 矢鋪雅子様

三万円

宮城県 山口 昇様

三万円

二戸市 米沢 励様

三万円

青森県 工藤一男様

三万円

新潟市 松原晴樹様

三万円

水戸市 藤枝恵枝子様

三万円

大仙市 (有)ベル美容室 高橋紀美世様

三万円

黒石市 (有)池田不動産 池田陸奥男様

三万円

平泉町 岩間智子様

三万円

高崎市 大門屋様

三万円

金色ダルマ(特大)二体

法華経一日頓写経会

六月十一日(第二日曜日)午前十時より

六万八千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を供養するために行ったという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。 ☎〇一九一(四六)二二二一

▽ 昨年は、皇太子殿下中尊寺行啓、「平泉」世界文化遺産登録五周年記念・東日本復興祈願の秘佛一字金輪佛頂尊御開帳、八五〇年ぶりに復元された「如意輪講式」法要厳修、天台寺桂泉観音出開帳をはじめとして、記録すべき出来事が数多くあり、内局の全員が筆を執った一冊となりました。

▽ 六月二十五日の「平泉世界遺産の日」シンポジウム、基調講演で池内了氏が「文化というのは、まさに『無用の用』、と私は思うのです」と語られたのが心に残っています。

▽ 記念すべき年が終わり、本来的な寺のあり方、地域との結びつき等々、私たちが抱える課題に本腰を入れて取り組まなければならぬと感じています。

▽ 快く寄稿を引き受けてくださったみなさま、関係者の方々に心より感謝申し上げます。

(北嶺澄照)

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。
ぜひご利用ください (http://www.chusonji.or.jp/)。

このPDF版においては写真提供元の要請により、皇太子殿下中尊寺行啓写真(中扉及び十三ページ上)の掲載を見合わせました。

中尊寺(寺報)『関山』第二十二号

平成二十九年(二〇二七)二月一日

発行 中尊寺

(執事長 清水広元)

〒〇二九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二一

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)

白山神社能舞台屋根葺替竣工慶讃

喜多流 第四十回

中尊寺 薪能

平成二十九年八月十四日(月)



翁 佐々木宗生 所演

翁

佐々木多門
破石晋照

能羽衣

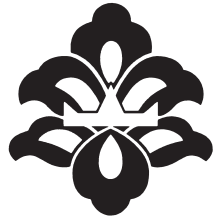
霞留
塩津哲生
森常好

和泉流
狂言 鍋八撥

野村万作
野村萬齋

半能 金札

佐々木宗生



〈発行 中尊寺〉